ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第146号

近世土人形の陽刻と陰刻 ---------- 加藤雄太 -------- 1

研究ノート　長岡京跡出土製塩土器についての一考察 ---------- 松井　忍 -------- 11

熨斗瓦の凸面に布目圧痕がのこるわけ

－大阪府島本町国木原遺跡・西浦門前遺跡の出土瓦の分析から－ --- 川嶋泰輔 -------- 23

共同研究　芝山古墳群出土方格規矩鏡の十二支銘帯について ---------- 菅　博絵 -------- 33

ＰＯＳデータからみた巡回展「発掘された京都の歴史2023」向日市会場の来場者像

---------- 加藤雅士・企画調整係 ------ 41

令和５年度発掘調査略報 ---------- 47

１．平遺跡第７次
２．佐屋利遺跡第３次
３．松田墳墓群
４．小中田古墳群第２次
５．老田遺跡
６．幾地城跡第１・２次、ソブ谷墳墓
７．上安久城跡第３次、上安久古墳群
８．稚児野遺跡第５次
９．千代川遺跡第35次Ｃ・Ｄ地区
10．南金岐遺跡第２次・千代川遺跡第36次
11．與能遺跡第４次
12．春日部遺跡第８次
13．井手遺跡第10次
14．法貴古墳群第１・２次（Ａ地区）
15．芝山遺跡・芝山古墳群第22次
16．芝山遺跡・芝山古墳群第23次
17．石原遺跡

長岡京跡調査だより・142 ---------- 70

現地公開・普及啓発事業（令和５年８月～令和５年12月） ---------- 72

センターの動向（令和５年８月～令和５年12月） ---------- 78

2024年1月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

堀 SD01 全景（東から）

56 号墳全景（北東から）

Ｖ－２号墳埋葬施設１（左）と埋葬施設２（右）木棺内遺出土状況

近世土人形の陽刻と陰刻

加 藤 雄 太

１．はじめに

土人形の時期差や地域差は成形技術の違いや同じモチーフにおける表現の差異によって判断できる(加藤2016、2022)。その中でも土人形の陰刻の表現と陽刻の表現の差異は、土人形生産体制における重要な転換点を示している。拙稿で、京都で出土する土人形は18世紀初頭(Ⅱ期)までは陽刻表現であったが、18世紀半ば(Ⅲ期)以降は陰刻表現が主体となることを指摘した。これは土人形に表現された人物の衣のしわ、亀の甲羅の表現などにおいて顕著に観察できる差異である。土人形の年代を決定しうる重要な属性であるものの、この陰刻表現と陽刻表現について、紙幅をとって、より詳細に説明する必要があると考えた。

本論は土人形の陰刻表現と陽刻表現と呼称する特徴を実際の資料の写真を通して観察し、表現の陰刻と陽刻がどのようなものであるのか、そしてどのような生産状況の違いから陰刻と陽刻といった違いが生じたのかを考えたい。

２．土人形表現における陰刻と陽刻

人形研究において、陰刻や陽刻といった用語の使用は、土人形に施された窯元などを示す刻印に対して用いられていた(中野1998・2005・2009)が、土人形の表現そのものに対して陰刻だの陽刻だのは、その使用がほぼない。このような状況にあるため、本稿の用語の使用が適切なのか疑問が残るが、本稿では以下のように定義付けた。

土人形の陽刻表現とは、人形の衣服のしわや毛髪などが断面凸形に浮き出るように表現された、凹型の元型から成形された資料を指す。陰刻表現とは、人形の衣服のしわや毛髪などが断面凹形に彫られた表現された、凸型の原型由来の資料を指す。この土人形の表現の差異は、土人形の元型の違いによって生じる。いずれも元型は、削り出して作出している。

陽刻表現の土人形は、木材などを凹形に削り込むことで作出した凹型に粘土を充填して成形される資料群である。陰刻表現の土人形は粘土塊などを削り、作出した凸型の原型に粘土を充てて雌型(凹型)を作出し、この雌型に粘土を充てて成形する資料群である。

凹型と凸型の土人形に衣服のしわなどの表現を一様に付加しようとしても、凹型を元型とする土人形と凸型(原型)を元型とする土人形では、彫り方の違いによって表現方法に違いが生じる。同じモチーフの衣服の表現であっても、凹型を削ることで表現する人形と、凸型(原型)を削ることで表現する人形では製品となる時点での文様の陰刻が逆になる。

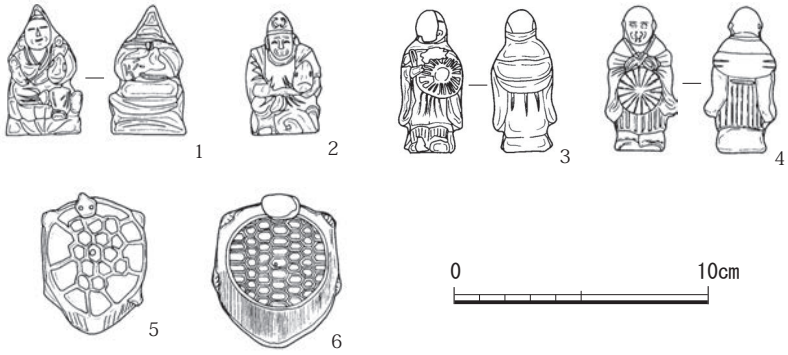
３．使用する資料について

本論は、こうした細かい話を実際の土人形資料を通して観察するものである。今回、例として取り上げたのは、同志社大学校地学術調査委員会によって行われた新島会館地点西区の発掘調査（同志社大学1990）で出土した土人形と、同志社大学歴史資料館によって行われた常盤井殿町遺跡の発掘調査（同志社大学2010）で出土した土人形である。いずれも拙稿（加藤2016・2021）にて基準資料として取り上げた遺構から抽出している。新島会館地点西区からはSK103とSK135より出土した土人形を扱う。また、常盤井殿町遺跡からはＳＫ2098より出土した土人形を扱う。

新島会館地点西区は京都御苑の仙洞御所の外、南東部に位置する。当地は天正年間におこなわれた豊臣秀吉による京都大改造の一環で寺町通りを形成した寺院の建ち並ぶ一角である。宝永５（1708）年に宝永の大火に罹災するまで佛光寺、清光寺が位置した。宝永の大火後、大工頭中井家の住まいするところとなり、幕末に至る。今回取り扱う資料は宝永の大火で罹災した寺院の廃棄土坑から出土した土人形である。宝永５（1708）年の大火までに生産され、大火により廃棄された資料と評価ができる。

常盤井殿町遺跡は今出川通りに面する同志社女子中高校の体育館建設に伴う調査である。当地は万治４（1661）年の大火を契機に二条家が転居してくる。その後延宝３（1675）年の延宝の火災と、天明８（1788）年の天明の大火の２度にわたり二条家は全焼している。今回取り扱う資料は天明の大火で罹災した二条家の火災後整理土坑から出土した土人形である。SK2098は屋敷が焼亡した後に集積して廃棄された罹災資料が出土した良好な一括性の高い土坑である。なお二条家邸は明治には皇学所や大学校が位置したが明治10（1877）年に同志社女子大学が二条家邸跡地を買収し、翌年に同志社女子大学校舎が竣工している。

京都で出土する土人形は、18世紀初頭までは陽刻の表現を主とした資料で構成されているが、18世紀半ば以降には陰刻の表現を主とした様相に変化することが分かっている。SK103とSK135が宝永５（1708）年の宝永の大火に伴い廃棄された資料、ＳＫ2098は天明８（1788）年の天明の大火にともなって廃棄された資料と評価できることから前者を18世紀初頭までの陽刻表現をもつ資料の代表例、後者を18世紀半ば以降の陰刻表現をもつ資料の代表例として扱う。(注1)



第１図　土人形　S＝1/3

付表　土人形の情報

番号	モチーフ	高さ	幅	奥行	遺構番号	調査地点	時期
1	恵比寿	5.1	2.9	1.7	SK135	新島会館地点西区	Ⅱ
2	恵比寿	4.8	2.9	―	SK2098	常盤井殿町遺跡	Ⅳ
3	西行	5.7	2.4	1.8	SK103	新島会館地点西区	Ⅱ
4	西行	5.7	2.8	2.4	SK2098	常盤井殿町遺跡	Ⅳ
5	蓑亀	2.7	5.8	4	SK103	新島会館地点西区	Ⅱ
6	蓑亀	2.2	6.1	5.1	SK2098	常盤井殿町遺跡	Ⅳ

高さ、幅、奥行の単位はｃｍ

４．資料の検討

今回の検討で使用する資料は、時間差によってポージングが変わるなど大きな変化のないモチーフである恵比寿と西行法師と蓑亀である。各資料の大きさに関しては表に掲載したとおりである(付表)。なお、土人形の規格差による表現の違いを極力排除するため、同一モチーフの大きさは極力同じないし近いものを選択した。

（１）恵比寿

恵比寿は福耳で烏帽子を被り、脇に鯛を抱える姿をしたモチーフで、大黒天と共に二福神ともいわれ、対にして祀る風習が各地に広く残る。

新島会館地点西区SK135から出土した陽刻の資料（第１図１）と常盤井殿町遺跡のSK2098から出土した陰刻の資料(同２)を比較する。まず顔をみる(写真１・２)。１は鼻を欠いているがその他のパーツは残存している。顔の中央から左右に伸びる稜線は、凹型をＶ字に溝彫して表現した「眼」である。両目を表現しているので鼻梁から左右それぞれやや屈曲しているが、２と比較して硬質な印象を受ける。口元に関しても同様に硬い印象を受ける。上唇は残存状況が悪いため判然としないが、下唇をみると眼と同じく溝彫している。２は両目が柔らかく屈曲し、稜も強くない。口元も深みのある立体的な表現である。陰刻であれば、凸型の原型から作出するので、柔らかな表現をめざして細かい調整を行うことができるが、陽刻は凹型であるために削れ過ぎてしまっては修正ができない。このため凹型はどうしても粗くなってしまうと思われる。

福耳も大きく異なる。１は横に大きく張り出した大きな丸い耳朶が特徴的であるが、２は大きな福耳ではあるものの、耳朶は横に張り出すこともなく耳環から耳朶は１と比べると小さくまとまる。凹型では平面的な材を削り、彫り込むことで人形を形作るので２のように小さく納めることが難しいのだろう。凸型の原型であれば、立体的に人形の構造を把握して、抜け勾配を勘案して作出できるが、平面的な下書きを彫り下げる凹型では、奥行きのある表現は抜け勾配を考えると難しく、削れ過ぎると修正が困難である。リスクの伴う行為となるため、わかりやすい平面的な表現に置き換えたのだろう。

写真１　恵比寿１の頭部まわり

写真２　恵比寿２の頭部まわり

写真３　恵比寿１の胴部まわり

写真４　恵比寿２の胴部まわり

写真５　恵比寿１の足・岩座まわり

写真６　恵比寿２の足・岩座まわり

続いて体部の表現を比較したい。写真３は袖なしと呼称すればいいのであろうか、簡素な着物を着用している。着物の胸部には稜の立つ表現で衣服と体の境目を表現している。写真３は肩口のあたりに段をつくり、身体と衣との境目を表現している。写真４は狩衣を着用しているので写真３と単純に比較できないが、写真３では確認できない衣服のしわが細かく表現されている。片切彫りのように土を削り柔らかさのある服を表現している。また写真では確認しにくいが、指の表現では、写真３は指が、レンズ断面状に盛りあがる稜の立つ表現方法を取り入れているのに対して、写真４では丸く残した手となる部分に細く溝を削り、指間を表現して、より自然な指を表している。

最後に指貫と恵比寿の座る岩の表現である。半跏する足が左右異なるが、いずれも指貫にしわを表現している。写真５は凹型を彫り込みながら指貫とそのしわを作出している。作出の手順としては土人形の指貫になる範囲を浅く削り込み、そこからしわの表現を付けたい両側の範囲を残して、内側を一段彫り込む。Ｏ字状に段下げした後に、Ｏ字状に掘り下げた内側をＯ字状に再度掘り下げるイメージである。写真６は履物や指貫を浮かし彫りして、境目に深めの削り込みを施している。指貫のしわは片切彫で表現している。凹型では表現方法に工夫を要したが凸形は比較的容易で細かな表現を可能としている。

これは岩の表現においても共通する。写真５では右足下に三本畝状に凹型を彫り込んだ盛り上がり部分がある。このほかの部分も彫り込むことでゴツゴツとした表現を志向していたとみえる。写真６では松の木を思わせるような湾曲する太い稜線が人形の左足下で枝分かれするように伸びる。これに岩のこまかなゴツゴツとした表現を施すために先の鋭い工具などで土を非常に細かく刺している。写真５においても細かく凹型を刺突することで岩の質感を表現できれば同じような方法を取り得たとしても不思議ではないが、凹型の材は焼成前の凸型原型の粘土よりは硬質で細かな表現を加えても製品に型押しして残しにくい素材であったのだろう。

（２）西行法師

西行法師は背に風呂敷を掛けた荷を負い、笠を持つ旅僧姿といった特徴を有するモチーフで、首が取れても背中の風呂敷は取れないことから盗難除けといったいわれがある。

新島会館地点西区SK103から出土した陽刻の資料と常盤井殿町遺跡2008SK2098から出土した陰刻の資料を比較する。

西行法師が手にもつ笠をみる。写真７では稜線が放射状に広がる表現を笠に施している。網代笠のように笠の中央には円を稜線で表現する。また笠には縁があり、稜線で表現されている。縁から笠の中央にのびる稜線はいずれも細長いレンズ断面状を呈している。元型である凹型の彫り込みの開始点と彫り上げた終点部分が細く浅いためこのように見えるのだろう。写真８にはそのような稜線はない。幅の広いＵ字の彫刻刀で削り取ったような浅い溝を笠の中央から端に向かって放射状に17条彫り上げている。これを笠の筋に見立てている。また、袖のしわを見てみると、写真７では右袖のしわが表現されない構図を選んでいるのに対して、写真８では両袖のしわが表現されている。凹型、凸型それぞれの特徴に応じた構図が選ばれていたことがわかる。

次に直綴を含む足回りの表現である。写真９では直綴のしわは凹型を片切彫りした稜線で表現されている。脚絆においては笠でみられた細長い稜線が用いられており、人形の全体を彫り込んだ後に細かな衣服の表現を表すために削ったのだろう。

写真10は直綴のほかも、浅く広口の彫刻刀で削り衣服の表現としている。削った原型の形がそのまま製品として現れるため土人形の個別部位の彫り込んだ方法を検討するのは比較的容易であ

写真７　西行法師１の胴部まわり

写真８　西行法師２の胴部まわり

写真９　西行法師１の足まわり

写真10　西行法師２の足まわり

写真11　蓑亀１の甲羅

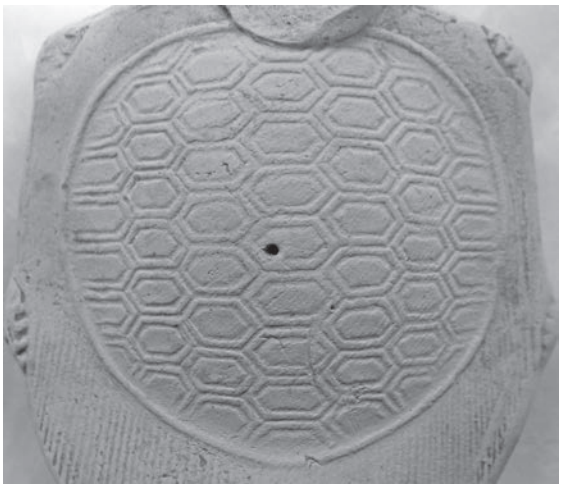


写真12　蓑亀２の甲羅

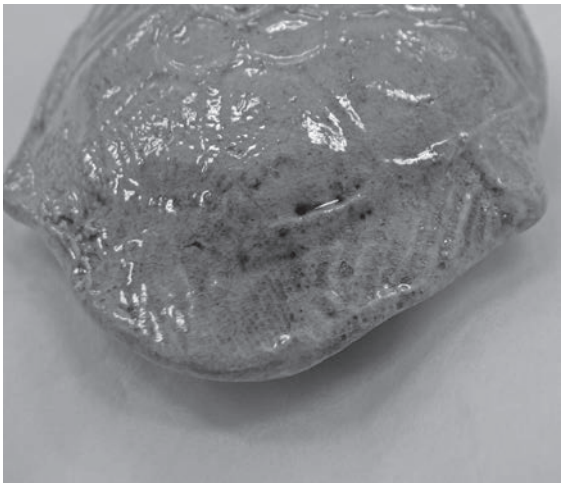


写真13　蓑亀１の蓑(藻)

写真14　蓑亀２の蓑(藻)

る。西行法師においても陽刻と陰刻の違いから同じ表現を作出しようとしても採れる技法が異なることがわかった。

（３）蓑亀

蓑亀は背中に蓑を羽織ったようにみえる、甲羅に藻がたくさん生えているモチーフで、長寿を象徴する縁起の良いものとして現代でも見かける。新島会館地点西区SK103から出土した陽刻の

資料と常盤井殿町遺跡2008のSK2098から出土した陰刻の資料を比較する。蓑亀は、上下型二枚を合わせて甲羅部分を成形し、別に頭部を手びねりで後補する。写真11では首を上方に伸ばし、頭部に串などの工具で刺突して目を表した痕跡がうかがえる。写真12は残存状況が悪いものの、似たような頭部が付随していたと思われる。また、人物を表す製品では底部に工具で刺突した痕跡が残されるのだが、蓑亀は甲羅の頂部に穴があけられている。このような人形に空けられた穴は、焼成時に内部の空気が膨張して人形が破裂することを防ぐ目的があると思われる。穴は人形のモチーフには不要な要素であるので多くのモチーフでは目立たない箇所に施される(注2)。甲羅頂部の穴は、お腹に穿孔しては都合が悪かったことを示しており、このことから蓑亀を水に浮かべる遊びが行われていたことが考えられる。第１図５は、釉薬が全面に施されており、人形内部に水が入らず、実際水面に浮かぶ。第１図６は、素焼きに胡粉を下地に絵具で彩色を施していた。これでは浸水してしまうと思われるので、６の生産された18世紀後半段階では浮かべる用途は想定されていないが、成形手順は５の生産された18世紀初頭段階のまま残ったのだろう。

写真11と写真12の甲羅の表現を比較する。写真11は亀甲の境目が稜線で示されている。稜線一つ一つははっきりと境目であることがわかる程度に、太くはっきりと彫られた印象を受ける。正六角形を組み合わせて甲羅を表しているが、縁甲板のあたりは台形状の亀甲を配置する。甲羅の縁も稜線ではっきりと区画がなされている。写真12は甲羅と藻の境目に浮かし彫りした稜線を施す。甲羅は横長の六角形を二重に重ねて一枚の甲板を表している。甲板の外側沈線は甲板の境を表現し、内側の沈線は甲板の年輪を表していると思われる。縁甲板は写真11と異なり横長の六角形をそのまま延長して配置している。蓑亀の後脚より後ろには、蓑状に長く伸びた藻の表現が施されている。写真13では、甲板境の稜線のように太い稜線が幾条か施されている。写真14は、藻の表現を細い沈線を幾条も入れることで表現している。

蓑亀の甲羅と藻の表現は陽刻の場合、凹型を削ることで表現するため、製品段階では稜線となって表れる。彫る道具にも依拠するのだろうが、その線は写真12と比較して太く力強い印象を受ける。対して陰刻の場合、粘土塊を削って原型を作出するので、甲羅は沈線となり、藻も沈線になる。元型の素材が写真11よりも柔らかかったからなのか、繊細で細かい線が施されているのが特徴である。

５．表現方法の変遷と陽刻と陰刻

３つのモチーフの陽刻と陰刻の違いを観察してきたが、先述したように土人形の同じモチーフにおける表現の陽刻と陰刻の差異は、凹型を削り作出するのと凸型を削り作出するのとの違いによって生じる差異である。ではその凹型と凸型の素材は何が選択されていたのかという点であるが、凸型に関しては伝世資料に土製の原型が残っている(注3)こと、発掘調査（京都市埋蔵文化財研究所2011）でも土製の原型が確認できていることから、基本的には土製であったと考える。

凹型に関しては今回の資料には取り上げていないが、木目の一部が型で起こされている例があることから基本的には木材を使用していたと考えている。これには酒田の鵜渡川原人形(注4)のように

写真15　鵜渡川原人形の木型（筆者撮影）
（公財）イケマン人形文化保存財団博物館さがの人形の家所蔵

近代でも使用されている事例がある。しかしながら、鵜渡川原人形の凹型には精緻な土を削り出して作出した資料も残されているので、京都の陽刻の土人形はすべて木材の厚板を使用して凹型を作出していたとは言い切れない。しかしながら、山田光二らが指摘しているように近世土人形が瓦から派生したとする仮説（山田・小橋1972）を根拠に、瓦製作に使用する木型の技術を土人形にも応用したと想定することは、十分に可能であろう。17世紀から18世紀初頭の土人形は厚板の木型を用いて成形していた。瓦の瓦当と同じように木材を彫り、人形の凹型を形作って、これから型起こしをしていたので、18世紀初頭までの出土する土人形の多くが陽刻の表現を有しているのではないか。

また、凸型の原型を作出するのは高度な専門性が要求される。土人形が立体的で複雑になればなるほど、使用する型の枚数は増える。２枚型の製品であっても抜け勾配を考え、製作しやすい構図にしなくてはならず、それまで製作していなかった職人がこれをはじめることは難しい。(注５) 京都の土人形であっても当初（Ⅲ期の資料など）は凹型由来のシンプルな構図から発展している。

土人形の表現に立ち返ると、蓑亀で顕著であったが、土人形の表現は陽刻よりも陰刻の方が精緻であった。土人形の型を作る技術が発展した結果という側面があるだろうが、そのほかに原型から製品までの収縮率の差異によって、違いが強調されているかもしれないということも指摘しておきたい。当たり前のことであるが、製品として出土する土人形は焼成を加えているので型抜きした段階から収縮している。陰刻の資料の場合、作出された原型は調整を終えてから焼成、原型に土を充てて作出する雌型も焼成、そして雌型から型抜きする製品も焼成する。彫刻されていた焼成前の大きさから原型と雌型、製品それぞれ仮に少なく見積もって10パーセントほど収縮したとすると、製品が完成する頃にはおよそ72.9パーセント程度の大きさになっている。対して陽刻の資料の場合、作出された凹型は木製なので焼成しない。この凹型に粘土を充てて型抜きした製品のみが焼成される。10パーセント収縮したとして90パーセント程度の大きさになる。18世紀初頭段階までの陽刻の製品の表現がやや硬く大振りに見えるのは凹型の彫り方や素材の影響もあ

るが、収縮率の影響を踏まえる必要があるだろう。

6. まとめ

出土する土人形の陽刻と陰刻についてみてきた。編年研究においてこれらは年代を示す指標の１つとなった。人形表現の陰陽は凸型由来と凹型由来の差異という型の違いでもある。京都の土人形は、瓦を祖業とする技術によって、凹型由来の陽刻の人形が生産され、その後凸型の原型を作出する体制に移り、陰刻の土人形が作られ、現代に受け継がれている。土人形の陽刻と陰刻から、それぞれの時代に取りえる手段で、よりよい表現を作出しようと多様な努力が積み重ねられてきたことがみえてきたと思っている。一見して、細かな違いに過ぎないが、多くの土人形のこれまで探られてこなかった側面を明らかにしうる可能性が提示されたように思われる。

謝辞　本稿を作成するにあたって、公益財団法人イケマン人形文化保存財団・博物館さがの人形の家に多大なご協力いただいた。記して謝意を表したい。

（かとう・ゆうた＝当調査研究センター調査課調査員）

注１　土人形の陽刻表現と陰刻表現の有無によってだけで地域や時間を二分することはできない。東北や北陸などの地域によっては陽刻表現をもつ土人形が 18 世紀以降も出土する例がある。また、京都市内や大坂においても 18 世紀後半以降に出現する 10cm に満たない土人形の中には陽刻表現をもつ土人形が確認できる。こうしたことから陽刻と陰刻が土人形の地域差、時間差を示す絶対的な指標といえないことが分かる。このような成形技法と土人形の有する表現･胎土など様々な側面から地域差･時期差などを判断しなくてはならない考古資料としての土人形の難しさが、一見研究対象として容易で魅力的な土人形の研究が続かない要因ではないかと考える。

注２　饅頭喰いなど幼児がモデルとなる土人形には、もみあげの部分を穿孔している例がある。これは幼児の髪形に寄せるため繊維を差し込むための穴である。また、釣り人や一部の天神には木製の釣竿や宝刀の柄を差し込むための穴を開ける例がある。

注３　京都で出土する土人形のほぼすべては現在伏見人形と称されている土人形の系譜に連なる資料群である。この資料群の原型や雌型は伏見人形窯元の丹嘉に伝製品が数多く残されており、奥村寛純らにより詳細がまとめられている（奥村 1976）。

注４　かつて木型の凹型を用いて作成されていた鵜渡川原人形は、山形県酒田市で作られ、現在も鵜渡川原人形伝承の会が伝承と保存活動を続けている。鵜渡川原人形は江戸時代の末期に作り始め、明治の中頃に土型に移行する。江戸時代のものは粘土を木型に入れ、形成し、干し固めた人形に胡粉を塗り、植物由来の顔料で彩色したという（北原 1993）。この時代の木型が伝世している。木型は長方形を呈する前後型で、片面の凹型の上と下には型同士を合わせたときにズレないよう凹と凸が施され、噛み合うようなっている。この前型と後ろ型の両型を合わせて成型する。

注５　大蔵永常『広益国産考』では京都で入手した土人形を「原型」にして土人形を作る方法を紹介している。入手した土人形の合わせ目に墨で目印をつけて、これに沿って凹型を作るのだという。すでにある製品であれば模倣は容易であるが、原型をはじめから作ることが困難であったとこが推察される。

参考文献

大蔵永常 1869『広益国産考』土屋喬雄校訂 1995　岩波書店

奥村寛純編 1976『伏見人形の原型』伏偶舎

加藤雄太 2016「近世京都の土人形―同志社構内出土資料を中心に―」江戸遺跡研究会『江戸遺跡研究』第３号

加藤雄太 2022「近世京都の土人形の基礎的研究」日本考古学協会『日本考古学』第 54 号

北原直喜 1993『鵜渡河原人形』郷土人形図譜 第４号、日本郷土人形研究会

（公財）京都市埋蔵文化財調査研究所編 2011『法性寺跡』

同志社大学校地学術調査委員会編 1990『同志社大学　徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No.22

同志社大学歴史資料館編 2010『常盤井殿町遺跡発掘調査報告書―近世二條家邸を中心とする調査成果―』同志社大学歴史資料館調査報告　第８集

中野高久 1998「刻印・箆書きがみる「玩具類」」『江戸在地系土器の研究』Ⅲ 江戸在地系土器研究会編

中野高久 2005「江戸遺跡における「亀」在印資料の流通と展開」『江戸時代の名産品と商標』（江戸遺跡研究会第 18 回大会［発表要旨］）

中野高久 2009「西日本出土の「亀」在印資料－江戸地域の様相差－」『江戸在地系土器の研究』Ⅶ 江戸在地系土器研究会編

（一社）日本人形玩具学会 2019『日本人形玩具大辞典』東京堂出版

山田光二・小橋保宣 1972「Ⅳ 京と近郊の生活３　仲間の成立」『京都の歴史５　近世の展開』藝書林 pp.572-573。

研究ノート

長岡京跡出土製塩土器についての一考察

松井　忍

１．はじめに

古代における内陸部出土の製塩土器は、古墳時代の沿岸部などでみつかる製塩土器とは異なり、器壁の厚いものが多数を占める。土器は、塩の生産地である沿岸部で作られた塩が入った状態で運ばれ、さらに中継地等において焼塩工程を行うこともある。

これらは「焼塩土器」とも呼ばれ、固形塩(堅塩)作成土器であるとともに運搬・保管容器でもある。

律令期の製塩土器については、積山洋[注1]が摂河泉出土資料を分析し、編年及び生産地の推定を行っている。また、畿内内陸部の遺跡から出土する資料については、岩本正二[注2]、岡崎晋明[注3]、山内紀嗣[注4]によって分類及び産地推定が試みられている。

一方、長岡京跡出土製塩土器の分類については、これまで山中章[注5]、秋山浩三[注6]、國下多美樹[注7]によって様々な分類が行われており、長岡京以前の都であった平城京跡出土製塩土器の分類については、西大寺食堂院から膨大な(総量337kg)製塩土器が出土したことを契機に、神野恵[注8]が宮・京ともに分析を行い、編年及び生産地の推定を試みている。

長岡京跡のその後の調査で出土した製塩土器の報告では、破片での出土が多い特徴から、西大寺食堂院の事例のように全体の形状がわかるものは少なく、報告の際にも統一された形状・型式の呼称が用いられておらず、表現等の理解が困難であるのが現状である。

そこで、これまでの分類を今一度整理した上で、長岡京跡において特に製塩土器が集中する地点とそこから出土する製塩土器の用途について考察を行いたい。

２．長岡京跡出土製塩土器の分類

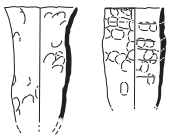
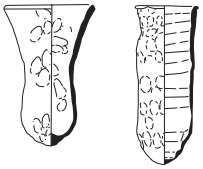
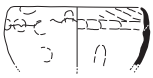
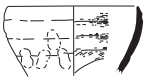
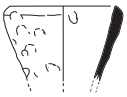
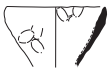
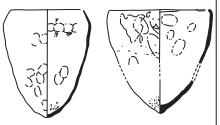
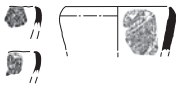
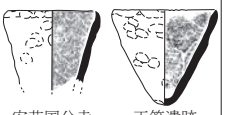
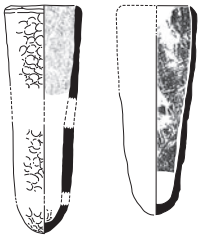
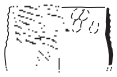
長岡京跡から出土する製塩土器の形状(フォルム)は、大きく分けて砲弾形(断面三角形状)と筒形がある(第１図)。報告や分類によって深鉢形と砲弾形、砲弾形と筒形が混在していることがあるが、今回は大きく分けてこの２つのタイプで呼び分けることとする。

第１図　製塩土器形状模式図

さらに、これまでの研究者による分類と長岡京跡での出土製塩土器の分類を比較すべくまとめたのが、付表１である。ただし、これらすべてが完全に一致するわけではないことを断っておきたい。以下、それぞれの特徴について概観する。

１類　筒形を呈し、口縁は一度くびれて外反または直立する。

付表１　長岡京跡出土製塩土器分類案(注9)

分類	長岡京出土製塩土器 S=1/10	生産地等出土製塩土器 S=1/10	形状	想定生産地	岩本 1983	岡崎 1984	山内 1984/1985	積山 1993	山中 1983	秋山 1986	國下 1990	神野 2013（西大寺/平城京・宮）	神野 2023
1	 L120　R1241	 田山遺跡　瀬戸遺跡	筒形	和泉・紀伊	Ⅰ－a	Ⅳ－D１・D２	Ⅲ－a・b	５a・５c	Ⅰ群b・d	A	a１・a２	Ⅱ－b・d／５類	j・k
2	R630・654	赤根川遺跡	砲弾形	播磨・淡路	Ⅰ－b	Ⅳ－C１・C２・C３	Ⅰ－a	１b	－	B・D	cか	Ⅰ－a／１類その他	e
3	 R512	 貴船神社遺跡	砲弾形	播磨・淡路	Ⅰ－c	Ⅳ－B１	Ⅰ－b－１	１か	Ⅰ群cか	F	d	－	h
4	 L120	 子犬丸遺跡	砲弾形	播磨・淡路	Ⅲ	－	Ⅰ－b－２	１か	Ⅰ群aか	G	eか	Ⅰ－d／4-2類	d・f
5	L120	 大浦浜遺跡　倉掛浜遺跡	砲弾形	備讃瀬戸（倉浦式）	－	Ⅳ－B２	－	－	－	J	a	Ⅰ－b	i
6	 L155	 安芸国分寺　正箱遺跡	砲弾形	備讃瀬戸・中部瀬戸内	Ⅱ	Ⅳ－A２	Ⅳ	６	Ⅰ群f・g	C	f	Ⅰ－e／６類	b
7	R630・654	 馬場長町遺跡　筏石遺跡	筒形	西部瀬戸内～北九州（六連島式）	Ⅱ	Ⅳ－A１	Ⅳ	６	Ⅰ群e・j	H	f	Ⅱ－f／６類	a
8	L120	 大浦浜遺跡	砲弾形か	不明（備讃瀬戸か）	Ⅳ－b	Ⅳ－G	Ⅴ－b	３	Ⅱ群a	Ⅰ	－	３類	－
9	L120	おそ越の鼻遺跡	筒形か	紀伊か	Ⅳ－a	Ⅳ－E２	Ⅴ－a	２	－	E	－	２類	－

内外面はナデによる調整。器壁は薄く、円磨した岩石を含む。生産地は田山遺跡(大阪府阪南市)や瀬戸遺跡(和歌山県白浜町)をはじめとする和泉・紀伊と考えられる。

２類　砲弾形を呈し、口縁は内湾するか直線状で、体部はやや屈曲する。内外面はナデによる調整。器壁は厚く、口径は大きい。１～３mmの砂粒を多く含む。生産遺跡ではないが、赤根川遺跡(兵庫県明石市)に類例があり、瀬戸内沿岸(播磨・淡路)のものと考えられる。

３類　砲弾形を呈し、口縁は内湾する。内外面はナデによる調整。器壁は厚く、口径は大きい。１～３mmの砂粒を多く含む。生産地は貴船神社遺跡(兵庫県北淡町)をはじめとする瀬戸内沿岸(淡路)と考えられる。

４類　砲弾形を呈し、口縁はやや直線状かやや内湾気味、端部は尖り気味になる。内外面はナデによる調整。胎土に赤色斑粒や籾殻を含む。生産地については、生産遺跡ではないが犬丸遺跡(兵庫県たつの市)に類例があり、瀬戸内沿岸(播磨・淡路)地域と考えられる。

５類　砲弾形を呈し、口縁部から少し下がった位置が最大径となる。口縁端部を巻き込むものもある。器壁はきわめて薄く、尖底となる。これらの特徴を持つ土器は「倉浦式」と呼ばれ、生産地は大浦浜遺跡(香川県坂出市櫃石島)をはじめとするいわゆる備讃瀬戸地域が考えられる。

６類　砲弾形を呈し、口縁部を巻き込むものがある。内面に布目が観察できることから、内型作りとみられる。胎土に雲母を含むものもある。生産地出土ではないものの、正箱遺跡(香川県高松市)や安芸国分寺跡(広島県広島市)などに類例があり、備讃瀬戸地域を含む中部瀬戸内と考えられる。ただし、小破片や底部近くまで残存しない個体の場合、７類との区別は難しい。

７類　筒形を呈し、口縁端部に外傾面をもつ。内面に布目もしくは布を引き抜く際の藁様の痕跡が観察できることから、内型作りとみられる。胎土に石英や長石を多く含む。いわゆる「六連島式」と呼ばれる特徴的な土器である。生産地については、筏石遺跡(山口県下関市)や、焼塩の生産地と考えられている馬場長町遺跡(福岡県京都郡苅田町)をはじめとする西部瀬戸内から北部九州と考えられる。

８類　全体の形状が分かるものはないが、外面にタタキが施される。胎土に石英を多く含む。生産地はこれまで不明とされていたが、大浦浜遺跡(香川県)でタタキ目を残す製塩土器の出土が認められることから、備讃瀬戸地域の可能性が残る。

９類　筒形を呈するとみられ、口縁はやや内湾する。口径は小さく、内面にハケが施されるものもある。出土例は少ないが内面ハケの特徴から、生産地については、おそ越の鼻遺跡(和歌山県加太市)の事例が挙げられ、紀伊の可能性がある。

以上のように分類したが、 長岡京跡で出土する製塩土器の生産地としては、和泉･紀伊、淡路、播磨、中部瀬戸内、西瀬戸内～北九州が候補に挙げられる。

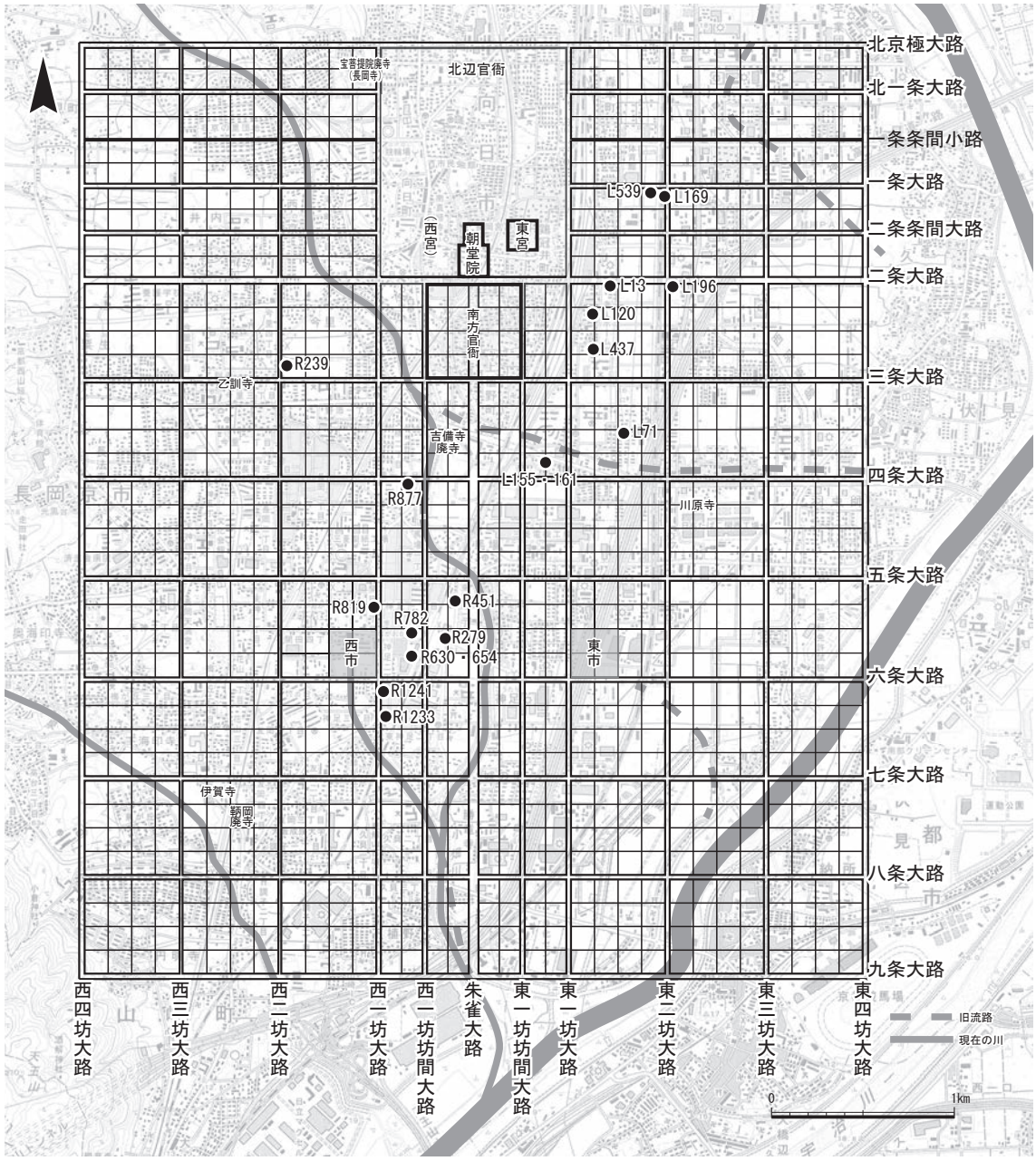
３．長岡京跡における出土傾向

長岡京期は、奈良時代を通じて製塩土器が最も盛んにつくられる時期である。ゆえに発掘調査を行うと量の多少はあれども、高い頻度で製塩土器を確認することができる。

付表２　長岡京跡製塩土器集中出土地点一覧(注10)

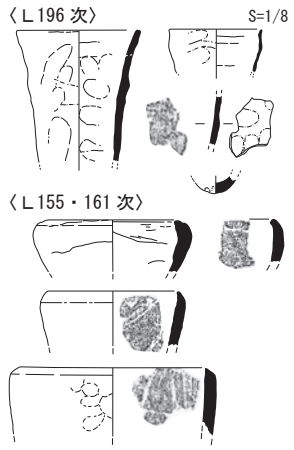
調査次数	（新）条坊名	遺構	出土地タイプ	出土量	和泉・紀伊	淡路	播磨	中部瀬戸内	西瀬戸内・北九州	不明・その他	備　考
					１・９類	２・３・４類		５・６類	７類	８類	
長岡京跡左京第 13 次	左京三条二坊八町	SD1301（宅地中央溝？）	官司	371 片出土（４種）	●	●					太政官厨家
長岡京跡左京第 71 次	左京四条二坊十一町	土坑 SK7113 溝 SD0254・7109、包含層	宿所	大量に出土（詳細は不明）	●				●		Ｌ 27 次の北側 「火」（兵士）の宿所
長岡京跡左京第 120 次	左京三条二坊二・七町	SD12031・12032・12028・12025（条坊側溝）、包含層	官司	各種多様（底部あるものも）	●	●	●	▲	●	● タタキ	北側に厨家
長岡京跡左京第 155・161 次	左京四条一坊十二・十三町	SD15522（町内溝か区画溝）・建物・包含層	離宮・高級官人邸宅	1167 点（11850 ｇ）		●	●	●	●		四町域宅地か・区画溝に集中、北側に小畑川旧流路
長岡京跡左京第 169 次	左京二条二坊十六町	ごみ処理土坑	官司	205 片・７種	●	●	●		●	●	食事関係官衙か（Ｌ 539 次と同一町内）
長岡京跡左京第 196 次	左京三条三坊一町	SD19601・602、603W/E・604W（条坊側溝）、包含層	離宮・高級官人邸宅	総量 4311 ｇ（図化 19 点）	●		●		●		Ｌ 214 次の西
長岡京跡左京第 437 次	左京三条二坊三・六町	条坊側溝 SD08・09	官司	242 片（1503 ｇ）、２点図化	●		●				菜園司関連施設（畝状遺構・池状遺構あり）
長岡京左京第 539 次	左京二条二坊十六町	SD54501（条坊側溝）	官司	766 片（図化６点）	●				● 布目		京内宮司の一つか（16 町の東側に食事を管理する現業官司あり。「料理」墨書土器（Ｌ 169 次と同一町内）
長岡京跡右京第 239 次	右京三条二坊十三町	SD23904（条坊側溝）	官司か	225 片	●				●		同一町内南西部で奈良前期の瓦葺建物（寺院か）あり
長岡京跡右京第 279 次	右京六条一坊三・六町	土坑 SK27960・27961・27964・27976	一般宅地か市周辺	大量に出土（図化 15 点）		▲	▲				何らかの祭司に使用か（一括投棄）
長岡京跡右京第 451 次	右京六条一坊一町	SE10	一般宅地か工房	200 点以上の破片（図化２点）	●				●		
長岡京跡右京第 630・654 次	右京六条一坊十一・十二町	溝 SD346：2005 点、SK348：252 点、SD18：5861 点、SX573 点	宿所市周辺	合わせて 8691 点 図化 17 点（完形に近いものあり）			●		●	● タタキ	四町域利用（宿所または市と考える説もあり）
長岡京跡右京第 782 次	右京六条一坊十一町	竪穴状遺構、溝（製鉄関連工房を想定）	工房市周辺	竪穴：71 点、溝 231 点（総数 625 点）	－	－	－	－	－	－	工房か
長岡京跡右京第 819 次	右京六条二坊二町	井戸 SE01、溝状土坑 SX02 ほか	一般宅地	井戸：882 点、土坑 461 点（図化 25 点）、小片 1363 点		▲	▲	▲	▲		小規模宅地における井戸祭祀か（口縁部小片多）・祭祀具少ない・土馬あり
長岡京跡右京第 877 次	右京五条一坊九・十六町	井戸 SE05 ほか	一般宅地か	382 片（図化８点）	●				●		曲げ物を三段重ねた井戸、凝灰岩の切石
長岡京跡右京第 1233 次	右京七条一坊十五町	土坑 SK1008	一般宅地市周辺	277 片（1240 ｇ）				●	●		公的施設か
長岡京跡右京第 1241 次	右京七条一坊十六町	竪穴建物 SH231、土坑 SK230	工房市周辺	竪穴 89 片（図化 14 点･1477 ｇ） 土坑 257 片（16 点図化（3533 ｇ）	●	●	●				工房か

▲は可能性のあるもの　－は実測図の掲載なし

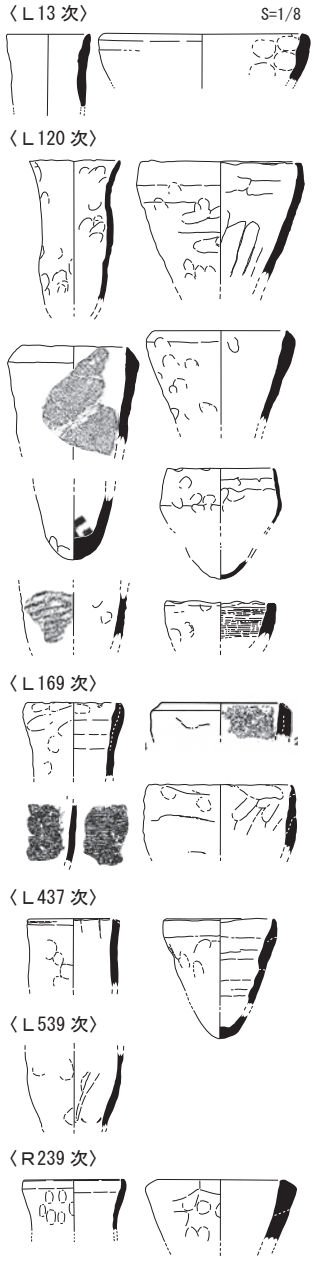


第２図　長岡京跡製塩土器集中地点分布図（R：右京、L：左京、数字は次数）

そこで、前項で確認した分類を踏まえ、長岡京跡から出土する製塩土器の出土事例を検証してみる。『日本塩業史研究遺跡一覧（京都府）』(注11)を参考に長岡京跡（宮内を除く）で出土している古代の製塩土器の出土地は、352地点にのぼる。各報告では、出土点数や実測図を記載しているもの、コンテナ数のみを記載、一覧表で数量を記載など記載内容にばらつきがある。その中から、少なくとも200片以上出土したと読み取れる地点が17地点確認でき、付表２及び第２図に示した。長岡京跡における製塩土器が出土する傾向については、山中章が検討を行っており、宮城西辺官衙や宮城の北辺を中心に広がる大蔵等の官衙域、京内では太政官厨家跡、宮外諸司の一角、邸宅等の例を提示し、出土した製塩土器が食卓塩として焼塩工程を経た固形塩（堅塩）を運んだものとされている。



第３図　離宮・高級官人邸宅出土製塩土器



第４図　官司関係出土製塩土器

では、改めて今回抽出した事例の中から、長岡京期以外のものや、包含層など二次堆積を除いたものから検討を加えてみたい。以下、出土地の呼称については、左京をＬ、右京をＲと略称する。

（１）離宮・高級官人の邸宅（Ｌ196・155・161次：第３図）

Ｌ196次調査地は左京三条三坊一町北西辺に位置し、二条大路を挟んだ南側に位置する。二条大路の北側には車持氏など貴族の邸宅があったとみられており、東二坊大路西側溝、二条大路北・南側溝から総量4,311ｇもの製塩土器が出土している。東二坊大路西側溝では護岸施設の近辺で壺Ｂ・銭などの祭祀遺物がまとまっていることから、祭祀に用いられた塩の一部である可能性もあろう。

Ｌ155・161次調査地は、北側のＬ353次調査の際に小畑川旧流路と条坊側溝を東に付け替えた痕跡が確認されている。製塩土器が多く出土したのはその南に相当する左京四条一坊十二・十三町で、二町分以上の宅地があったとされる中央の区画溝である。総量11,850ｇ中、半数以上が溝出土とされる。Ｌ155・161次調査地の宅地利用については、隣接するＬ353次の調査で、東側の沼地から「政所」「料理所」「盛所」などの墨書土器が出土したことから、近隣に食事にまつわる役所が存在した可能性が指摘されている。

これらのグループでは、和泉・紀伊・淡路・播磨・中部瀬戸内・西瀬戸内～北九州に分布する製塩土器が出土している。

（２）官司関係（Ｌ13・120・437・539・169、Ｒ239次：第４図）

Ｌ13次調査地（左京三条二坊八町）では、墨書土器や木簡等の検討から太政官厨家とされており、宅地内の溝から371片出土している。Ｌ120次調査地もその南西部（左京三条二坊二・七町）に近接しており、条坊側溝からまとまって出土している。厨家想定地近隣からの出土のため、調理・食品加工等に用いられていたと考えるのが妥当であろう。Ｌ120次出土のものは特に産地も複数あり、前項で分類したほぼ全種類の製塩土器が出土している。

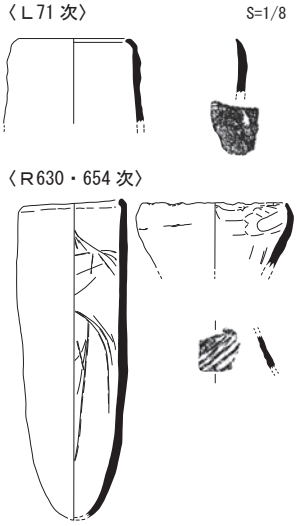
Ｌ437次調査地（左京三条二坊三・六町）では、三町で畝状遺構、六町で池状遺構が確認されており、周辺に菜園や池を管理する公的施設（園池司）があったと考えられている[注12]。製塩土器は、東二坊坊間西小路の両側溝から242片（1,503ｇ）出土している。

Ｌ539次及びＬ169次調査地（左京二条二坊十六町）では、Ｌ539

次の条坊側溝から766片、Ｌ169次の土坑から205片出土している。当地からは「料理」と書かれた墨書土器などが出土しており、南方にある離宮跡と推定されている山桃院（五・六・十一・十二町）の食事・食物を管理・生産する京内官司と考えられている。

Ｒ239次調査地（右京三条二坊十三町）では、三条大路の南側溝から225点の製塩土器が出土しており、その南側では廂付建物も確認されている。周辺の調査（Ｒ７・12次）[注13]では、やや一般邸宅と様相が異なる遺物も出土しており、断定はできないが、何らかの官司があったと考えておく。

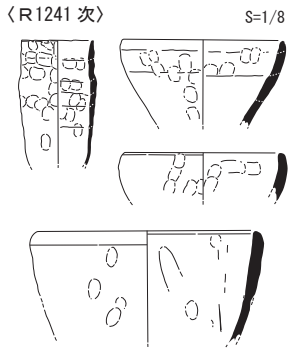
これらのグループでは、和泉・紀伊・淡路・播磨・中部瀬戸内・西瀬戸内～北九州に分布する製塩土器が出土している。



第５図　宿所関係出土製塩土器

（３）宿所関係（Ｌ71・Ｒ630・654次：第５図）

Ｌ71次調査地（左京四条二坊十一町）は町内の北西部に相当する。中規模の掘立柱建物と井戸が配置されているが、その井戸の一つから「火之飯酒」を請求する木簡が出土していることから、「火」を指揮・監督する官衙が想定されている[注14]。製塩土器は北側溝及び側溝に隣接する廃棄土坑と包含層から大量に出土した。この一画が兵士の宿所であったとすると、多くの人員の食事を賄う塩が必要であったと考えられる。



第６図　工房関係出土製塩土器

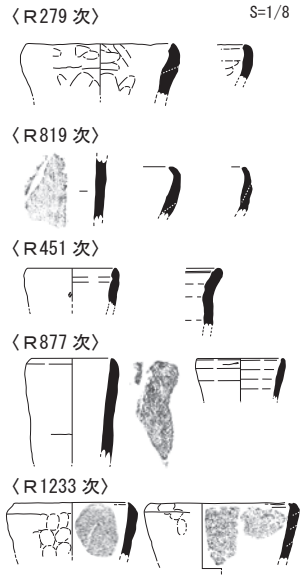
Ｒ630・654次調査地（右京六条一坊十一・十二町）は４町域を占有する大規模宅地に含まれる。製塩土器は宅地内溝や土坑などから合わせて8,691点出土し、長岡京跡でも最も多い出土量を誇る。町内には建物群が整然と並び、やや方位を斜めに振ることから、長岡京造営に関わり使役した労働者の宿所と考えられている[注15]。ここでは、使役用の馬の飼育もおこなわれていたと考えられ、そのためにも多くの製塩土器が持ち込まれたと考えられよう。

このグループでは、和泉・紀伊・播磨・西瀬戸内～九州産とみられる製塩土器が確認できる。

（４）工房関係（Ｒ782・1241次：第６図）

Ｒ782次調査地（右京六条一坊十一町）は、先述した４町域を占有する宅地の北東部に位置し、竪穴状遺構と土坑、及び北側に隣接する条坊側溝からフイゴ・鉄滓・炉壁などを含む大量の製鉄関連遺物とともに製塩土器（総数625点）が出土している。隣接するＲ796次調査においても、土坑等から比較的多くの製塩土器及び製鉄関連遺物が出土していることから、４町域の北東部に製鉄関連工房が存在したことが想定できる。

Ｒ1241次調査地（右京七条一坊十六町）では、炭などに混じって竪穴建物から製塩土器が多数（1,477ｇ・89点）出土し、その近くでは製塩土器がまとまって（3,533ｇ・257点）出土する土坑も確認されている。調査地は先述した４町域を占有する宅地の南西部に位置し、製鉄関連遺物は確認



第７図　一般宅地出土製塩土器

できなかったものの、何らかの作業工房であった可能性がある。

このグループでは、和泉・紀伊・淡路・播磨産とみられる製塩土器が出土している。

（５）一般宅地（R279・819・451・877・1233次：第７図）

R279次調査地で製塩土器がまとまって出土した４基の土坑は、右京六条一坊六町の東中央付近に位置する。周辺の調査から、町内を分割して利用していたと考えられるが、まとまった状態で一括投棄されていることから、何らかの祭祀が行われていた可能性が指摘されている。一町西隣のR782次調査地でも製塩土器が多く出土しており、工房との関連性も指摘できよう。

R819次調査地（右京六条二坊二町）では、宅地内の井戸から882点もの製塩土器が出土しているが、いずれも小片である。町内の各調査成果から、宅地北部を二分割、南部を三分割して利用していた可能性が指摘されており、その区画溝状の土坑から461点の製塩土器が出土している。井戸からは祭祀具は少ないものの土馬が出土しており、井戸の祭祀で使用された可能性もある。

R451次調査地（右京六条一坊一町）は町域南西部に位置している。北東部の調査では、小畑川旧流路等の影響でほぼ長岡京期の遺構が確認されていないが、井戸やわずかな柱穴があることから、居住域として利用されていたことがうかがえる。製塩土器は、井戸から200点以上の細片で出土しているが祭祀具は含まれず、食膳形態の土器や銅製品の鋳型なども出土していることから、井戸の祭祀というよりむしろ周辺の宅地や工房で使用されていた可能性が高い。

R877次調査地（右京五条一坊九・十六町）は、五条西一坊の西北隅部に位置し、掘立柱建物とみられる柱穴群や曲物を三段重ねた珍しい井戸などが確認されている。製塩土器は瓦や火を受けた凝灰岩の切石などとともに井戸から382片出土している。

R1233次調査地（右京七条一坊十五町）内では、製塩土器277片（1,240ｇ）を含む土坑が確認されているが、その約30m西側では西一坊大路に面して長岡京造営当初の公的施設と考えられる建物が確認されている（R1241次）。町内中央付近の区画溝の存在から、宅地を二分割して利用していた可能性がある。

このグループでは、和泉・紀伊・西瀬戸内～九州産の製塩土器が出土している。

以上、長岡京跡で出土する製塩土器の出土傾向について概観してきた。細片での出土が多いという条件上、報告書掲載の実測図からわかる形態から分類するのは困難であったが、分類できる範囲で生産地についても考察してみたところ、出土地のタイプによって特定の生産地を示すことはなく、普遍的な分布を示した。総体的には、大阪湾沿岸部（和泉・紀伊）と西瀬戸内～北九州産のものが認められる頻度が高いと言えよう。

４．製塩土器の中の塩の用途

長岡京で大量消費された製塩土器内の塩の用途としては、これまでに考えられてきた食用・祭祀用など多様な用途が存在したと考えられる。

塩は税の一部(庸・調)として中央に納められ、官人への給食または給与の一部(代用貨幣)として支給されていたとされるが[注16]、すべて土器に入った状態の塩(堅塩)で流通していたと考えるには容量が足りない。むしろ、税として納められた塩(木簡を伴う塩)は、主として籠などに入った状態(散状塩)で流通していたと考えるべきであろう。それは、木簡に頻出する若狭国のものと思われる製塩土器が都城ではほとんど見られないことが物語っている。しかしながら、不足分を市などの交易によって入手する際には、土器に入った状態の塩を使用することがあったであろう。では、土器に入った塩にはどのような用途が考えられるであろうか。

製塩土器に入れられて流通する塩は、固形の焼塩あるいは焼塩を前提とした「半固形塩」であったと考えられる。固形塩は生塩を土器に入れて焼き固めるため煙によって紫黒色となるが、生塩中には苦汁成分が含まれており、焼くことにより悪臭と舌を刺すような味は消えるのだという[注17]。土器に入って固められた固形塩の形態は、潮解によるべとつきを飛ばした焼塩として流通していたものであるが、焼塩を行う前の段階の「半固形塩」には苦汁成分が含まれており、苦汁は塩蔵効果を高めることから、保存食づくりに利用された可能性が高い。あるいはミネラル分を必要とする牛馬の飼養にも使われていたであろう。このように、苦汁を含む半固形塩の必要性も考えておくべきである。

また、土器に入った焼塩は井戸を含めた祭祀にも利用されていたのではないだろうか。すでに散状塩が流通している中で敢えて土器に詰めて運ぶ理由として、一つは土器の中の塩に触れない、穢れのない塩を使う場面を想定すると合理的である。実際、現在も伊勢神宮など守旧を重んずる宗教的行事には神宮祭祀用の塩として焼塩(固型塩)が用いられている。

一方、工房に伴う理由として考えられるものとしては、例えば火を扱う現業部門において、炭灰の有効利用のためにその近隣で「半固形塩」から焼塩を作る工程を行っていた可能性は十分にある。さらに失われた塩分を補給する目的で給付された給与の一部であったとも考えられる。そのように考えてみると、工房を含めた(西)市の周辺に製塩土器が集中する地点が多いことは理解できる。一方で東市の周辺には集中しないことについては、工業内容の差異とみることもできるだろう。

５．まとめにかえて

以上、長岡京跡から出土する製塩土器について、その出土事例を検証し、生産地の想定及び塩の用途についても述べてきた。土器に入って都城に運ばれてきた塩は、固形塩または苦汁を含む半固型塩で、固形塩は運搬の利便性や保存に適した形態であった。製塩土器の出土が著しい地点では、食品を加工するような料理所や牛馬の飼養及び、祭祀にも使用されていた可能性が高く、長岡京における多様な用途が想定できるだろう。

今回、製塩土器の生産地を推定するのに際し、「塩の会」に参加し平城京から出土した製塩土器を多数実見することができた。しかしながら、長岡京の製塩土器についてはほとんどが机上での作業となり、生産地等についても実見して判断したものではなく、詳細がわからないままのものがほとんどであった。これらについては今後の課題とし、更なる資料の検討材料としたい。

（まつい・しのぶ＝当調査研究センター調査課調査員）

注１　積山 洋 1993「律令制期の製塩土器と塩の流通―摂河泉出土資料を中心に―」『ヒストリア』第 141 号　大阪歴史学会

注２　岩本正二 1983「７～９世紀の土器製塩」『奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎

注３　岡崎晋明 1984「近畿地方の内陸部より出土の製塩土器」『ヒストリア』第 105 号　大阪歴史学会

注４　山内紀嗣 1985「８，９世紀における内陸地域の製塩土器」『天理大学学報』145

注５　山中 章 1983「４．長岡宮跡第 117 次（７ＡＮ 11 Ｅ地区）～北辺官衙～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第 10 集』向日市教育委員会

注６　秋山浩三 1994「８京都府（丹波・山城）」「１京都府（丹後）」『日本土器製塩研究』青木書店

注７　國下多美樹 ・ 清水みき 1990「長岡京跡左京第 169 次（７ＡＮＥＪＳ－７地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 30 集　向日市教育委員会・（財）向日市埋蔵文化財センター

注８　神野 恵 2013「都城の製塩土器」『第 16 回古代官衙･集落研究会報告書　塩の生産･流通と官衙･集落』（奈良文化財研究所研究報告 12）

注９　付表１の分類案については、秋山浩三 1994（前掲注６）を元に再分類を行った。

１類　秋山浩三 ほか 1986「長岡京跡左京第 120 次（７ＡＮＦＺＮ－２地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 18 集　向日市教育委員会

松井 忍ほか 2023「長岡京跡右京第 1201・1233・1241・1260 次（開田遺跡・神足遺跡・中世勝龍寺跡）発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 186 冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

（財）大阪文化財センター 1983『田山遺跡』

泉 拓良ほか 1979「和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和 54 年度 京都大学埋蔵文化財研究センター

２類　岩崎誠 ・ 木村泰彦 2000「右京第 630 次（７ＡＮＭＢＺ－２地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報　平成 10 年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 2002『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第 26 集

第 21 回播磨考古学研究集会実行委員会 2020『製塩土器からみた播磨』

３類　木村泰彦 1997「右京第 512 次（７ＡＮＯＴＪ－３地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報　平成７年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター

北淡町教育委員会 2002『貴船神社遺跡（製塩遺跡）』

４類　秋山浩三・亀割 均・山中 章・清水みき 1986「長岡京跡左京第 120 次（７ＡＮＦＺＮ－２地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 18 集　向日市教育委員会

兵庫県教育委員会 1989『龍野市 子犬丸遺跡Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告第 66 冊）

５類　前掲１類　秋山浩三ほか 1986

香川県教育委員会 1988「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』
日本塩業大系編集委員会編 1978『日本塩業大系　史料編　考古』
６類　松崎俊郎 1998「長岡京跡左京第 155・161 次（７ANFBD・FBD －２地区）～左京四条一坊十二・十三町・東一坊坊間東小路、鴨田遺跡、中福知遺跡～発掘調査概要」『 向日市埋蔵文化財調査報告書』第 47 集 向日市教育委員会・（財）向日市埋蔵文化財センター
（財）東広島市教育文化振興事業団文化財センター 2002『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅳ－第 12 次・第 13 次調査の記録』（文化財センター調査報告書第 36 冊）
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 1994『正箱遺跡・薬王寺遺跡：県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
７類　前掲２類と同じ
九州歴史資料館「馬場長町遺跡」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第４集
小野忠熙 1961「筏石遺跡」『山口県文化財概要』４ 山口県教育委員会
８類　前掲１類と同じ
９類　前掲１類と同じ
日本塩業大系編集委員会編 1978『日本塩業大系　史料編　考古』

注 10　山中 章ほか 1978「長岡京跡左京第 13 次（７ＡＮＥＳＨ地区）発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第４集 向日市教育委員会
山中 章・渡辺 博・清水みき・松崎俊郎 1982「長岡京跡左京第 71 次（７ＡＮＦＯＴ－４地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第８集 向日市教育委員会
秋山浩三・亀割 均・山中 章・清水みき 1986「長岡京跡左京第 120 次（７ＡＮＦＺＮ－２地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 18 集 向日市教育委員会
松崎俊郎 1998「長岡京跡左京第 155・161 次（７ＡＮＦＢＤ・ＦＢＤ－２地区）～左京四条一坊十二・十三町・東一坊坊間東小路、鴨田遺跡、中福知遺跡～発掘調査概要」『 向日市埋蔵文化財調査報告書』第 47 集　向日市教育委員会・（財）向日市埋蔵文化財センター
前掲注７
秋山浩三・國下多美樹・清水みき 1992「長岡京跡左京第 196・214 次（７ＡＮＥＧＺ－１・２地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 34 集　向日市教育委員会・（財）向日市埋蔵文化財センター
松崎俊郎・山口 均 2008「長岡京跡左京第 437 次（７ＡＮＦＧＢ－４地区）発掘調査報告」『長岡京跡 左京二条三坊・三条二坊』（向日市埋蔵文化財調査報告書第 77 集）（財）向日市埋蔵文化財センター
國下多美樹・木村啓章 2012「長岡京跡左京第 539 次（７ＡＮＥＪＳ－ 21 地区）発掘調査報告」『長岡京跡ほか』（向日市埋蔵文化財調査報告書第 92 集）向日市教育委員会・（財）向日市埋蔵文化財センター
岩崎誠 1988「右京第 239 次（７ＡＮＩＫＣ－４地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和 61 年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター
岩崎 誠 1989「長岡京跡右京第 279 次調査」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第４集 （財）長岡京市埋蔵文化財センター
中島皆夫 1995「右京第 451 次（７ＡＮＭＳＬ－５地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成５年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター

前掲注９岩崎 誠・木村泰彦 2000

前掲注９（財）長岡京市埋蔵文化財センター 2002

岩崎 誠 2004「長岡京跡右京第 782 次（７ＡＮＭＳＭ－３地区）発掘調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第 39 集（財）長岡京市埋蔵文化財センター

中島皆夫 2006「長岡京跡右京第 819 次（７ＡＮＫＳＴ－ 15 地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 16 年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター

木村泰彦 2008「長岡京跡右京第 877 次（７ＡＮＩＡＥ－ 14 地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 18 年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター

松井 忍ほか 2023「長岡京跡右京第 1201・1233・1241・1260 次（開田遺跡・神足遺跡・中世勝龍寺跡）発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 186 冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 11　日本塩業研究会編 2022「遺跡一覧（京都府）」『日本塩業史研究文献目録（考古編）遺跡一覧表』

注 12　國下多美樹 2013『長岡京の歴史考古学研究』吉川弘文館

注 13　同一町内の南西隅で行われたＲ７・12 次調査でも西二坊大路東側溝からまとまった量の製塩土器が出土している。遺物も風字硯や獣脚状三脚須恵器羽釜・壺Ｅが出土するなど、一般邸宅というよりも寺院関連とみられているが、瓦や遺物には長岡京以前のものも含まれており時期には注意を要する。

高橋美久二・吉岡博之・木村泰彦・李 進枝・長谷川浩一 1979「長岡宮跡昭和 53 年度発掘調査概要 右京 12 次 7AN1ST」『埋蔵文化財発掘調査概報（1979）』京都府教育委員会

注 14「火」とは諸国から集められた兵士の 10 人を一組とする生活・行動の１単位である

前掲注 10 山中 章ほか 1982

注 15　この４町域を市そのものと考える説（國下多美樹氏のご教示による）もある

注 16　廣山堯道・廣山謙介 2003『古代日本の塩』雄山閣

注 17　前掲注 16

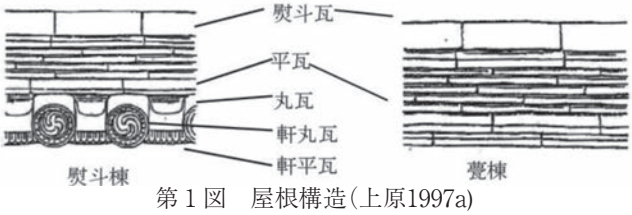
研究ノート

熨斗瓦の凸面に布目圧痕がのこるわけ
―大阪府島本町国木原遺跡・西浦門前遺跡の出土瓦の分析から―

川 嶋 泰 輔

1．はじめに

古くから瓦は建物の屋根素材の１つであり、今日では粘土瓦・金属瓦・セメント瓦などの多様な種類が存在する。その製作は粘土を一定の形に成形し、半乾燥ののちに焼成する技術を基礎とし、多くの手法が現在まで引き継がれている。



第１図　屋根構造（上原1997a）

韓半島から伝えられた瓦の製作技術は、6 世紀後半の飛鳥寺を建立した際に初めて用いられた。寺院をはじめとした建物を造営する場合には多くの瓦を葺かなければならず、瓦の大量生産に対応することが必要不可欠であった。そのため、当時の権力者によって生産体制が掌握され、寺院の造営に携わっていたとされる。

今回、対象とする瓦は中央官衙系瓦屋産の瓦である。中央官衙系瓦屋とは平安宮造営時に設置された瓦屋の系譜下にあり、木工寮などの中央造営官司に付属したと推定できる瓦窯のことを指している（上原1978・1987）。平瓦の製作技術は桶巻造りや凸型台の一枚造り、凹型台一枚造りないし凸型成形台積み重ね技法があり（上原1990、東1994・1996）、桶巻造りと凸型台一枚造りとでは布が使用されていた。凸型台や桶からの離脱材として飛鳥時代から布が用いられたため、凹面には布目圧痕がのこる。一方で凸型成形台積み重ね技法には凹凸面に離れ砂の痕跡が垣間見える（東1994・1996）。すなわち離れ砂は、布と同様に凸型台からの離脱という役割を果たすものといえる（原口・佐原1957）。

さて、本稿では平瓦と同様の技術で作成されたであろう熨斗瓦（第１図）に焦点をあてたい。熨斗瓦は棟の部分のみに葺かれるといった特徴を有し、棟から流れた雨水を軒下へと流す役割を担う（上原1997a）。その形態は平瓦と類似しているため、熨斗瓦あるいは平瓦の判別を行うためにも出土割合や大きさから総瓦葺き、甍棟や熨斗棟といった屋根構造について推測しなければならない（上原1988・1997a）。

第２図　対象遺跡の分布図（豊田2011・前川2021）

今回、軒瓦と熨斗瓦との出土割合が１対３に近く、長さが15.5cmと当時の平瓦に比べて短いことから甍棟の可能性がある広瀬遺跡・国木原遺跡・西浦門前遺跡（久保・坂根2011、久保・木村・坂根2012、久保・木村・坂根2013、木村・久保・坂根2022、

木村・岩崎・久保2023)を対象とする。

その年代観は13世紀前半頃に該当し、熨斗瓦の凹凸面には布目圧痕と従来の離れ砂の両者の痕跡が付着している。13世紀代には布から離れ砂へという使用道具の変遷が出現し(上原1990)、その過程を解明するためにもまずは製作技術を明らかにしてきたい。

２．先行研究の整理と問題の所在

(１)研究史の整理

瓦研究のなかで中核をなすのは、同笵・同文関係から供給体制や生産地の関係性について追及した軒瓦といえるだろう。戦後、平瓦を研究の遡上に載せるようになったのは、佐原眞氏の研究である。佐原氏は大阪府船橋遺跡から出土した桶巻造りの瓦を整理し(原口・佐原1954)、のちに使用道具と役割について体系的な知見を深めた(佐原1972)。

その後瓦の製作技術と生産体制との関係性に関する研究へと焦点がうつる。上原眞人氏は平瓦などにのこされる刻印や箆記号の痕跡を軸として、誰がどの製作過程で記したのかについて特定し、刻印瓦のある奈良時代や箆記号が記される平安時代後期までの変遷とその過程を論究している(上原1978、1984)。他方で、叩き板をもとに工人と製作道具との関係性は桶巻造りにはあるが、一枚造りには見当たらないとして五十川伸矢氏は生産体制のちがいを主張した(五十川1981)。これらの論考はのちに叩き板から製作集団を分析する方法が数多くの研究に用いられている(木立1987、梶原1999、岡田2010)。

研究の蓄積を背景に平瓦の製作技術や生産体制を復元した研究の成果は、今日の瓦研究の基礎となっている。さて、上述したように製作技術や製作集団の変遷に関する瓦研究の基盤は整いつつあったが、中世の中央官衙系瓦屋を対象としたものは数少なく、当該期の研究課題は多く残されていた。このような背景のなか、上原氏と東氏との研究成果により大きく進展する(上原1990・1995、東1994・1996)。『江戸名所図絵』の描写に注目した上原氏は回転する凹型台を成形台もしくは調整台として利用し、立ってミガキを行う場合には凸型台を調整台として併用する凹型台一枚造り(第３図左)があったとした(上原 1990)。

この技法で製作された瓦の凹面には叩きの痕跡や離れ砂の跡があり、その初源を13世紀後半の中央官衙系瓦屋産としている(上原1990)。しかし東氏は凹型台一枚造りの凹面には離れ砂とナデ調整の跡があり、製作のどの段階で凹面に付着したのかについて説明できないと述べ、凹面に無文叩きの痕跡がのこるものは凸型台の上に複数枚重ねて叩いたことによって叩きの跡が転写する

①離れ砂を撒く　②複数枚を積み重ねる　③半乾燥後、側面調整

第３図　凹型台一枚造りと凸型成形台積み重ね技法(上原1990、印南1987、東1994)

ことから、凸型成形台積み重ね技法(第３図右)を提唱した(東1994)。のちに、上原氏は考古学的証拠や文献・絵画資料の裏付けが凸型成形台積み重ね技法は乏しい(上原1995)と意見し、東氏は凹型台の一枚造りは絵画資料のみを頼りに論じて、民俗学などから窺える製作工程の痕跡について着眼できない(東1996)と意見している。

なお、中央官衙系瓦屋のひとつ南ノ庄田瓦窯産の採集瓦の凹凸面には離れ砂が付着し(東1994)、その後の発掘調査において高正龍氏は東氏と同様の見解を示しながらも平瓦の凸型台一枚造りが行われたことを提示している(高1998)。先述のように、詳細な分析眼をへて、中世の中央官衙系瓦屋産は離れ砂が撒かれていたという技術の一様相が明らかとなっている。

(２)問題点

以上、簡単に研究史の動向をまとめた。まず、研究史の論争から筆者の見解を明示する。

上原氏が提唱した凹型台一枚造りには半乾燥前の凸面に調整痕がのこるものについて説明ができない。さらには凹面にのこるナデ調整には離れ砂が撒かれたあとに行った痕跡が伺えることからも凸型成形台積み重ね技法を行ったのちに凹型調整台を使用したといえる(東1994・1996)。

つぎに問題点を明記したい。それは凹凸面ともに布目の痕跡がのこるが凸型成形台積み重ね技法では布が使用されたと明記されていないことである。したがって、その痕跡から製作技術について解明したい。

３．対象資料と方法論の提示

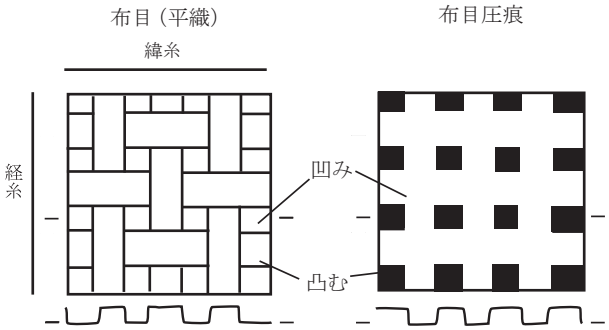
植物繊維から構成される布は２つの繊維を束ねてできあがる(沢田2005)。その織り方は経糸を開口させて緯糸を通すように上下にわけ緯糸を通す方法であるため、基本的な織り方は一本置きに交差する平織(第４図)である(東村2012)。平安時代後期には様々な織り方が垣間見えるが、13世紀代になるとそのほとんどが平織だと指摘されている(植山1977)。布目の痕跡を特定する条件には①粘土板(アラジ)を取り出すときにのこる糸切りとはことなり、平織特有の格子状の痕跡があること。②離れ砂が付着した跡とは違って経方向ないしは緯方向に繊維の跡が垣間見え(第４図)、それらが連続していることがあげられる。

以上の特徴を明確にするためにも、肉眼観察や写真撮影から布目圧痕の有無を明らかにしたい。

４．水無瀬離宮に関する遺跡から出土した熨斗瓦について

(１)遺跡の概要

島本町は旧国名の摂津国の北東端に位置することから山城国に近く、また周辺には淀川が流れていた。その立地から交通の要衝としての機能を有していた。山崎橋や山崎津といった国家的なインフラ事業が古代から整備



第４図　平織と模式図

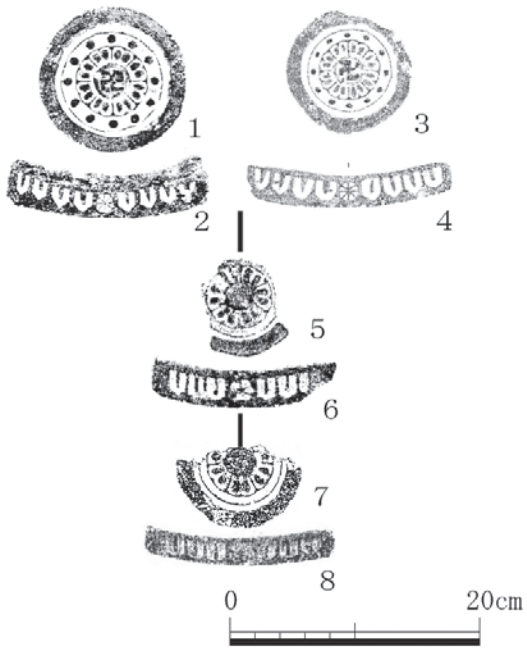
されてはいたが、中世になると山陽道のみ存続している。

正治２(1200)年、はじめて後鳥羽上皇が源通親の水無瀬山庄へ赴き(『明月記』正治二年九月二十六日条)、それ以降は多くの知識人や歌人を招いては頻繁に訪れていた。建仁２(1202)年５月や建保４(1216)年８月には周辺の水無瀬川が氾濫したことが起因で水無瀬神宮が廃置となる予定(『明月記』建仁三年一月二十八日条)であったが、丘陵側にあらたな新御所が造営(『仁和寺日次記』建保五年一月十日条)される。方違の影響から広瀬と改名してからも、当地へ訪れて承久の乱までの約20年間に後鳥羽上皇は90回以上も来訪している。

(２)発掘調査による成果

現在の西国街道の西側には広瀬遺跡があり中世前期の礎石建物が検出され、日常雑器の瓦器や土師器、白磁や青磁といった輸入陶磁器、中央官衙系瓦屋産の瓦が出土した(久保・木村・坂根2012、木村・岩崎・久保2023)。近年、豊田裕章氏や前川佳代氏によって当時の区画(第２図)が復元され、方格地割上に道路が整備されていたことから都市が成立していたことが明らかとなった(豊田2011・2016、前川2021・2022)。その方格地割の東端にある水瀬殿下御所は建仁２年と建仁４年の水害をうけたことが推測され(豊田2011、2016)、推定地である水無瀬神社の西南西4500mに広瀬遺跡が所在する。

その広瀬遺跡から南西4600mの２つの丘陵尾に挟まれた位置に西浦門前遺跡がある(木村・久保・坂根2022)。調査の結果から建物跡とされる柱穴跡、景石や滝口が検出され(木村・久保・坂根2022)、建保５(1217)年に水瀬殿上御所を造営した際の大石を建てて滝を増築した(『明月記』建保五年二月二十四日条)ことに該当している。広瀬遺跡と同様の出土遺物の構成が確認され、かつ当地へ頻繁に来訪していたことからも広瀬遺跡とともに後鳥羽上皇に関係する遺跡だといえよう。



１・２　常盤仲之町遺跡、３　広瀬遺跡、４　西浦門前遺跡
５・６　史跡・名勝嵐山、７・８史跡大覚寺御所跡
第５図　軒瓦の文様系譜

(３)遺跡の年代観

まず、広瀬遺跡や西浦門前遺跡の年代をもとめるにあたって既存の編年観の特徴を軸として検討したい。

はじめに、上原編年の13世紀前半ないし山崎編年の二期Ⅰ段階の特徴を明記する(上原1995、山崎2001)。両氏は常盤仲之町集落遺跡の瓦群を基準資料とし、軒平瓦の文様は剣頭文、瓦当裏面にある頸部接合部から頸部凸面にかけては曲げしわ、ないしは横方向のナデ調整するものが共存する(上原1995)。それと組み合う軒丸瓦の大きさは10~12cmであり(山崎2001)、東大寺東塔からは複弁八葉蓮華文軒丸瓦と「東塔廊嘉禄三年造之」銘軒平瓦とが

組みあって出土し、とくに1215年～1241年の間に東大寺寄進僧であった行勇は建物名と年代が明記された銘瓦を用いていた(上原1995)。

つぎに、上原編年の13世紀後半と山崎編年の二期Ⅱ段階は史跡大覚寺御所跡に基づいて分析を行った結果、軒丸瓦は複弁八葉蓮華文の文様部分の表現が退化し(上原1995)、それと組み合う軒平瓦の製作技術は従来から継続している瓦当面と平瓦部が共土の「完成された折り曲げ造り」で(木村1971)、頸部接合部から頸部凸面は横方向のナデ調整をしている(上原1995)。同時期の軒丸瓦の瓦当面の大きさは16cm前後と比較的大型である(山崎2001)。

広瀬遺跡や西浦門前遺跡をみてみると、多くは中央官衙系瓦屋産である。軒平瓦の文様は剣頭文が多数をしめ、頸部接合部から頸部凸面は曲げしわを残すものと横方向のナデ調整するものとが併存する。くわえて、軒丸瓦の瓦当面の大きさが８cm~12cmであり、同笵瓦ないしは同文瓦(注1)が出土していること(第５図)からも、常盤仲之町集落遺跡と同時期のものだといえよう。

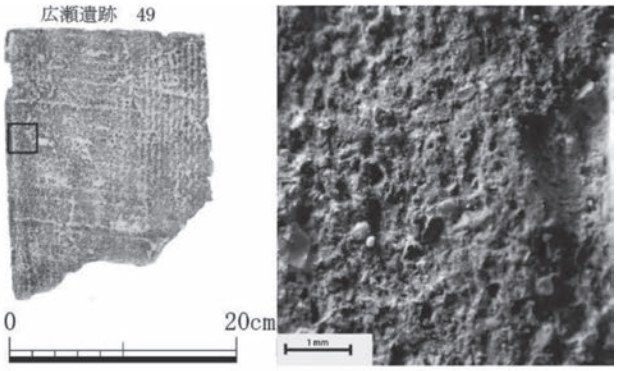
５．熨斗瓦の製作技術

(１)従来の見解

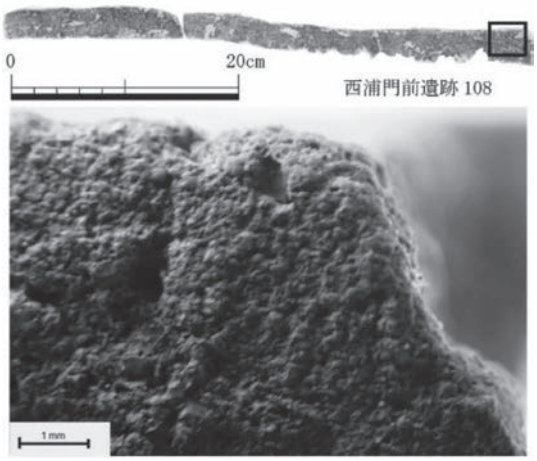
熨斗瓦(堤瓦)の製作技術は『延喜式』第34巻に記されており、焼成後に平瓦を二つに割ったもの、焼成前の凹面の中心部に印をつけてから焼成後に裁断したもの、生瓦の状態で熨斗瓦として成形したものといった３つの方法にわかれる(木村1941、上原1997a)。本章では熨斗瓦の製作技術を復元するためにも、まずは使用痕跡を明記していきたい。

付表　分析結果

<table>
<tr><th>遺跡名</th><th>遺物番号</th><th>遺構</th><th>凸面の痕跡</th><th>凹面の痕跡</th><th>広端面</th><th>狭端面</th><th>備考</th><th>報告書</th></tr>
<tr><td rowspan="4">山崎・東大寺・広瀬地区遺跡</td><td>22</td><td rowspan="2">立ち合い</td><td>糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td>糸切り、布目痕、離れ砂</td><td>布目圧痕、オサエ、ケズリ</td><td>布目圧痕、オサエ、ケズリ</td><td>凹面　広端部にケズリ、幾何学的な刻印</td><td rowspan="4">久保・坂根2011</td></tr>
<tr><td>23</td><td rowspan="3">叩き（縄目）、糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td rowspan="3">糸切り、布目痕、離れ砂</td><td rowspan="3">布目圧痕、オサエ、ケズリ</td><td rowspan="3">布目圧痕、オサエ、ケズリ</td><td rowspan="3">幾何学的な刻印</td></tr>
<tr><td>24</td><td rowspan="2">SX01</td></tr>
<tr><td>25</td></tr>
<tr><td rowspan="4">広瀬遺跡</td><td>46</td><td rowspan="4">SH29周辺</td><td>叩き（縄目）、糸切り、布目痕</td><td>糸切り、布目痕</td><td>布目圧痕、ケズリ</td><td>布目痕、ケズリ</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="4">久保・木村・坂根2012</td></tr>
<tr><td>47</td><td>糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td>糸切り、布目痕、離れ砂</td><td>布目圧痕、オサエ</td><td>布目痕、オサエ</td></tr>
<tr><td>48</td><td>糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td rowspan="2">糸切り、布目痕、離れ砂</td><td rowspan="2">布目圧痕、オサエ、ケズリ</td><td rowspan="2">布目痕、オサエ、ケズリ</td><td>/字の篦記号</td></tr>
<tr><td>49</td><td>叩き（縄目）、糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td>Ⅱ字の篦記号</td></tr>
<tr><td rowspan="12">西浦門前遺跡</td><td>T-10</td><td rowspan="12">SD01</td><td>布目圧痕、離れ砂、オサエ</td><td>布目圧痕、離れ砂、オサエ</td><td rowspan="12">布目圧痕、オサエ、ケズリ</td><td rowspan="11">布目圧痕、オサエ、ケズリ</td><td rowspan="11"></td><td rowspan="12">木村・久保・坂根2022</td></tr>
<tr><td>T-13</td><td rowspan="2">糸切り、離れ砂</td><td rowspan="3">糸切り、離れ砂</td></tr>
<tr><td>T-14</td></tr>
<tr><td>T-15</td><td>叩き（縄目）、糸切り、離れ砂</td></tr>
<tr><td>T-16</td><td>叩き（縄目）、布目圧痕、離れ砂</td><td rowspan="2">布目圧痕、離れ砂</td></tr>
<tr><td>T-17</td><td>布目圧痕、離れ砂</td></tr>
<tr><td>T-34</td><td>叩き（縄目）、糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td rowspan="2">糸切り、布目圧痕、離れ砂</td></tr>
<tr><td>T-49</td><td>糸切り、布目圧痕、離れ砂</td></tr>
<tr><td>T-50</td><td>糸切り、布目圧痕、オサエ</td><td>糸切り、布目圧痕、オサエ</td></tr>
<tr><td>T-51</td><td rowspan="2">糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td rowspan="2">糸切り、布目圧痕、離れ砂</td><td>報告書108</td></tr>
<tr><td>T-52</td><td>ケズリ</td><td>凹面　広端部にオサエ</td></tr>
</table>



第６図　凸面に残る布目圧痕



第７図　広端面に残る布目圧痕

（２）使用痕跡の明示と技法の復元

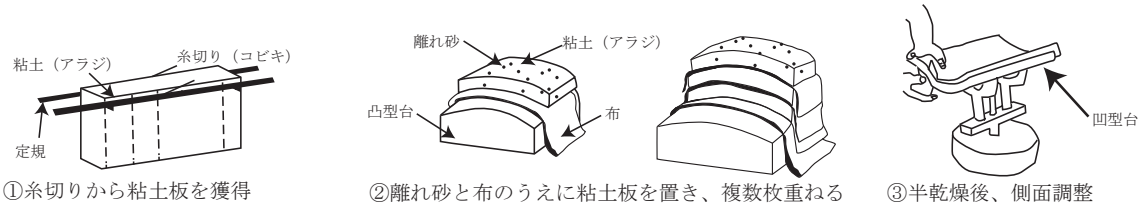
ここでは凹凸面、側面調整に残された痕跡をもとに製作工程順に検討をすすめる。観察の結果は付表に明記しているが、ここでは顕著な特徴について明述する。

まず、凸面の布目圧痕（第６図）の存在である。離れ砂と布目圧痕は型からの離脱材としての機能があるものの（原口・佐原1954、浦林1960）、離れ砂の砂粒自体が瓦に付着する場合が多い（上原1990）。国木原遺跡や西浦門前遺跡の破片資料には胎土と表面に付着する砂との間で差がうかがえ、それは離れ砂が使用された傍証となっている。（久保・坂根2011、久保・木村・坂根2012、木村・久保・坂根2022）。その凹凸面のほかに、広端面から狭端面にかけての側面（第７図）にも布目圧痕がのこる。

なお、凸面に布目圧痕がある瓦は７世紀後半の大和地域や８世紀初頭の能登国分寺跡、塔ノ熊窯跡や大内田廃寺の一堂宇から出土し（七尾市教育委員会1986・1989、村上・綿貫・吉田1989、高畑1983）、製作技術の復元が行われている（進藤1976、大脇1981、高畑1983、中井1985）。

一例をあげると、大内田廃寺の瓦は一次成形を凸型台一枚作りののちに、二次成形や調整台を布が敷かれた凹型台の上で使用したとしている（高畑1983）。

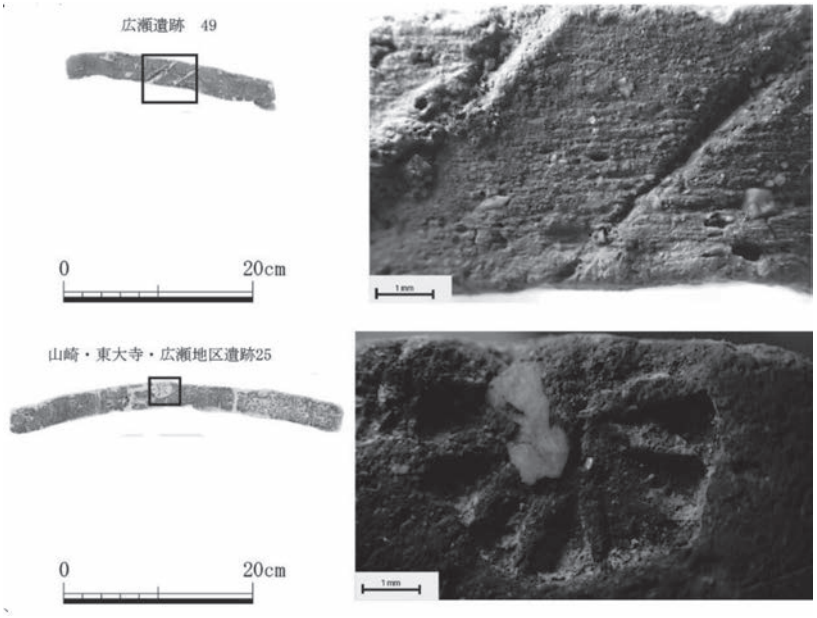
ではなぜ筆者は凸型台一枚作りではなく、積み重ね技法と提示するのか。中央官衙系瓦屋のひとつ南ノ庄田瓦窯には凹面の陰刻のリプリントがみられず、凸型台一枚造りだとしている（高1998）。南ノ庄田瓦窯と同様に陰刻のリプリントは広瀬遺跡や西浦門前遺跡にはみあたらない。しかしながら凸面の両部にて複数枚重ねてのこる粘土の盛り上がりがあること（東1994）、離脱材の離れ砂と布が凹凸面ともにのこること。加えて凸面から側面へと連続して布目痕があること（第



第８図　凸型成形台積み重ね技法の復元

６図、第７図）からも積み重ね技法であったと筆者は推測する。

最後に製作工程（第８図）を概観したい。①目付という物差しで粘土板（アラジ）の大きさを測定し、糸切り（コビキ）を用いて粘土板を獲得する。②その粘土板を一次成形では凸型成形台にて凹凸面に布を置いてから離れ砂を撒いて、複数枚の粘土板を積み重ねる。その際に叩き板を用いて形を成形するものも存在する。③半乾燥後の二次成形は凹型調整台の上にて粘土板の調整を行い、ゆがんだ箇所を矯正させて側面調整を行うといった大まかには３段階に分かれて行われる。



第９図　狭端面での箆記号と幾何学の布目圧痕

当時の平瓦とはちがって、広端面から狭端面にかけて内側にはいる形態をしている。さらには焼成後に打ち欠いた痕跡がないことから予め熨斗瓦に作成されたのではないだろうか。

（３）箆記号か幾何学的な刻印か

製作個人が生産に関与し、その作業量を判断するにあたって12世紀中ごろの中央官衙系瓦屋産では箆記号が（木村1971）、12世紀末に重源が建てた栢杜遺跡の方形堂にともなう南都系瓦屋産には幾何学的な刻印がある（杉山ほか1974、上原1997a）。両者の痕跡を有するものが国木原遺跡から出土している（久保・坂根2011、久保・木村・坂根2012）。

分析の結果からは凹凸面にのこる製作技術の痕跡、肉眼観察による胎土や色調、焼成方法は箆記号と刻印の違いに対応せず、むしろ同様の痕跡を示していたこと（第９図）が判明した。

つまり、熨斗瓦は同様の技法や粘土を適用していたといえよう。南都系瓦屋産の特徴である暗灰色で硬く焼き締められた痕跡と相反することから、生産地を分けて作成したのではなく工人が入り乱れた状態、あるいは同様の色調のものが意図的に特定の供給地へとまわされていたこともいえる。この見解については他の供給地との比較[注2]をすることで明らかとしたい。

６．おわりに

本稿では、広瀬遺跡と西浦門前遺跡で出土した熨斗瓦から製作技術について言及してきた。13世紀前半の中央官衙系瓦屋産熨斗瓦の製作技術は凸型台の上にアラジをおき、そのアラジの上に離れ砂と布とを重ねて、複数枚のアラジを重ねるといったものである（第８図右）。側面には布目圧痕やケズリ調整の痕跡がうかがえる。このことからも凸型台成形台にて布をたれ下げたのちに、

半乾燥後に凹型調整台にて調整していたのではないだろうか(第８図)。くわえて凸型成形台積み重ね技法の離れ砂のみ残る技法ではなく、砂と布を同時に利用したことから従来にはなかった見解である。

製作技術を解明することは技術の変化や系譜を解明することにつながることはいうまでもない。この技法がみられる 13 世紀には製作技術が変化する過渡期とし(上原 1995)、それ以降になると室町時代の金閣寺出土瓦や1236年の東福寺創建時に使用された大型の平瓦を代表するように離れ砂が主流となり(東1996)、戦国時代まで布目が使用される。当時の社会分業のあり方、ひいては中央官衙系瓦屋の衰退と南都系瓦屋の繁栄といった生産体制の動向を解明することにつながる。

では、なぜ当時の技法は離れ砂のみではなく砂と布を同時に利用したのか、幾何学的な刻印と箆記号とのちがいは胎土や焼成技術、製作技術の観点からは生じなかったのか。それらは院政期から武家社会という政治体制の変化、あるいは南都系瓦屋を代表する瓦工人の職人化への動向が影響しているのではないかと筆者は考察する。単純に資料をかき集めてその特徴を列記するのではなく、抽象化した上でさらに中央官衙系瓦屋産の俯瞰的な見解を解明することを今後の課題としたい。

謝辞

本稿を草するにあたり、資料の実見に際して島本町教育委員会の久保直子氏、小出匡子氏、迫田圭一郎氏には多大なるご配慮を賜った。最後にカメラの操作に関して奈良大学文学部文化財学科小林青樹教授、立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻木立雅朗教授、当調査研究センター小池寛氏にご教授をうけた。未筆であるが記して感謝の意を表する次第である。

（かわしま・たいすけ＝当調査研究センター調査課調査員）

注１　同笵瓦を特定することは容易ではなく拓本や写真のみでは確信できない。そのため、「同文異笵」、「同一文様系譜」と定義付けている（上原 1978)。同文異笵とは同じ文様構成細部の表現は同じではあるが細部の表現は同じであり、同一文様系譜は細部の文様構成がことなるものを指している。同笵か判断することができない文様を同文としている。
今回、対象とした広瀬遺跡・西浦門前遺跡は常盤仲之町集落遺跡と同様の文様構成のある軒瓦が出土している（第５図）ため、同時期に生産されたと推測する。

注２　平安京左京九条二坊から出土した未報告の熨斗瓦には幾何学の刻印、軒瓦や丸瓦にはヘラ記号の痕跡がみられる（東 1994)。史跡大覚寺御所も同様に熨斗瓦には幾何学の刻印があり、その産地を南都系瓦屋産とした。

参考文献

東洋一 1994「平瓦製作における中世の技術革新について第一部－金閣寺出土瓦を中心に－」『研究紀要』第１号（財）京都市埋蔵文化財研究所

東洋一 1996「平瓦製作における中世の技術革新について 第２部 中世棟平瓦製作技法の復元」『研究紀要』第３号（財）京都市埋蔵文化財研究所
五十川伸矢 1981「古代瓦生産の復元」『考古学メモワール 1980』学生社
印南敏秀 1987「京瓦の技法と用具」『京都府埋蔵文化財論集』1 集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
上原真人 1984「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第３号富山市考古資料館 のちに 2015『瓦･木器･寺院ーここまでの研究　これからの考古学』すいれん舎に再録上原真人 1978「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』第 13・14 号 (財) 元興寺文化財研究所
上原真人 1987「官窯の条件－律令体制下造瓦体制を検討するための作業仮説－」『北陸の古代寺院－その源流と古瓦－』北陸古瓦研究会
上原真人 1988「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかったー平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐってー」『歴史学と考古学―高井悌三郎先生喜寿記念論集』高井悌三郎先生喜寿記念事業会
上原真人 1990「平瓦製作技法の変遷－近世造瓦技術成立の前提－」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
上原真人 1995「京都における鎌倉時代の造瓦体制」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎
上原真人 1997a『瓦を読む』講談社
上原真人 1997b「瓦類」『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告－大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査－』嵯峨御所大覚寺
植山茂 1977「平安時代後期の瓦布」『平安京古瓦図録』雄山閣
植山茂 1979「平安京の瓦の布目」『日本古代学論集』古代学協会
浦林亮次 1960「瓦の歴史－法隆寺遺瓦群における技術的一試論」『建築史研究』28 建築史研究会
大脇 潔 1981「古代造瓦技術に関する一考察　―凸面布目平瓦の製作技術を中心として―」『奈良国立文化財研究所第 50 回公開講演会発表レジュメ』
岡田雅彦 2010「窯詰め資料からみた造瓦組織の一形態」『古代学研究』188 古代学研究会
梶原義実 1999「7 世紀における造瓦組織の発展」『史林』82-6
梶原義実 2003「造瓦組織の復原と瓦当文－東海地方の国分寺から－」『史林』86-3 史学研究
木立雅朗 1987「造瓦組織の歴史的発展についての覚書」『北陸の古代寺院－その源流と古瓦』北陸古瓦研究会
木村捷三郎 1941「本邦における堤瓦の研究」『仏教考古学論叢』考古学評論 3
木村捷三郎 1971『瓦の会　発表レジュメ』
木村友樹・久保直子・坂根 瞬 2022『西浦門前遺跡 島本町文化財調査報告書』第 41 冊 島本町教育委員会
木村友樹・岩崎誠・久保直子 2023「広瀬遺跡範囲確認調査概要報告」『島本町文化財調査報告書』第 45 集 島本町教育委員会
久保直子・坂根 瞬 2011「山崎・東大寺・広瀬地区遺跡範囲確認調査概要報告」『島本町文化財調査報告書』第 17 冊 島本町教育委員会
久保直子・木村友樹・坂根 瞬 2012「広瀬遺跡発掘調査報告」『島本町文化財調査報告書 広瀬遺跡（国木原）発掘調査報告』第 19 冊 島本町教育委員会
久保直子・木村友樹・坂根瞬 2013「広瀬遺跡発掘調査概要報告」『島本町文化財調査報告書』第 23 冊 島本町教育委員会
沢田むつ代 2005「出土繊維の観察と記録」『季刊考古学 第 91 号 原始・古代の出土繊維』雄山閣
高 正龍 1998「南ノ庄田瓦窯跡」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第 18 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所
小林行雄 1964「造瓦技法」『続古代の技術』縞書房

佐原 真 1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58 巻２号
沢田むつ代 2005「繊維考古学の可能性」『季刊考古学　原始・古代の出土繊維』雄山閣
進藤秋輝 1976「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社
杉山信三ほか 1974『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所
鈴木廣司 1973「常盤仲ノ町集落跡遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第３冊（財）京都市埋蔵文化財研究所
高畑知功 1983「天神坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　岡山県教育委員会
豊田裕章 2011「復元－水瀬離宮　後鳥羽上皇の庭園都市」『都市歴史博覧－都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』笠間書院
豊田裕章 2016「水無瀬殿の都市史ならびに庭園史的意義」『中世庭園の研究　鎌倉・室町時代　奈良文化財研究所学報』第 96 冊　奈良文化財研究所
中井 公 1985「桶型内巻作り平瓦の一事例―千葉県市原市光善寺廃寺出土の凸面布目平瓦」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ
七尾市教育委員会 1986『能登国分寺跡―第四次発掘調査報告書―』七尾市埋蔵文化財調査報告書第６集
七尾市教育委員会 1989『史跡能登国分寺跡―第五・六・七次発掘調査報告書―』七尾市埋蔵文化財調査報告書第 10 集
布川豊治 2005「史跡名勝　嵐山」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2004-11（財）京都市埋蔵文化財研究所
原口正三・佐原 真 1957「Ⅲ遺物の観察 B 瓦類」『船橋Ⅰ』平安学園考古クラブ
東村純子 2012『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
前川佳代 2021「12 世紀平泉からみた水無瀬殿：理想郷のかたち」『日本庭園学会誌』35
前川佳代 2022「わたしたちの文化財　大阪府越谷遺跡御所池園地状遺構」『ヒストリア』大阪歴史学会
村上久和・綿貫俊一・吉田寛 1989「塔ノ熊廃寺・塔ノ熊窯跡」『三光村の遺跡　三光村文化財調査報告書』第１集
山崎信二 2001『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第 59 冊
山田邦和 2023『変貌する中世都市京都　京都の中世史 7』吉川弘文館

共同研究

芝山古墳群出土方格規矩鏡の十二支銘帯について

菅　博絵

１．はじめに

芝山古墳群は、南山城地域最大の古墳群である久津川古墳群の富野支群を構成する古墳群の一つである。(注1) 城陽市東部の芝山丘陵上に位置し、同丘陵上には古墳時代前期の前方後円墳である梅の子塚１・２号墳、芝山古墳群の北側には古墳時代中期の方墳、円墳から構成される宮ノ平古墳群、南東側には、後期の前方後円墳である長池古墳が所在する（第１図）。

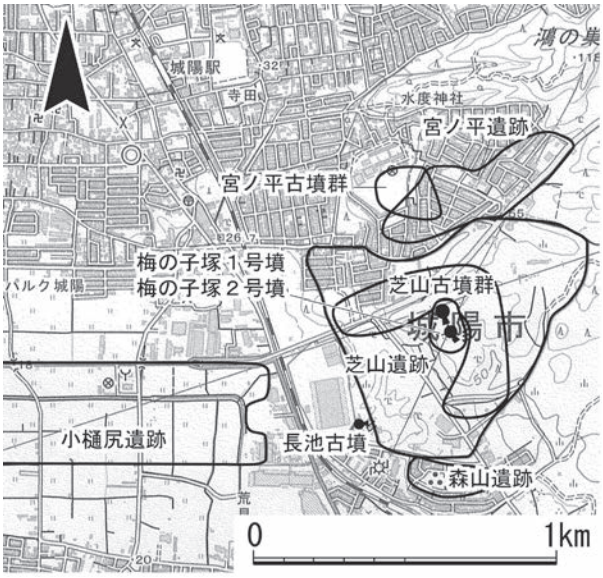
平成27年度から令和２年度にかけて実施した新名神高速道路整備事業にかかる発掘調査の結果、梅の子塚２号墳南東側の標高50m付近の段丘面を調査したＳ地区のⅣ－４号墳から十二支銘帯を有する方格規矩八禽鏡片が出土した（第２図）。本論は、類似する方格規矩鏡を比較し、芝山Ⅳ－４号墳出土鏡の欠損部の復元を目的とした。

本稿は令和２年度に実施した当調査研究センター共同研究事業『城陽市芝山古墳群出土鏡の研究』の研究成果報告である。

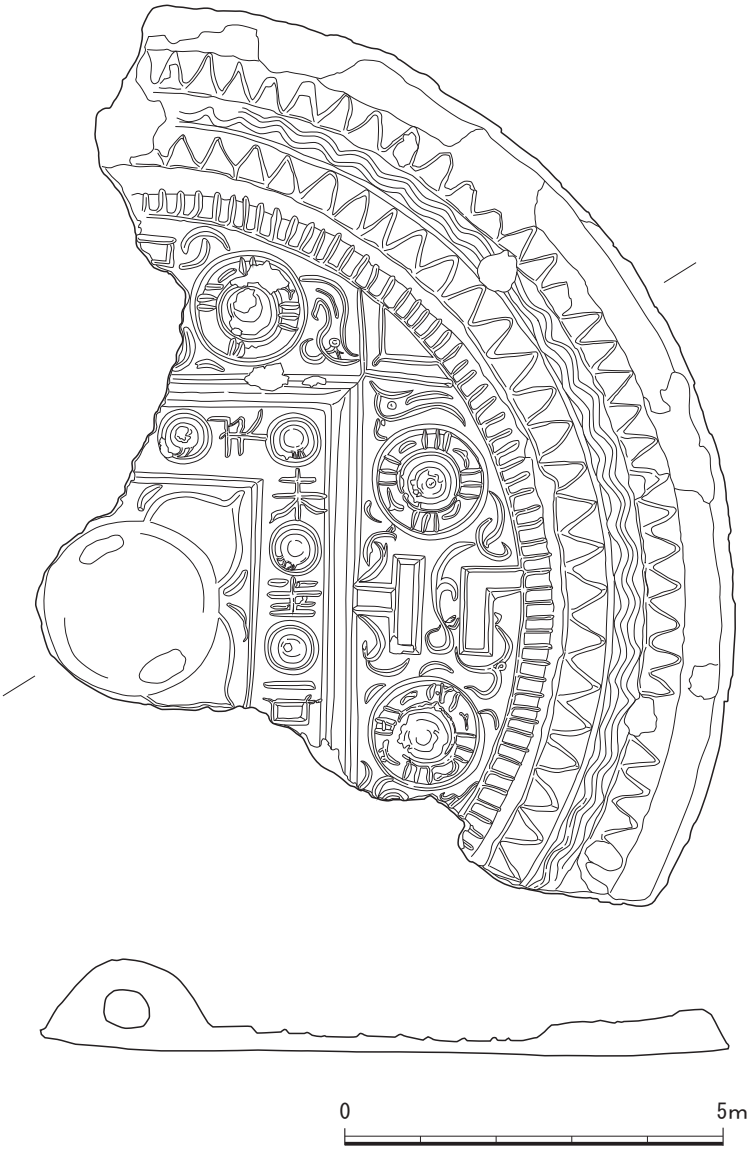
本稿で使用する３次元モデルは筆者が撮影し、Agisoft Metashape（standard版）を使用し作成した。出典を明記していない断面図は筆者が実測したものである。

２．芝山古墳群とは

芝山古墳群では、1977年度の城陽市教育委員会の調査で古墳時代中期の小型方墳が検出されて以降、2020年度までの発掘調査で古墳時代前期後半から後期後半までの古墳39基が検出された。古墳時代前期後半から後期後半まで同一丘陵上で時期によって墓域を変えながら継続的に造墓活動が行われたことが明らかとなった。古墳時代前期後半から中期初頭までは、梅の子塚古墳群南側、高位段丘面の丘陵先端付近を墓域とする。梅の子塚古墳２号墳南西側丘陵先端部に位置する平成29年度に調査を実施したE地区Ⅳ－３号墳の調査成果から、従来芝山古墳群が位置する富野地域では、梅の子塚１号墳（前方後円墳、全長87m、集成編年４期(注2)）の築造を契機に古墳が築造されたと考えられていたが、宇治市一



第１図　調査地位置図（国土地理院　1/25,000　宇治）



第２図　芝山Ⅳ－４号鏡　S＝1/1　注２から転載

本松古墳と同時期と考えられる壺形埴輪が出土し、Ⅳ－３号墳（方墳、一辺16.8m、集成編年３期）が最古となることが明らかとなった。芝山古墳群ではⅣ－４号墳出土方格規矩鏡のほか、Ⅳ－３号墳東側の丘陵先端部に位置するⅣ－２号墳から獣形鏡が出土しており、Ⅳ－１号墳の北側から埋葬施設には伴わないが表土掘削中に対置式神獣鏡が出土している。(注３)

３．芝山Ⅳ－４号墳出土の方格規矩鏡

令和元年度に発掘調査を実施したＳ地区Ⅳ－４号墳埋葬施設ＳＸ02から方格規矩鏡片が出土した（第２図）。Ⅳ－４号墳は後世の削平のため墳丘と周溝が失われており、規模は不明である。埋葬施設は粘土槨に納められた割竹形木棺であり、棺内から遺物は出土しなかった。銅鏡は粘土槨西側上方の墓壙埋土から出土し、棺を埋めた後に埋納されたと考えられる。

出土した方格規矩鏡は、鈕を含め全体の約1/4程度である。復元径は約16cm、残存長は9.1cm、

重量145ｇを測り、方格規矩八禽鏡に分類される。外区は鋸歯紋、複波紋、鋸歯紋からなる。内区は方格区と円形区からなり、方格区内にある十二支銘帯の文字は正位置ではなく、縦書きで時計回りに「午・未・丑・寅[注4]」が乳状突起の間に配されている。円形区に突線間の幅が狭い精緻な「T」・「L」・「V」字が配され、徳富分類のＢ鏡群にあたる[注5]。「T」字は非一連で[注6]、「一」が最後に書かれる。乳状突起が３つ認められ、円形区の「V」と「T」「L」の間にそれぞれ乳状突起が配されている。乳座は車輪圏乳座で、内側に三線の間に半月状の文様が見られる。車輪圏乳座の下部から胴部が省略された鳥の頸が四隅に対向して配される。鈕は円形を呈し、鈕座は四葉文である。

４．類似する銅鏡

芝山古墳Ⅳ－４号墳出土鏡と類似する方格規矩八禽鏡には、兵庫県朝来市馬場19号墳と同市城の山古墳出土鏡（６号鏡）がある。また、方格Ｔ字鏡に分類されるが、岐阜県岐阜市龍門寺１号墳出土鏡と京都府八幡市ヒル塚古墳出土鏡も類似する鏡である。馬場19号墳、龍門寺１号墳、ヒル塚古墳出土鏡は、乳座の下から鳥の頸がのびる胴部が簡略された鳥文を持ち、「V」字に対置して鳥文を配置する。一方、城の山古墳出土鏡は、簡略化された胴部をもつ鳥文を配置する方格規矩八禽鏡である。

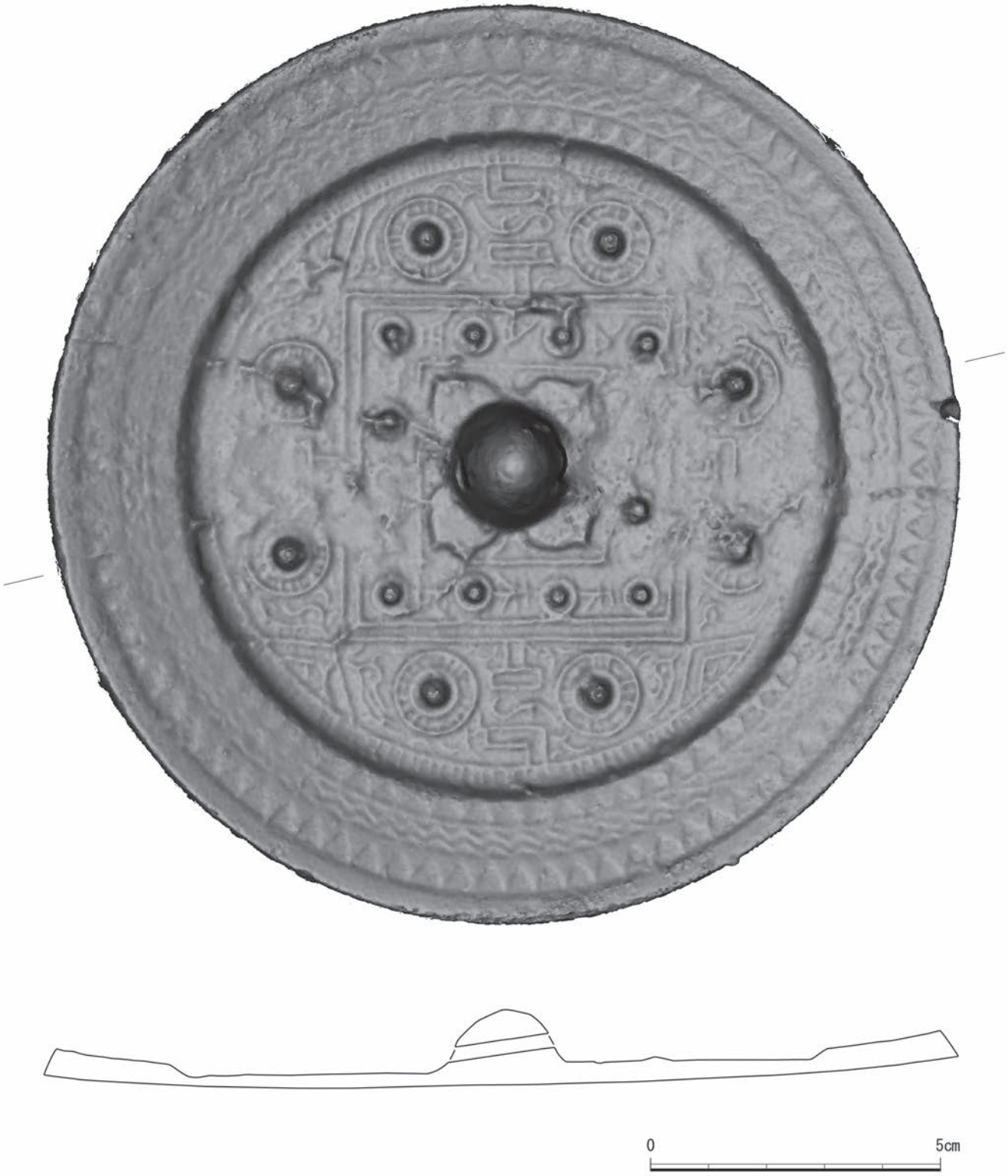
兵庫県朝来市馬場19号墳出土鏡（第３図）

馬場19号墳は、尾根上に築かれ、墳形を区画する溝、盛土がなく墳形不明の古墳である（集成編年４期）。埋葬施設は木棺墓３基と土坑墓２基を有する。銅鏡は第１主体の木棺内の頭部側に鏡背を上にした状態で出土した[注7]。

面径15.8㎝を測る方格規矩鏡である。外区は鋸歯紋、複波紋、鋸歯紋からなる。内区は方格区と円形区からなり、方格区は突線幅が不均等で、区内の銘帯には十二支が乳状突起の間に配されている。十二支銘帯は芝山Ⅳ－４号墳出土鏡と同じく文字は正位置ではなく、縦書きに配されるが、芝山Ⅳ－４号墳出土鏡と異なり「未」の位置は銘帯の右下ではなく中央である。十二支の一部は鋳上がりが悪く判読できなかったが、子が上部右上から時計回りに「子・□・□・□・午・未・丑・□・□・□・戌・亥」の文字が配される。「未」の次は芝山古墳群出土鏡と同様の文字「丑」であり、未の対角の文字が「亥」であることから十二支の正順ではない。円形区に突線間の幅が狭いやや歪んだ「T」・「L」・「V」字が配され徳富分類のＣ鏡群にあたる。「T」字は非一連タイプで、芝ヶ原Ⅳ－４号墳鏡と同様に方形区画の各辺の外側に２つずつ乳状突起が配される。乳座は車輪圏乳座で、内側に三線ないし二線で構成される。車輪圏乳座の横に胴部が簡略された鳥文が「V」字に対置して配される。鈕は円形を呈し、鈕座は四葉文が認められる。

兵庫県朝来市城の山古墳出土鏡（６号鏡・写真１）

城の山古墳は、径36ｍを測る円墳（集成編年３期）である。埋葬施設は箱形木棺で、木棺内から６面の銅鏡が出土しており、足元側に三角縁神獣鏡３面（１～３号鏡）が、頭部側に唐草文帯重圏文鏡（３号鏡）、青盖作四獣鏡（４号鏡）、方格規矩鏡（６号鏡）が鏡面を上にして副葬される。木棺



第３図　馬場19号墳出土鏡　３Dモデル・断面図（Ｓ＝1/1）

は仕切り板で３室に区画され、６号鏡は中心室、頭部付近から出土した。(注8)

面径15.4cmを測る方格規矩鏡である。十二支は反時計回りに「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」が正順で配される。円形区内に突線幅はやや狭く、歪んだ「T」・「L」・「V」字が配され、徳富分類のＣ鏡群にあたる。「T」字は非一連である。小さな乳状突起が方形区外

写真１　城の山古墳出土鏡（６号鏡）　車崎2002から転載

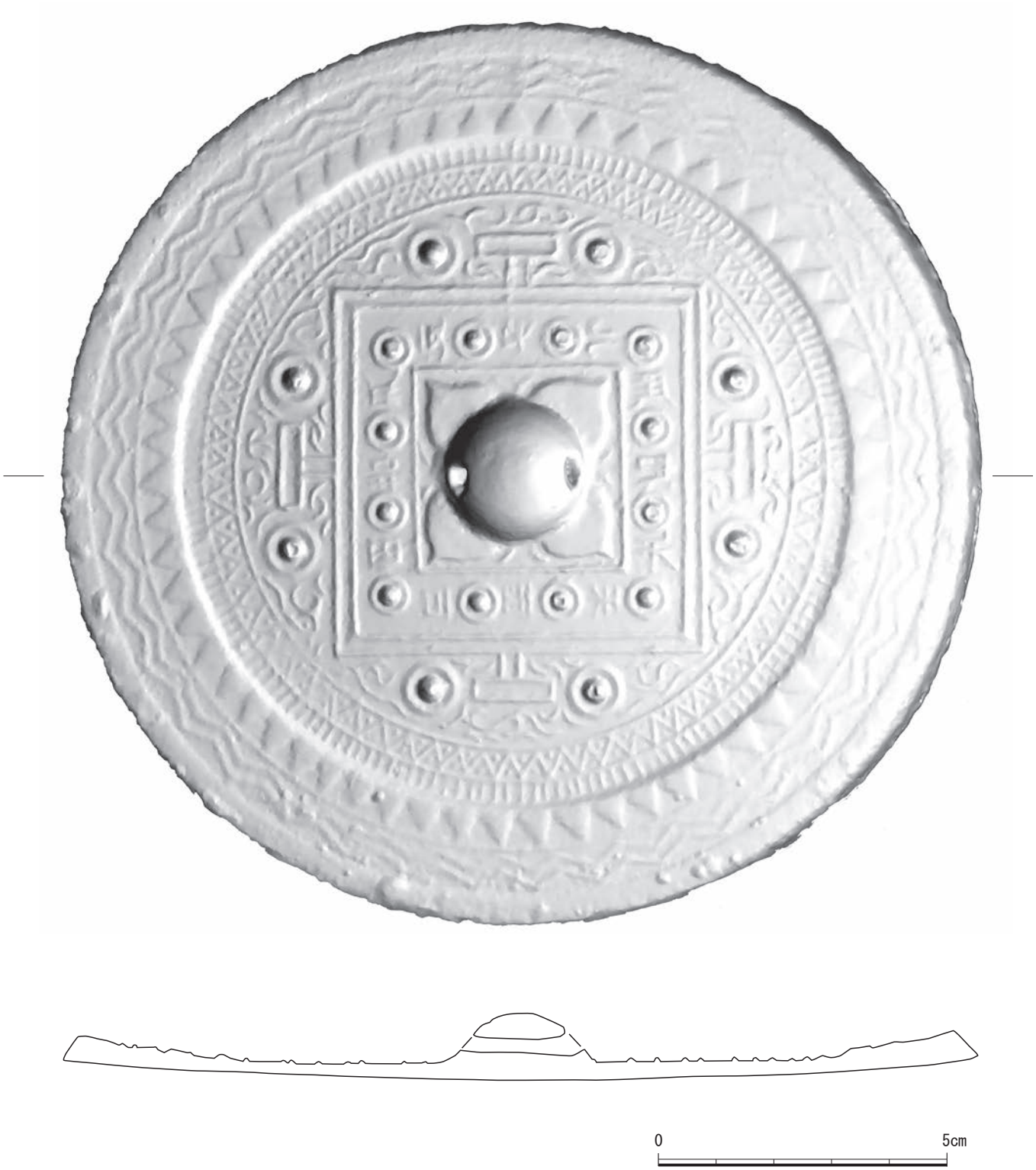
の中央付近に２つ配され、胴部が簡略されていない鳥文が「V」字に対置して配される。鈕孔は方形である。

岐阜県岐阜市龍門寺１号墳出土鏡（第４図）

龍門寺１号墳は径17mの円墳（集成編年４期新相）で、埋葬施設に割竹形木棺を配する。

面径15.7cmを測る鋸歯文縁方格Ｔ字鏡であり[注9]、芝山Ⅳ－４号墳出土鏡と類似した十二支銘を持つ。十二支は縦書きで、上部中央から始まる「子・卯・辰・巳・午・未・丑・申・寅・酉・戌・亥」の順に配される。乳座は円座である。規矩は直線的でなく、全体的にややいびつである。Ｖ字の両側の鳥文は一続きで描かれ、頸毛はない。「Ｔ」字は非一連タイプでやや歪で徳富分類のC鏡群にあたる。

銘帯に十二支銘が配されているが、鋳あがりと腐食が激しく判読は困難な部分はあるが「未」



第４図　岐阜県龍門寺１号墳出土鏡　３Dモデル・断面図（Ｓ＝1/1）

が銘帯の右下にあり、正配置の十二支銘ではない。「未」の以下の２文字は芝山Ⅳ－４号墳出土鏡と同様の文字である。鈕座には四葉文があり、四葉文間文様は無紋である。外縁は湯張りを削った跡が荒く残る。

京都府八幡市ヒル塚古墳出土鏡（第５図）

一辺52.4mの方墳（集成編年４期新相）で、墳頂部に粘土槨２基と円筒埴輪棺１基を有する。銅

第５図　京都府ヒル塚古墳出土鏡　３Dモデル・断面図（Ｓ＝1/1）

鏡は第２主体部の頭部側小口の棺外から出土した。(注10)

面径14.4cmを測る鋸歯文縁方格Ｔ字鏡である。方格内には十二の小乳が不均等に配され、十二支は見られない。円形区に突線間の幅が狭い精緻な「Ｔ」字が配され、徳富分類のＣ鏡群にあたる。乳座内の直線は３本、２本で構成される。方格の四隅に鳥頸が向かい合うように配される。鳥文は芝山Ⅳ－４号墳出土鏡と類似するが意匠はヒル塚古墳出土鏡の方が粗い。

５．まとめ

芝山Ⅳ－４号墳出土鏡の十二支銘については、兵庫県馬場19号墳出土鏡や岐阜県龍門寺１号墳出土鏡と同様の銘文を持つと推定され「子・卯・辰・巳・午・未・丑・申・寅・酉・戌・亥」である可能性が高い。年代については、Ｔ字が非一連 のものであることや、規矩の形状が突線間の幅の狭い精緻なものである点から徳富分類のＢ類(注11)にあたり魏鏡の可能性が高い。徳富編年にあてはめると集成編年４期新相の可能性が高く、付近の古墳も近い年代であり、Ⅳ－４号墳は集成編年４期新相の可能性が高いと考えられる。

本稿を執筆するにあたり資料見学では八幡市教育委員会、朝来市埋蔵文化財センター「古代あさご館」、岐阜市歴史博物館様には多大なご配慮とご協力をいただきましたこと、末筆でありますが厚くお礼申し上げます。

（すが・ひろえ＝当調査研究センター調査課主任）

注１　小泉裕司ほか 1999『城陽市史』第３集　城陽市役所

注２　広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社

注３　菅 博絵ほか 2023『京都府遺跡調査報告集』第 189 冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注４　報告書では「午・未・丑・□」と報告した。

注５　魏晋式方格規矩鏡における「T」字文の非一連化から一連化が西晋早期に変化したと推定した。徳富孔一 2018「方格規矩鏡における T 字文一連化の年代とその様相」『九州考古学』第 93 号　九州考古学

注６　徳富孔一は魏晋式方格規矩鏡の「T」・「L」・「V」を３つの鏡群にわけ、大まかな製作年代の推定を行なった。A 鏡群：「T」・「L」字が精緻であり、「T」・「L」字の突線幅が広いもの。B 鏡群：「T」・「L」字が精緻であり、「T」・「L」文字の突線間の幅が狭いもの。C 鏡群：「T」・「L」字が精緻でなく、歪んでいるもの。A 鏡群が 240 ～ 270 年代、B 鏡群が 230 ～ 280 年代、C 鏡群 270 ～ 280 年代ごろと推定。徳富孔一 2002「規矩文からみた魏晋式方格規矩鏡の研究」『九州考古学』第 95 号　九州考古学会

注７　中島雄二 2002「馬場古墳群」『続日本古墳大辞典』東京堂出版

注８　櫃本誠一 1992「城の山古墳」『兵庫県史　考古資料編』兵庫県、車崎正彦 2002『考古資料大観』５　弥生古墳時代　鏡　小学館

注９　楢崎彰一 1962『岐阜市長良龍門寺古墳』岐阜市文化財調査報告　第１輯　岐阜市教育委員会

注 10　桝井豊成ほか 1990『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会

注 11　注５に同じ。

注 12　徳富は、外区文様、鈕周辺方形区画文様を型式分類し、各文様の出土遺構時期を集成編年にあてはめ年代観を示した。徳富孔一 2019「古墳年代から見た日韓出土方格Ｔ字鏡十二支帯鏡群の型式学」『考古学研究』第 66 巻第３号（通巻 263 号）

ＰＯＳデータからみた巡回展「発掘された京都の歴史2023」向日市会場の来場者像

～文化財展示におけるマーケティング的手法の試み～

加藤雅士・企画調整係

１．はじめに

令和５年８月５日(土)から８月27日(日)までの間、向日市文化資料館で当調査研究センターと京都府教育委員会が共催で実施した巡回展「発掘された京都の歴史2023」の来場者像を明らかにする目的で、データ収集を実施した。データは小売業等で行われているＰＯＳシステムを参考にして、「入場時間」、「性別」、「年齢」、「人数構成」の４点を分類して記録した。分類・記録は入館時に職員が来場者を外見で判断したため誤差を含んでいる。なお、本稿は巡回展を担当した企画調整係の協力を得て、加藤が執筆した。

【入場時間】開場時間のうち、１時間区切りでどの時間帯に入場しているのかを記録した。

【年齢分類】入場者の年齢について、次の６つに分類した。

年齢分類１：未就学児、年齢分類２：７～12歳、年齢分類３：13～18歳、

年齢分類４：19～29歳、年齢分類５：30～59歳、年齢分類６：60歳以上

それぞれの区分は、以下に対応するものとして設定した。

１：赤ちゃん～保育園・幼稚園、２：小学生、３：中・高校生、４：大学生～若手社会人、

５：中堅～ベテラン社会人でいわゆる働き盛り、６：定年退職者やシルバー世代

年齢区分６については、最近は65歳が定年年齢になりつつあり、曖昧さを残すかたちとなった。

【人数構成】何人連れで入場しているかについて記録した。

２．巡回展の概要と留意点

・当巡回展は府民をはじめとする多くの方が遺跡や遺物に親しみ、埋蔵文化財への興味や関心をもっていただくことを目的に実施しているもので、京都府内関係諸機関による発掘調査成果の速報展的な性格を有している。

・昭和57年に『小さな展覧会』として開始し、平成29年からは『発掘された京都の歴史』と改称し当調査研究センターと京都府教育委員会との共催になった。

・例年８月に今回の分析対象である向日市文化資料館で展示を実施した後、山城郷土資料館、丹後郷土資料館を巡回する。

・会場の向日市文化資料館では、１階で長岡京のテーマ展示を常設で行っており、巡回展の会場は２階である。開館時間は10時～18時である。

・向日市文化資料館は、向日市図書館に隣接しており、会期中は午前を中心に当調査研究セン

ターの担当職員が図書館前でチラシを配布して資料館へ誘導している。

・来場者数の公式数値は1,426人であるが、受付時に把握した数は1,416名でありこれを分析の母数とする。

・８月15日は、台風７号による暴風警報のため16時30分まで臨時休館となった。結果的に来館者が０人だったため、データから除外した。

・子供向けのコーナーとして、展示品をデザインしたプラバン体験を実施している。例年、親子連れや小学生に人気が高い。

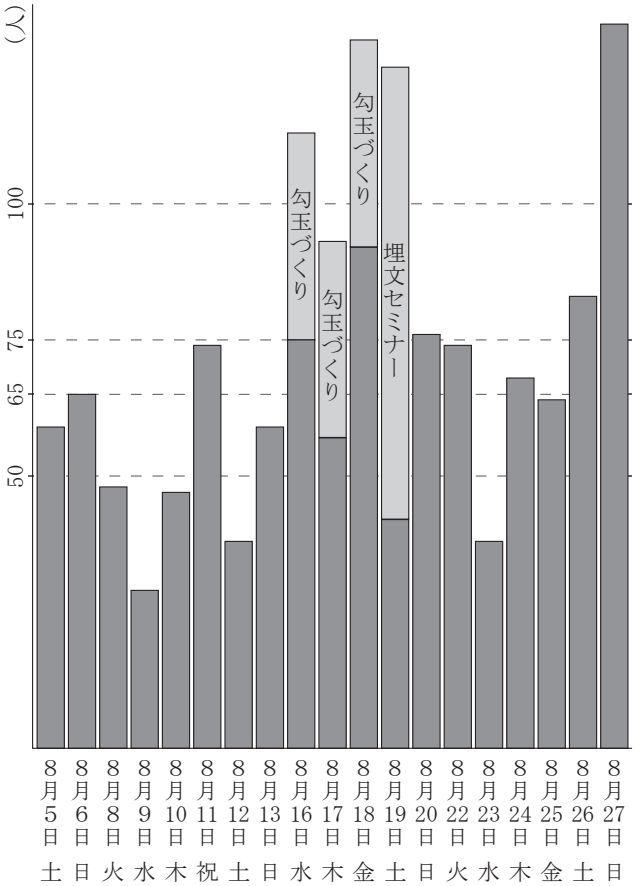
・８月16～18日に考古学体験「勾玉をつくろう」（各日の10時と14時）を開催している。各日の参加者は38名・34名・38名であり、勾玉体験の直前に展覧会を見学する。受付時の記録は、17日が36名となってしまっている。

・８月19日は、14時から第152回埋蔵文化財セミナーを近傍の向日市民会館で開催し、83名の参加があった。参加者はセミナーの開催時間前後に（あるいは両方に）展覧会を見学している。

3. 分析

データ分析で判明した事実のいくつかをトピックとして以下に挙げる。

１日の平均来場者数（第１図）　総来場者数を開催日数で割って求めた平均来場者数は、74.53人／日である。



第１図　来場者数の推移

イベントは効果絶大　イベント開催日における来場者数は、いずれの日も平均を大きく上回っている。仮に、来場者が増加するイベントの参加者（勾玉体験と埋文セミナー）を除したものを母数とすると、１日の平均来場者数は、64.26人／日となる。イベント開催日における来場者数は、いずれの日も平均を大きく上回っており、会期に並行してのイベント開催は展示の来場者増に果たす役割が大きいといえる。

来場者数の増減　日ごとの来場者数にはバラつきがあり、最多は最終日の８月27日（133人）、最小は８月９日（29人）である。全体的にみると、会期の序盤は来場者数が低調、中盤はお盆休みに入ることやイベント開催の影響で大

付表１　入場時間別来場者数

時間帯	（人）
10 時～	252
11 時～	272
12 時～	121
13 時～	153
14 時～	161
15 時～	135
16 時～	154
17 時～	51

※勾玉体験参加者を除く

付表２　年齢・性別区分別来場者

（人）	来場者全体	来場者女	来場者男
年齢分類１	75	39	35
年齢分類２	352	202	150
年齢分類３	25	13	12
年齢分類４	127	66	61
年齢分類５	467	245	222
年齢分類６	370	108	262

※来場者は勾玉体験参加者を含む

付表３　来場者および京都府人口における年齢/性別構成の割合

	京都府女	来場者女	京都府男	来場者男	京都府女：男	来場者女：男
年齢分類１	2.39%	2.75%	2.51%	2.47%	1：1.05	1：0.90
年齢分類２	2.34%	14.27%	2.47%	10.59%	1：1.06	1：0.74
年齢分類３	2.57%	0.92%	2.71%	0.58%	1：1.05	1：0.92
年齢分類４	5.61%	4.66%	5.68%	4.31%	1：1.01	1：0.92
年齢分類５	18.72%	17.30%	17.96%	15.68%	1：0.96	1：0.91
年齢分類６	19.06%	7.63%	14.77%	18.50%	1：0.78	1：2.43

※京都府人口は令和２年国勢調査、来場者は勾玉体験参加者を含む

きく増加、これを受けての終盤も来場者数が好調に推移するようである。来場者数が低調な会期序盤において、何らかの新規イベントを開催するのも一考である。

天気との相関は不明　来場者が増加する要因は､先述のように連休やイベントが挙げられるが、逆に８月９日、８月12日、８月23日のように、来場者数が全く振るわない日が存在する。その理由について、例えば８月９日は雨（日降水量：３mm）、８月12日は酷暑（最高気温38.9℃）と後付けすることも可能かもしれない。しかし、８月９日よりも降水量が多いにもかかわらず日平均を上回る来場者数を記録する日（８月16・17・24日）がある。また、35℃以上の猛暑日が続く中、最高気温が33.6℃と落ちついたはずの８月23日は、来場者数が振るっていない。このように、晴雨寒暖の要素と来場者数の増減に相関を見出すことは出来なかった。

約半数が13時までに来ている（付表１）　来場者が１日のうちの何時頃に来ているかを見ると、午前中の10時代・11時代が圧倒的に多い。午前の２時間は１日の開館時間のうちの４分の１でしかないが、午前中の来館者数は全体の４割以上を占める（12時代までを加えると約５割）。12時代以降は、各時間帯とも平均的に来場があるが、最終の時間帯である17時代では極端に来場者数が少なくなっている。これらの点は、職員の休憩・交代のタイミングを考える上で参考になるであろう。

多くが午前中に来場している理由としては、前述のチラシの配布があげられる。また、朝のうちから外出するのであるから、前日の夜にはすでに展覧会へ行く予定を決めている、とも想定で

きる。この点は、先に分析した来場者数と天気に相関が認められなかったことと調和的である。すなわち、計画を決めてしまえば、多少の雨や暑さには影響されないと予想されるからである。計画の決定は各種媒体から情報を得たうえであると考えられるので、当然ながら宣伝活動は重要である。

実は働き盛り世代の来場が最も多い（付表２）　来場者の年齢構成をみると最多は年齢分類５（30～59歳）である。体感的に来場者が多いのではないかと思われがちな年齢分類６（60～歳）は、実は２番目に多い年齢層である。年齢分類６は、最多である年齢区分５との差は1.26倍と水をあけられているのに加え、３番目に多い年齢分類２（７～12歳、勾玉含む）とも大差がないのが実情である。

小学生の獲得に成功（付表３）　京都府全体の年齢分類構成を比較すると、来場者の獲得で最も健闘しているのは小学生である年齢分類２である。京都府の人口で年齢分類２が占める割合は全体の4.80％であるにもかかわらず、展示会来場者全体に年齢構成２が占める割合は24.86％（勾玉含む）である。向日市内の７～12歳の人口が1,555人である（向日市HPより・令和５年１月１日現在）点を考慮しても、小学生層の獲得という点では成果を収めていると評価できる。また男女比をみると、年齢分類２では女性の割合がより高くなっているのが特徴である。

中高生になると来てくれなくなる　小学生は多く来場しているのだが、中高生になると途端に来場しなくなる。京都府人口での構成割合と比較すると中学生・高校生である年齢分類３（13～18歳）の来場者が少ないことが際立つ。この年齢は思春期にあたり、家族よりも友人との行動が増え、行動範囲も広まる。また、学校での活動や塾通いなどで多忙になる時期である。

こうした年齢層を展覧会に呼び込むのは簡単ではないが、方策の一つとして、家庭や個人ではなく学校単位に働きかけるのも一手である。また、中高生の間は来場してくれずとも、大人になって再び来場してもらえるためには、小学生時に良い体験を提供できていたか問われるところでもある。

若年層で女性が多い　年齢分類に性別も加えて検討する。京都府人口で各年齢区分での男女比を見ると、年齢分類１～４では、女：男の比率は１：１.01～1.06であり、男の方が多い。これが年齢分類５となると、女：男が１：0.96となり女の数が男を逆転、年齢分類６では１：0.78とさらにその差が拡大する。女性が長命であることを反映しているのであろう。ところが来場者の性別比は、この傾向とは全く異なる。年齢分類１～５ではいずれも女性の来場者の方が多くなっている。特に年齢分類１～４では、本来、女の人口の方が少ないのだから、女性がより多く来場していると評価することができる。一方、年齢分類６では女：男が１：2.43となり、女の割合が極めて少ない特徴的な傾向を示す。

シルバー女性層の開拓に課題　年齢分類６－男は、全体のなかで最も多い来場者がある区分である。全来場者に占める割合は18.50％であり、京都府人口での割合（14.77％）を上回っている。ところが先述のとおり、年齢分類６－女の来場者は極端に少なく、全来場者に占める割合でも7.63％でしかない。ちなみに、京都府人口で年齢分類６－女の占める割合は19.06％であり、各年

付表４　来場者グループの構成

（組）	一人様	二人組	三人組	四人組	五人組	六以上
来場組数	590	146	59	25	12	12

※勾玉体験参加者を除く

付表５　グループ構成と年齢/性別

（人）	一人様	二人組	三人組	四人組	五人組	六以上
年齢分類２女	17	46	33	14	16	14
年齢分類２男	15	31	21	14	6	13
年齢分類３女	3	5	2	2	1	
年齢分類３男	1	9	1	1		
年齢分類４女	19	22	13	11	1	
年齢分類４男	27	14	14	6		
年齢分類５女	83	63	34	19	16	30
年齢分類５男	126	39	20	11	10	16
年齢分類６女	71	21	5	7	3	1
年齢分類６男	227	21	1	4	1	8

※勾玉体験参加者を除く

付表６　子連れ層の割合

		子供					
	（組）	一人	二人	三人	四人	五人	六人
保護者	一人	80	34	5	1	2	1
	二人	11	13	7	2		1
	三人	1	2				

※年齢分類１～３を子供とし、子供連れの年齢分類４以上を保護者とした

付表７　保護者の年齢層と構成

（人）	１オペ 女	１オペ 男	２オペ 女	２オペ 男	３オペ 女	３オペ 男
年齢分類４	20	8	8	5	1	
年齢分類５	59	26	30	18	2	2
年齢分類６	7	3	6	1	3	1

付表８　来場者が保護者である割合

（人）	全体	女	男
年齢分類４	33.07%	43.94%	21.31%
年齢分類５	29.34%	37.96%	20.72%
年齢分類６	5.68%	14.81%	1.91%

齢/性別区分の中では最大の母数を有している。年齢分類６－女の来場数が極端に振るわない理由は、よく分からないというのが実際のところである。しかし今後大きく来場者数を伸ばす可能性がある年齢/性別層でもある。検討と何らかの対応が望まれるところである。

おひとり様ですか（付表４・５）　来場者がどのような構成（何人連れで来るか？）という点について、全体でみると、来場した組の70.24%、人数では45.25%が一人での来場である（勾玉体験参加者を除く）。これを年齢と性別で分類すると、年齢/性別ごとに様相が異なる。年齢分類２・３・４や年齢分類５－女では、全体の傾向とは異なり、一人での来場は決して多くない。そして二人組以上での来場の方が多い場合も見受けられる。一方、年齢分類５－男と年齢分類６－男については、一人での来場が圧倒的に多く、これらの数値が全体の平均値に影響を及ぼしている。これらの理由としては、後述するとおり子供の引率者（保護者）に占める女性の割合が高い点が挙げられる。もう一つの理由としては、一般的に言われる女性の社交性の高さを挙げることが出来るであろう。来場者数の少なさが注目される年齢分類６－女についても、二人組での来場が一定数を占めている点は注目される。

子供は誰とくるのか（表６～８）　子供にあたる年齢分類１～３の来場状況をみると、ほとんどが保護者にあたる年齢分類４～６と一緒に来場していることがわかった。最も多いのは保護者と子供が一人ずつの場合で、次いで保護者一人で子供二人を連れている（いわゆるワンオペ状態）場合が続く。保護者の年齢層をみると年齢分類５が最も多く、年齢分類４がこれに続く。性別では女性の多さが際立っており、年齢分類４－女層では約44%が子連れとなっている。また年齢分類４・５で、女性のワンオペ来場が目立つ。

保護者層として逆に全く振るわないのは、年齢分類６である。「祖父母と孫」という組み合わ

せが極端に少ないことが浮かび上がっている。

子供だけでの来場者　年齢分類２・３のみで構成される来場者は(50組)69人であった。すなわち、保護者なしで子供だけで来場する者が存在する。年齢分類１～３全体に占める割合は15.27％であるので(勾玉体験参加者を除くと20.29％)、決して少なくない数である。

子供だけの来場者の構成は、一人での来場者が33組(33人)と最も多い。次いで二人組が15組(計30)人となり、３人組以上は２組のみである。二人組の来場者を詳細にみると、年齢分類２と年齢分類３で構成される組や、また年齢分類２どうしだが性別が異なる組があった。これらの場合、友達どうしではなく、キョウダイである可能性の方が高いと判断される。このようなキョウダイの可能性がある例は７組(計14人)あり、二人組の半数を占めている。

「子供だけで来場」するのは、「子供一人で来場」の場合も含め、会場まで来る動機付けがより強いと考えられる。その動機としては、埋蔵文化財そのものよりもプラバン等の体験学習が挙げられる。その証左として、会期初日から子供一人での来場者が３組（３人）記録されている。「あそこは楽しめる」と認識していた、以前からのリピーターである可能性がある。また同時に、会期中にも、複数回来場した子供のリピーターがいた可能性がある。

４．データ収集の意義

当センターでは、企画調整係を中心に多くの職員が巡回展発掘された京都の歴史、京都府埋蔵文化財セミナーなどの普及啓発事業に取り組んでいる。

このうち、発掘された京都の歴史展については、その一般参加者像については、体感的なイメージはあったものの正確なものではなかった。今回のデータ分析では、親子連れの来場者やこどもだけの来場者が、改めて多いことが明らかになった。図書館利用者が多く流れてきた可能性はあるが、歴史に親しみを感じて接しようという気持ちで来場されることはうれしい限りである。

今回のデータは今後の普及啓発事業で大いに参考になるであろう。また、継続的なデータ収集を実施することでさまざまな施策の効果測定が可能となることも期待される。

（かとう・まさし＝当調査研究センター調査課主任）

令和５年度発掘調査略報

1. 平（へい）遺跡第７次

所 在 地　京丹後市丹後町平地内

調査期間　令和５年８月23日～令和５年12月11日

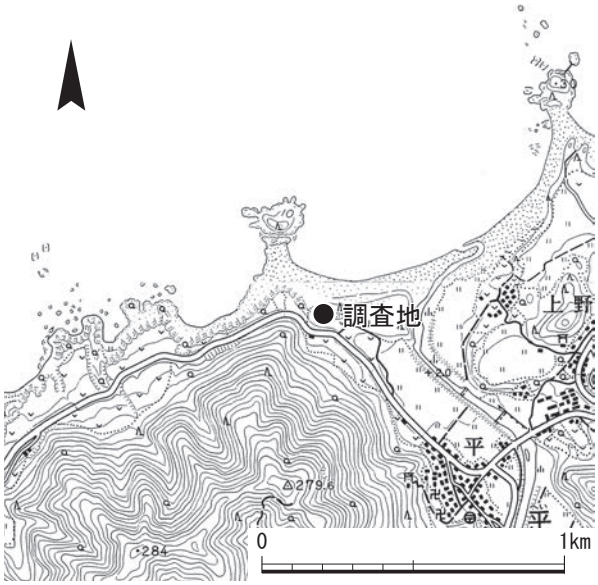
調査面積　1,180㎡

はじめに　平遺跡は、京丹後市北部の宇川河口左岸の日本海に面した砂丘上に位置する縄文時代から中世にかけての集落遺跡である。これまでの調査で、縄文時代早期から晩期にわたる遺物包含層や縄文晩期の埋甕、石組炉、古墳時代後期の石敷遺構が検出されている。中でも縄文時代中期末の土器は平式土器として標式資料とされる。

今回の調査は、令和５年度に浜丹後線（上野バイパス）民安関連道路新設改良業務委託に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施したもので、昨年度実施した小規模調査で遺物包含層が認められたトレンチの周辺を拡張して面的調査を行った。

調査概要　今回の調査区は、谷部に立地し、昨年度調査で古墳時代から縄文時代の遺物包含層を検出した３・４トレンチを包含する。調査の結果、中世の建物跡１棟、複数の柱穴、溝１条、縄文時代から中世かけての複数の土石流堆積層や谷堆積層を確認した。

調査区北西側では、西側段丘面から流入したと考えられる縄文時代前期～古墳時代後期の遺物を含む包含層が厚く堆積していた。調査区北側では、遺構面の大半が中世の遺物を含む土石流により消失していたが、古墳時代前期の遺物を含む谷堆積層がわずかに認められた。調査区南側では、桁行１間、梁行き３間の掘立柱建物を検出したほか、建物の復元には至らないものの柱根を含む柱穴を複数検出した。その下層からは、古墳時代中期と縄文時代晩期以前の谷堆積と土石流堆積層を複数確認した。



調査地位置図（国土地理院　1/25,000 丹後平・丹後中浜）

まとめ　今回の調査では、縄文時代から中世にかけての複数の谷堆積と土石流堆積層、中世の建物跡を確認した。

調査地はたびたび土石流災害にさらされ、谷の方向が変わることが明らかとなった。谷堆積層から出土した土器が摩滅していないことから付近から流入したものと考えられ、周辺では、縄文時代～中世にかけて人間活動が行なわれたと考えられる。今回の調査では、平遺跡の土地利用を解明する上で貴重な知見を得ることができた。　（菅 博絵）

2．佐屋利（さやり）遺跡第３次

所 在 地　京丹後市峰山町荒山地内

調査期間　令和５年６月14日～令和５年11月14日

調査面積　850㎡

はじめに　佐屋利遺跡は竹野川右岸の微高地上に位置する弥生時代から中世の集落遺跡である。過去２回の調査で、弥生時代中期の竪穴建物や土坑、平安時代末から鎌倉時代にかけての荘園領主の屋敷とみられる遺構が見つかっている。調査は国道312号道路新設改良事業に伴い京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施したもので、同事業に伴う発掘調査は初年度の新町遺跡を含め４年目である。

調査概要　前年度の７区を拡張して調査を実施した。（第２図）。

第１図　調査地位置図（国土地理院　1/25,000 峰山）

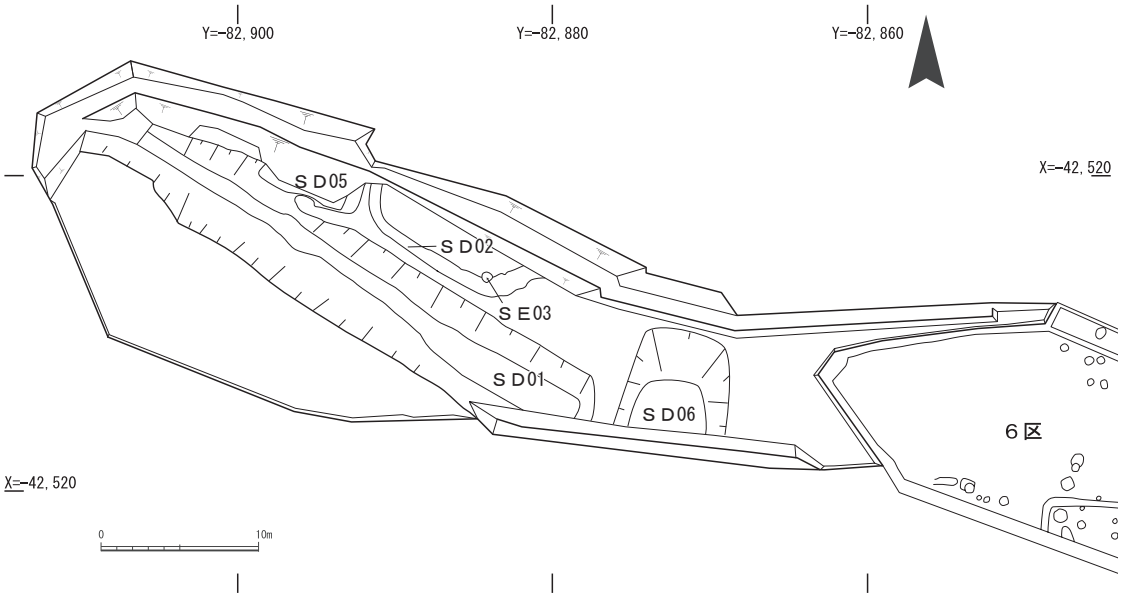
厚さ約1.5mの耕作土を含む近現代の攪乱土を除去したところ、戦国時代の土師器・須恵器・国産陶磁器・輸入陶磁器などの遺物を包含する大規模な堀ＳＤ01を検出した（巻頭図版）。堀ＳＤ01は、調査区の南東から北西の調査区外へ延び、検出長約36m、幅８ｍ以上、深さ約５ｍを測る。また、ＳＤ01の北東側に隣接して幅約４ｍ、長さ約1.8mの地山を削りだした緩斜面を確認した。この緩斜面では、「コ」の字状の幅約0.5m、延べ長さ約12m、深さ約0.5mの堀ＳＤ02、直径約0.6m、深さ約0.5mの素掘り井戸ＳＥ03を検出した。加えて緩斜面の東西両側で、堀ＳＤ05と堀ＳＤ06を検出した。ＳＤ05は調査区の北東側から伸び、ＳＤ01に接続するようである。幅は約６ｍ、深さ約５ｍを測る。全長は調査区外へ延びるため不明である。ＳＤ06はＳＤ01の東側に位置し、調査区の南側へ延びる堀である。幅約８ｍ、深さ約３ｍを測る。全長は調査区外へ延びるため不明である。これら、堀の配置状況から、ＳＤ01とＳＤ06に挟まれた北東側の小字「茜屋敷」に居館が設けられている可能性が高い。

ＳＤ01の土層断面を観察した結果、上層の埋土は、地山のブロックを含み淘汰の悪い明瞭な堆積構造を示さないことから、人為的に埋め立てられたと考えられる土壌であった（写真）。なお、上層最下面で、黒楽茶椀が出土しており、堀が埋め立てられたのは、16世紀末頃と考えられる。下層の埋土は、細粒の黒色砂と粗粒の白色砂が規則的に堆積する構造を示し、堀が機能していた際の堆積物であると考えられる。

まとめ　今年度の調査では、竹野川右岸地域において初となる、戦国時代の平地居館の一部を

発見した。堀の規模が非常に大きいことや、中郡盆地が一望できる微高地上に位置することから、有力者の屋敷地であった可能性が高い。堀が埋め立てられた頃に、丹後守護職であった一色氏が滅亡し、城割が行われたとされており、その関係性が興味深い。

令和３年度の調査区で、奈良時代から平安時代の墨書土器が出土したこと、令和４年度の調査で平安時代末から鎌倉時代の有力者の居館と考えられる遺構が検出されたこと、今回の調査で戦国期の領主の居館を推定させる堀が検出されたことから、調査地周辺は各時代に地域の中核的な施設が置かれていたことがわかる。（面 将道）



第２図　７区検出遺構図

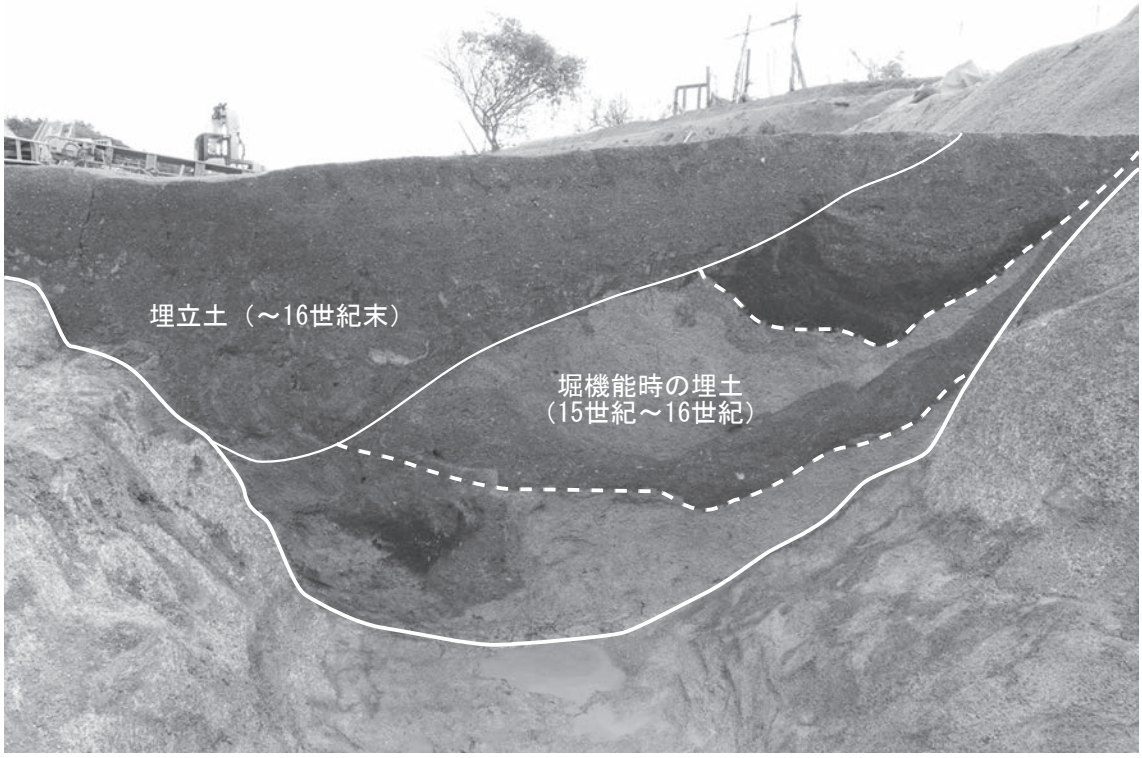


写真　堀ＳＤ01断面

３．松田墳墓群

所 在 地　京丹後市大宮町河辺（こうべ）地先

調査期間　令和５年５月８日～令和５年11月２日

調査面積　800㎡

はじめに　松田古墳群は竹野川の右岸側の丘陵上に立地する。丘陵の北側には東西方向の谷底平野が伸びており、京丹後市大宮町河辺の中心地から久住（くすみ）へ抜ける道となっている。今回の発掘調査は、一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い国土交通省福知山河川国道事務所からの依頼を受けて実施した。

調査地位置図（国土地理院　1/25,000 峰山）

調査概要　松田古墳群はＡ～Ｄの４つの支群から構成されている。今回の調査対象は南から北へ向けてのびる尾根上に分布するＢ支群であり、Ｂ－15号墳～17号墳を発掘調査した。また、Ｂ－13号墳・14号墳については、表土を掘削して遺構の確認のみを行った。調査の結果、いずれも弥生時代の台状墓であることが判明したので松田墳墓群として扱うことになった。なお、次年度も継続して調査を実施する予定である。

発掘調査を実施したＢ－15～17号墓はいずれも弥生時代後期後葉から終末期の丘陵尾根部を階段状に整形し、平坦面を造り出した台状墓である。出土遺物から短期間に形成されたものとみられる。そのうちＢ－15号墓は幅10m・長さ８mほどの平坦面に15基、Ｂ－16号墓は幅12m・長さ８mほどの平坦面に14基の埋葬施設が非常に密集して営まれている。一方で、Ｂ－17号墓は、遺構の密集度は低く、幅８m・長さ６mほどの平坦面に２基の埋葬施設と１基の銅鏃・鉄鏃埋納土坑があるのみである。Ｂ－15号墓とＢ－16号墓は、埋葬施設の密集度は同程度であるものの、Ｂ－16号墓が明確な中心埋葬施設が存在し、墳丘上で顕著な土器供献祭祀を行うのに対して、Ｂ－15号墓は明確な中心埋葬施設がなく、埋葬施設の規模も中規模以下のもので占められるなど、明確な差異がある。この他、埋葬施設の規模に応じて、墓壙の形状（素掘りの墓壙と２段墓壙）と木棺の形式（組合せ式木棺と刳り貫き式木棺）に相関する傾向が確認できた。

まとめ　松田古墳群Ｂ支群は、造墓活動が短期間でありながら、台状墓単位で様相が異なることが大きな特徴である。このことから、複数の小集団がほぼ同時に築造し、埋葬施設規模や棺形式に一定のルールをもちつつも、小集団単位の規範が反映されやすい台状墓群であるとみることができる。

（中里伸明）

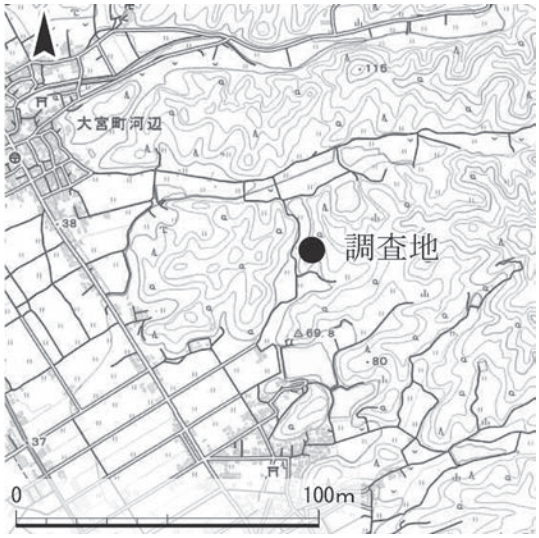
４．小中田（こなかだ）古墳群第２次

所 在 地　京丹後市大宮町河辺（こうべ）

調査期間　令和５年５月１日～令和５年６月27日

調査面積　1,190㎡

はじめに　小中田古墳群は竹野川中流域の右岸に所在し、遺跡地図には35基からなる古墳群として登録されている。調査対象地は古墳群の南東の丘陵部の先端に位置している古墳状隆起である。令和４年度の第１次調査では古墳の現状を確認するために小規模調査を実施した。その結果、溝状遺構や埴輪片を検出した。この調査成果を受けて、今年度平坦面を一部裾部まで拡張して調査を行った。



調査位置図（国土地理院　1/25,000）

調査は一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要　今年度の調査では中世の堀切状遺構、古墳の周溝、墳丘や土坑などを検出した。堀切状遺構は昨年度検出した溝状遺構の延長部にあたり、尾根筋に直交する形で長さ10m、幅３m、深さ１mほどを測り、中世の土師器片や須恵器、埴輪の小片が出土した。

調査地の南側の平坦面には高さ１m程度の隆起があり、古墳の墳丘盛土であった可能性がのこることから、直径７m以上の円墳であると考えられる。また、明確な埋葬施設は検出できなかったが、調査区外の南西側には一部丘陵の平坦面が残存していることから、そこに埋葬施設が存在していた可能性がある。

まとめ　今回の調査では、竹野川中流域では類例の少ない埴輪をもつ古墳の存在が明らかになった。埴輪の製作年代は古墳時代後期であり、この時期に築造された古墳だと考えられる。周辺の埴輪を持つ古墳は丘陵の対岸に位置する清漬７・８号墳や下流域の太田２号墳、竜淵寺古墳があり、当地域を支配していた首長を考える上での貴重な資料となった。（川嶋泰輔）

写真　調査地全景（上空から・上が西）

5．老田（おいた）遺跡

所 在 地　京丹後市大宮町周枳（すき）地先

調査期間　令和５年７月１日～令和５年10月31日

調査面積　2,310㎡

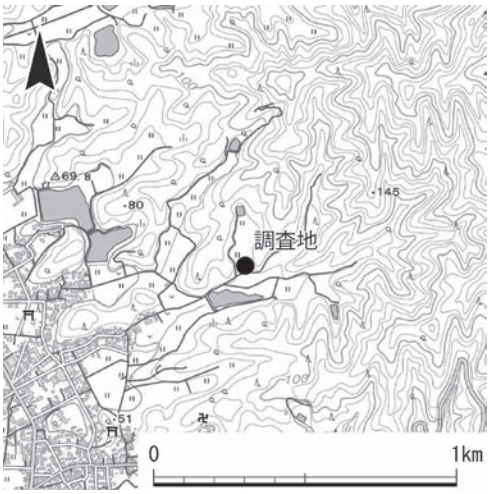
はじめに　老田遺跡は、丹後半島中央部の中郡盆地を南から北へ流れる竹野川の東方に位置する谷部に立地する。今年度は、南に開いた谷部で、調査対象地の南半分にあたる範囲を面的に調査した。

調査は一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要　今年度の調査では、弥生時代中期と中世前期・後期の遺構と遺物を確認した。弥生時代中期の遺構は、谷部の中央部（今年度調査範囲の北半）で検出した。検出した遺構には、南北方向や東西方向に網目状に掘削された流路・溝のほか、土器埋設の取水遺構、縦板組の井戸、柱穴等がある。遺構内からは、土器類のほか扁平片刃石斧や玉砥石が出土した。

調査区南側からは主として中世前期と後期の遺構を検出した。幅２ｍ、深さ１ｍ弱を測る東西軸に続く断面Ｖ字の堀のほか、底に曲げ物を据えた井戸や柱痕、廃棄土坑、流路を検出した。Ｖ字の堀は、泥や落ち葉などの有機物が流れ込むなど、ある程度埋没してから、上部に面を持つ石を等間隔に据え埋め立てられている状況を確認した。等間隔に据えられた石列は、堀の主軸に沿うように配置されていることから、土地の境界などを示す遺構であると考えられる。このほかの中世の遺構からは土師器皿、黒色土器、瓦質土器、青磁、白磁、石製鍋の再加工品、金属・木製品が出土した。調査地の小字を「栗ヶ奥」といい、その南が「テンキョウジ」である。やや規模の大きな堀や礎石、出土する遺物の特徴から、「庫裡」などが位置した寺院関係の遺構・遺物である可能性が指摘できる。

まとめ　南に開く谷部において弥生時代中期と中世の遺構を検出し、それぞれの時代の遺物が出土した。中世には寺院に関係する建物などが存在した可能性がある。弥生時代中期の遺構群は、網目状に掘削された溝や土器埋設の取水遺構、井戸などの遺構が確認できたことや玉砥石の出土から、集落や水田、墓域というよりも工房などの生産遺跡の一部である可能性も考えられる。（加藤雄太）



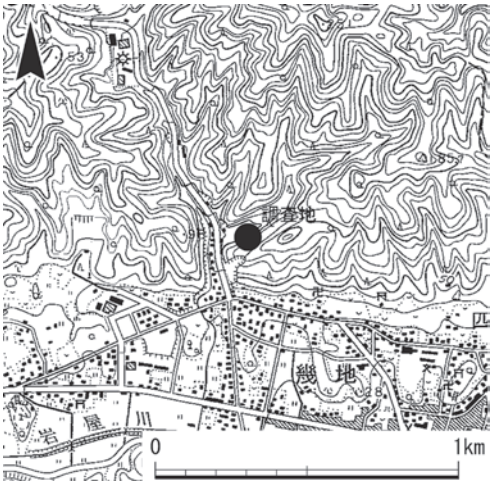
調査地位置図（国土地理院　1/25,000）

６．幾地城跡第１次・２次、ソブ谷墳墓

所 在 地　与謝郡与謝野町幾地地内

調査期間　令和４年12月１日～令和５年２月27日、令和５年５月８日～令和５年11月６日

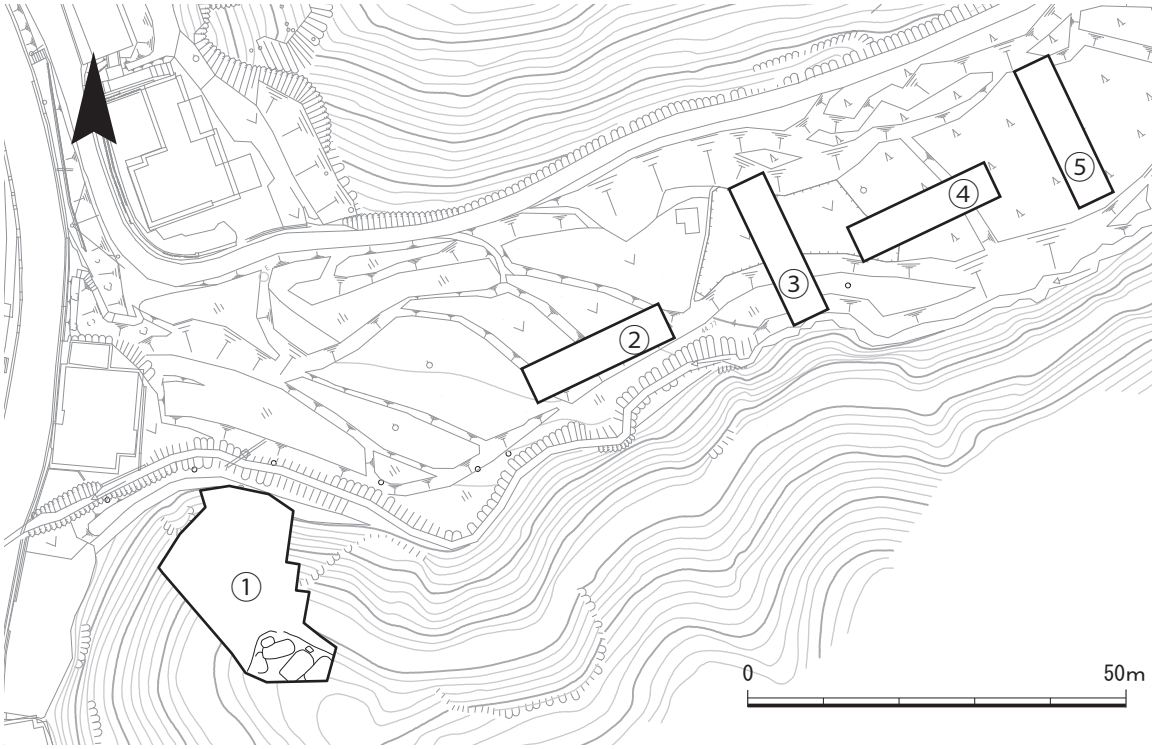
調査面積　700㎡



調査位置図（国土地理院　1/25,000　四辻）

はじめに　幾地城跡は、野田川支流の岩屋川左岸の丘陵上に位置する山城である。城の南には岩屋峠を経て兵庫県但馬地域へ向かう街道が、城の西には平地峠を経て京丹後市大宮町に至る街道が通っている。これまで調査履歴はないものの、多数の曲輪や竪堀が良好な状態で確認されている。調査は、平地川通常砂防業務に伴い京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要　令和４年度は、城跡北側の谷部に設置した４か所のトレンチ（②～⑤）と尾根先端に設置した①トレンチのうち墳頂部平坦面を調査した。②～⑤トレンチの上層は耕作地化がなされる段階で攪乱されており、安定面を確認できなかった。耕作土層より下層には平地川上流から流れ込んできたと考えられる土砂が深く堆積しており、一部



調査トレンチ配置図

のトレンチにおいては河川堆積の下層から花崗岩の岩盤層を確認した。

土砂の堆積は粒径のまとまる砂層もあれば、細粒砂から径１mを超える巨大な花崗岩まで混ざりながら堆積している層もあり、安定的に土砂が堆積していた時期と土石流などで急激に埋没した時期があることを示している。谷部の耕作土層などからは土師器や須恵器が出土しているものの、前述したように安定面は確認できず、遺構も検出していない。

写真　第１トレンチ全景(南から)

①トレンチは、調査開始当初は中世城館に関連する遺構が検出されると想定していたが、弥生時代後期後半の土器片が尾根先端平坦面から出土した。このことから、弥生時代の墳墓が位置する可能性を想定し、土器片の位置を記録して土砂除去を行い令和４年度の調査を終了した。

令和５年度は、①トレンチを拡張して尾根頂部平坦面から北斜面の裾部にかけて調査区を設定した。墳頂部平坦面では、表土下50cmほどで埋葬施設を７基確認した。木棺墓が３基、土壙墓が３基、土器棺墓が１基である。木棺墓のうち２基に破砕供献の土器が散布された状況が確認でき、そのいずれからも鉄製品が数点出土した。木棺墓は３基とも組合せ式木棺であった。土壙墓からも供献土器とみられる土器片が少数出土している。北斜面は急傾斜であったことから足場を設置して掘削作業に当たった。中世段階で山城築城に伴う造成で削平された土砂が堆積した状況が確認できたのみで、山城に伴う遺構・遺物は確認できなかった。墳墓から転落したとみられる弥生時代後期後半の土器が斜面地の上方から出土した以外に遺物は出土していない。

まとめ　平地川谷部においては砂層の堆積と土石流の痕跡、丘陵部平坦面では花崗岩由来の風化した砂層を確認し、近世以降の耕作面以下に安定面は確認できなかった。尾根上では弥生時代後期後半の埋葬施設を７基検出した。新たに見つかった墳墓については、与謝野町教育委員会と協議した結果、ソブ谷墳墓と名づけられた。ソブ谷墳墓は、丘陵先端部に平坦面を造り出して営まれており、木棺墓２基と土坑墓３基からは破砕供献された土器群が出土した。

また、①トレンチの調査区外南東部に土砂の盛り上がりや堀切と思われる痕跡が確認できることから、調査地は弥生時代に墳墓地として活用されたのち中世段階で山城の一部として再び利用されたと考えられる。

（加藤雄太）

７．上安久（かみあぐ）城跡第３次、上安久古墳群

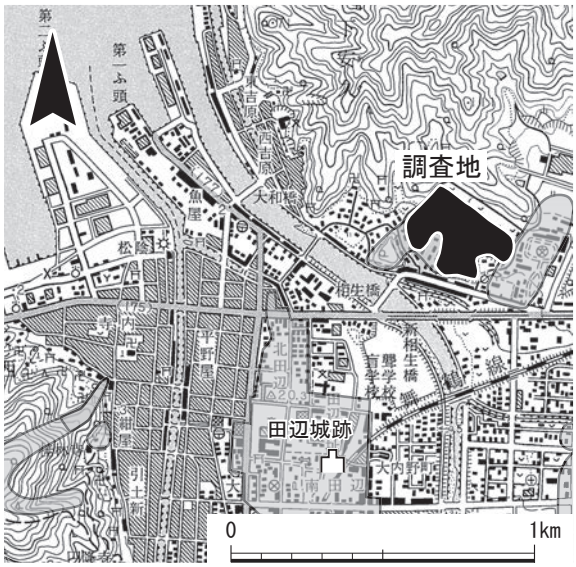
所 在 地　舞鶴市字上安久

調査期間　令和５年６月27日～令和５年10月30日

調査面積　1,000㎡

はじめに　上安久城跡・上安久古墳群は、西舞鶴の伊佐津川右岸の河口付近の独立丘陵上に所在する。丘陵の西側に、上安久古墳群として３基の古墳が登録されている。また、同丘陵付近には「陣取」の小字名が残り、中世に安久氏が築造したと伝える上安久城跡が遺跡地図に登録されていた。上安久城跡として平成16・17年度に当調査研究センターが調査を行っており、丘陵北西斜面で平安時代末頃から鎌倉時代初頭頃の石組遺構等を、南西側に所在した独立丘陵上で、曲輪の可能性のある平坦面５か所を確認している。今回は、丘陵尾根上の５か所で小規模調査を行った。調査は国土交通省近畿地方整備局舞鶴港湾事務所からの依頼で実施した。

調査概要　５か所の調査区では、地点により表土下に流土等が確認されるものの、それぞれ概ね表土直下で地山を検出した。西側に位置する１区には２号墳が想定されていたが、埋葬施設等の墳墓に伴う遺構・遺物は確認できなかった。１区南端では、調査区外に位置する３号墳の築造に伴う丘陵切断の痕跡を確認した。２区は丘陵頂部に位置し、尾根の分岐点となる地点において、埋葬施設の可能性のある隅丸長方形の遺構（長さ2.5m・幅1.1m）と周溝の可能性のある溝状遺構等を部分的に確認した。直径25～30mの円墳となる可能性がある。２区の南側の５区には平坦面が広がり、土坑・ピット・焼土等を数基確認した。２区から東側に分岐する尾根に設定した３・４区では、顕著な遺構は確認できなかったものの、表土掘削時に18～19世紀代の土師器・陶磁器等が複数出土しており、この時期に何らかの土地利用があったと考えられる。２～５区付近の丘陵斜面には平坦面が階段状に分布しており、帯曲輪等の可能性が指摘されていた。しかし、これらは流土を整形して造られており、城郭に伴う遺物も確認できないことから、城郭関連遺構ではないと判断した。



調査位置図（国土地理院　1/25,000　西舞鶴）

まとめ　今回の調査の結果、丘陵尾根上の遺構・遺物の分布は稀薄であり、予想されていた２号墳や城郭関連遺構は確認できなかった。しかし、丘陵の一部に遺構が点在する状況等を確認した。遺構周辺は次年度に本調査を行う予定である。　（荒木瀬奈）

8．稚児野（ちごの）遺跡第５次

所 在 地　福知山市夜久野町井田

調査期間　令和５年５月８日～令和５年８月22日

調査面積　650㎡

はじめに　稚児野遺跡は、由良川の支流牧川により形成された河岸段丘上の遺跡で、縄文時代から中世の遺物散布地とされてきた。しかしながら、令和元年度の第２次調査で後期旧石器時代前半期の石器が出土したので、令和２・３年度に面的に旧石器時代遺跡の調査（第３・４次調査）を実施した。その結果、第３次調査区では、チャートとサヌカイトを石材とするブロック（石器集中部）が、第４次調査区では、サヌカイトを石材とする複数のブロックが楕円を描いてめぐる環状ブロック群の存在を確認した。環状ブロック群の検出は、京都府内では初めてで、西日本全体でも貴重な事例となった。今回の調査は、第３次調査区と第４次調査区の間に残された道路部分で実施した。調査は国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受け実施した。

調査概要　調査は、重機でアスファルト道路面等を除去したのち、近現代の盛土や耕作土（クロボク土）を除去した。その後、人力による掘削を開始し、調査区北側の平坦部からAT火山灰を含む層や、下層の石器出土層（黄褐色粘質土）を確認した。面的な精査の結果、北側平坦部よりサヌカイト剥片３点、チャート剥片３点、石斧の素材石材とみられる礫15点が出土した。しかし、旧石器時代の礫群や土坑、さらに炭化物の集積などは確認できなかった。調査区南側の斜面地については、道路部分の工事掘削による改変が著しく、石器の出土層も完全に消滅していた。

まとめ　今回の調査では、ブロック礫群や土坑などの遺構は検出されず、石器の出土点数は極めて少なかった。石器は、サヌカイトとチャートの両方の剥片が出土しているが、分布状況も散漫であることから第３次調査と第４次調査で見つかったブロック群間の空閑地的様相を示しているといえよう。当初から、今回の調査地は、これまでの調査区の石器の分布範囲が今回の調査区方向へ広がらないこと、調査区南側は谷地形に向かって傾斜していくことなどから、遺構は希薄で石器の出土点数も少ないことが予想されたが、そのとおりとなった。その結果、第３次調査・第４次調査で検出した東西の石器ブロック群のそれぞれのまとまりがより顕著になったといえる。出土石器については、現在整理作業中で、石器の接合関係からみた環状ブロック群の性格、遠隔地からの石材獲得活動などを検討中である。　（黒坪一樹）

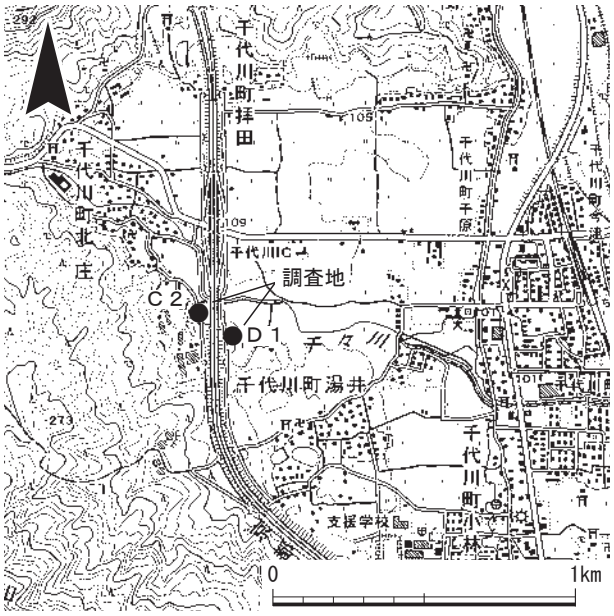
調査地位置図（国土地理院 1/25,000　福知山西部）

９．千代川（ちよかわ）遺跡第35次Ｃ・Ｄ地区

所 在 地　亀岡市千代川町北ノ庄

調査期間　令和５年５月11日～令和５年11月24日

調査面積　2,040㎡



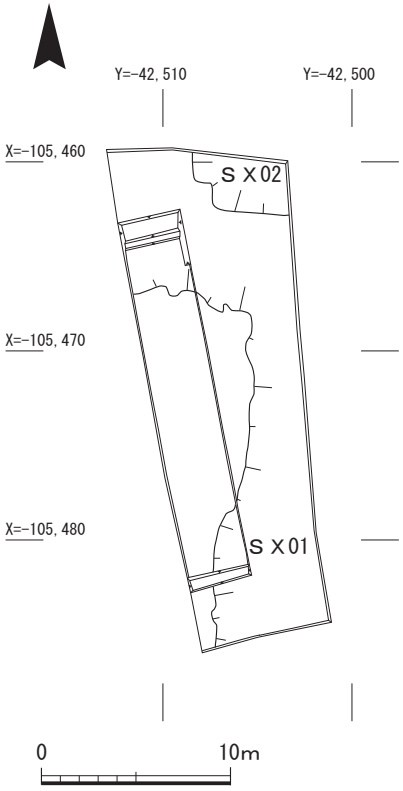
調査位置図　（国土地理院　1/25,000　亀岡）

はじめに　千代川遺跡は、亀岡市北西側に所在する千代川町のほぼ全域に及ぶ広範囲の遺跡で、縄文時代から中世にかけての集落遺跡である。遺跡内には、丹波国府推定地や古代寺院跡の桑寺廃寺も含まれる。これまで数十次にわたる調査が行われ、承和７（840）年の木簡や多数の墨書土器、陶硯なども出土しており、官衙的な施設の存在も想定されている。国営緊急農地再編整備事業に伴い農林水産省近畿農政局の依頼を受けて調査を実施した。

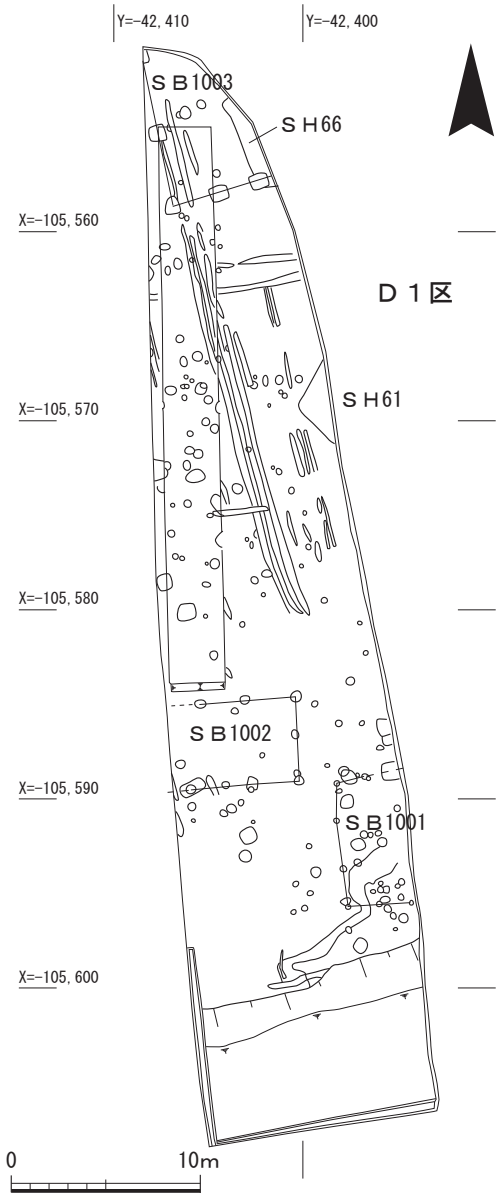
調査は、当初、Ｃ・Ｄ地区全体の遺跡の状況を確認する小規模調査を実施した。その後、遺構や遺物を確認した箇所について、関係機関と協議の上、Ｃ２区・Ｄ１区として本調査を実施した。

調査概要　Ｃ２区では、小規模調査で西から東方向に張り出す地山状の部分を確認し、その南北側の堆積土中から遺物が出土したため、拡張して本調査を行った。ＳＸ01は、当初、溝状遺構の可能性を考えたが、調査の結果、盛土および斜面の堆積土と判明した。堆積土中から、古墳時代前期頃から中世にかけての遺物が数多く出土した。ＳＸ02は、隅入り形に造成された中世以降の耕作地の一部である。埋土から、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した。

Ｄ１区は、昭和56年度に弥生時代から中世にかけての遺構を検出した調査地の東側に隣接する部分である。調査区の東隣りは後世に大きく削られている。Ｄ１区で検出した主な遺構は、竪穴建物２基と掘立柱建物３棟である。そのうち、竪穴建物ＳＨ61は、一辺約４ｍの方形を呈する。北



Ｃ２区遺構配置図



Ｄ１区遺構配置図

東側は後世の削平のため、残存していない。南辺西側寄りに貯蔵穴と考えられる土坑がある。この建物からは土師器がわずかに出土したのみである。時期は、古墳時代頃と考えられる。

竪穴建物ＳＨ66は、一辺約5.7mの方形建物である。東半部は、後世の削平のため、残存していない。内側に周壁溝が巡る。建物内から古式土師器の甕、高杯、小型丸底壺等が多数出土した。須恵器は出土していないので、古墳時代前期～中期初頭頃の建物と考えられる。土器は、建物床面よりも建物埋土から出土したものが多い。建物廃絶時に祭祀的な行為が行われたか、廃絶後にゴミ捨て場として利用された可能性が考えられる。

掘立柱建物のうち、ＳＢ1001は、南北３間・東西２間以上の建物と考えられる。柱間は約2.0～2.5mで、柱穴掘形は円形で径約0.3mと小型である。ＳＢ1002は、南北２間・東西２間以上の東西棟の建物とみられる。柱間は約2.2～2.4mで、柱穴掘形は円形で径約0.5mである。ＳＢ1003は、南北２間以上・東西２間以上の建物と考えられる。柱穴掘形は方形で、一辺0.8mを測る。柱間は東西約2.4m、南北約４mを測る。上記２棟の建物は正方位にほぼ沿っているが、この建物はやや西側に軸を振る。これらの掘立柱建物は、伴う遺物が少なく明確な時期は不明であるが、古代から中世にかけての建物と考えられる。

まとめ　Ｄ１区は、西側の山地から東側に張り出す舌状台地に位置している。今回の調査では、昭和56年度調査で確認した集落遺跡が東側へ広がることを確認した。このことは、この地が、亀岡盆地を見渡すことができる、良好な立地にあることを再認識させる。

出土遺物で注目されるのは、Ｃ２区から出土した縄文時代草創期の有舌尖頭器である。千代川遺跡では、以前の調査でも有舌尖頭器が出土している。このことは、千代川地域周辺で、１万年以上前から人々の生活が行われていたことを示唆するものと考えられる。（引原茂治・山本 梓）

10. 南金岐（みなみかなげ）遺跡第２次・千代川遺跡第36次

所 在 地　亀岡市大井町南金岐、千代川町北ノ庄

調査期間　令和５年７月21日～令和５年11月20日

調査面積　南金岐遺跡250㎡、千代川遺跡420㎡

はじめに　南金岐遺跡と千代川遺跡は、亀岡盆地の中央を縦断する大堰川右岸の沖積地に所在する。今回の調査は、盆地西部の丘陵に沿う京都縦貫自動車道路インターチェンジ料金所の新設工事に伴い、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所の依頼を受けて実施した。両遺跡とも縄文～中世の集落遺跡として周知されている。

調査概要

南金岐遺跡　調査地は京都縦貫自動車道の西側側道沿いの水田に位置する。調査トレンチは、全長約80m・幅2.0～2.9mの規模を測る。地表下0.8m付近に無遺物の黒色シルトが広範囲に広がり、その上に氾濫堆積した砂・粗砂とシルトのラミナ層が存在する。顕著な遺構は存在せず、黒色シルトを削る自然流路４条を検出した。流路とラミナ層中から弥生時代後期～中世の土器が出土した。遺物の多くはローリングを受けている。

千代川遺跡　調査地は千々川扇状地に位置し、北から順に第１～第４のトレンチを設けた。第１トレンチでは平安時代～中世の土器を含む自然流路４条を検出した。第２トレンチでは中世の総柱建物の一部と、自然流路２条を検出した。総柱建物は南北２間（約4.6m）・東西１間（約2.0m）以上を測る。第３・第４トレンチは中世以降の大規模な削平で、遺構面が失われていたが、両トレンチを跨ぐ幅約30mを測る自然流路を検出した。埋土からの出土遺物は僅かであるが、底面付近から古墳時代後期の土器が出土している。

まとめ　南金岐遺跡では遺構は未検出であったが、弥生時代後期～中世の土器を含む自然流路を検出した。遺跡中心地は、西側丘陵裾部と推測される。千代川遺跡では、多数の自然流路を検出するとともに、中世の総柱建物１棟を検出した。遺構面が削平された第３・４トレンチにも遺構が存在した可能性があるが、出土した弥生時代後期から中世の土器は量的には僅かであり、ローリングを受けている。

（竹原一彦）

調査位置図（国土地理院1/25,000　亀岡）

11. 與能（よの）遺跡第４次

所 在 地　亀岡市曽我部町寺地内

調査期間　令和５年５月25日～令和５年10月10日

調査面積　小規模870㎡、本調査540㎡

はじめに　與能遺跡は亀岡市の南西部にあり、北東方向に流れる曽我谷川が形成する小盆地の東端に位置している。東側の山塊から西に向けて扇状地が形成されている。調査地の南側には延喜式内社の與能神社があり、同神社北側700mの御旅所からは本薬師寺系の軒瓦が出土し、近辺に白鳳寺院（與能廃寺）の存在が推定されている。今回の調査は、農林水産省近畿地方農政局の依頼を受けて、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」における埋蔵文化財の発掘調査として実施した。

調査概要　調査は小規模調査区と本調査区の２か所で実施した。両調査区の間には小さな谷が東西にあり、谷の南斜面および谷内が小規模調査区に、北側の尾根の南辺が本調査区となる。

小規模調査区では、東西100m、南北100mの範囲に10か所のトレンチを設けて実施した。調査の結果、中世段階の区画溝や小溝群を一部の調査区で検出しただけで、顕著な遺構は確認できなかった。土層の観察により、中世段階に田畑としての土地利用が開始され、近世段階にも一部の田畑の整備が行われており、現状に見て取れる田畑は近代～現代の整備に伴うものであることが判明した。また、西辺の低地にあたるトレンチでは南北方向の流路跡が認められ、西側に分布する曽我谷川の支流からの氾濫が頻繁にあったことが推定された。

本調査区は與能神社御旅所の南西側に接する位置にあたり、本調査区の北側は丘陵上の平坦地にあたり、住宅が密集している。調査区の北東部分で中世段階の土坑１基、近世後半から近代の石組み井戸、木桶を埋置した井戸、土坑等を確認した。これらの遺構は削平を受けており、整地土に覆われていた。この土層からは奈良時代以降の須恵器から近代の陶磁器などに混じって、土師質の瓦片が出土し、與野廃寺の関連遺物である可能性がある。また、水路部分の調査では、遺構面や包含層は現在の田畑の造成により削平を受けており、基盤の砂礫層を確認しただけであった。

調査位置図（国土地理院　1/25,000　法貴）

まとめ　小規模調査区は中世段階に田畑としての土地利用がはじまり、以後、幾度かにわたって田畑の整備・開墾がなされたが、宅地としての土地利用はなされなかった。本調査区では中世段階の遺構や奈良時代の遺物を確認し、周辺に同時期の遺構が分布する可能性がある。　（岩松　保）

12. 春日部（かすかべ）遺跡第８次

所 在 地　亀岡市曽我部町春日部東垣

調査期間　令和５年５月17日～令和５年７月６日

調査面積　210㎡

はじめに　春日部遺跡は、山間から平地に開けた谷の出口部分にあり、今回の調査地は遺跡の縁辺、山稜の西側斜面中腹に位置する。国営緊急農地再編整備事業に伴うもので近畿農政局の依頼を受けて実施した。

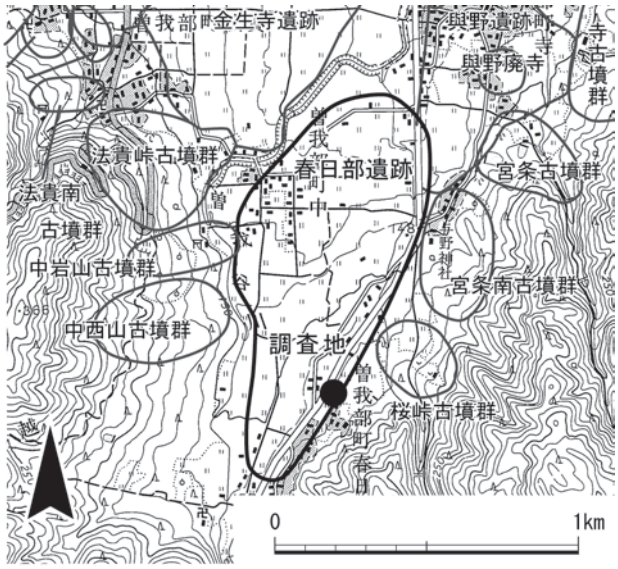
前年度、亀岡市教育委員会が実施した小規模調査で、奈良時代から中世にかけての遺物が確認され、周辺に遺構が存在することが想定されたため、拡張対象となった３か所の調査を実施した。

調査概要　調査区１は、東西９ｍ・南北24ｍを測る。耕作土直下で、瓦器の細片を含む層を確認した。その下層は、灰オリーブ細砂の下によく締まった黄褐色粘質土と黒褐色粘質土からなる基盤土で、その上面が遺構面になるものと判断した。精査した結果、幅3.6ｍ、深さ0.8ｍ、長さ18ｍを測る溝状の遺構を検出した。埋土は、礫を主体とする砂礫で、礫は１cm程度のものから人頭大のものまで含まれる。埋土の上層で、甕と杯Bなどの須恵器片がまとまって出土し、溝の底部からはＴＫ217型式の須恵器杯が出土した。

調査区２・３は、前年度調査で南北に延びる溝状の遺構が確認された範囲を南北に延長する形で調査範囲を設定した。調査区２が39㎡、調査区３が13㎡といずれも小面積である。調査範囲が水路部分を対象とするため、幅が狭く調査範囲内で溝の肩を確認できなかったが、溝状の遺構が南北に延びることが確認できた。

調査区１で検出した溝とほぼ同じ方向に流れており、連続するものであれば延長は66ｍとなる。溝の埋土は、礫が主体で、礫の間を砂が埋めている状況で人頭大の礫も含まれており、土石流により一気に埋まったことが想定された。

まとめ　今回の調査では、人為的な建物等の遺構は確認できなかったが、自然流路と考えられる溝を検出し、古墳時代後期から奈良時代にかけての土器が出土した。溝の上流側に遺跡が広がることが明らかになり、遺跡の全体像を考えるうえで貴重な知見を得ることができた。　（﨑山正人）



調査位置図（国土地理院　1/25,000　法貴）

13. 井手（いで）遺跡第10次

所 在 地　亀岡市本梅町西加舎

調査期間　令和５年６月５日～令和５年９月28日

調査面積　2,030㎡

はじめに　井手遺跡は、園部川の支流・本梅川により形成された本梅盆地西側に位置し、行者山・半国山間の扇状地上に所在し、現在の集落範囲にほぼ重なる範囲の遺跡、散布地として周知されている。令和３年度から近畿農政局の依頼を受けて、国営農地再編整備事業に伴う発掘調査を継続して行っており、今年度は、前年度に行った小規模調査で遺構及び遺物が確認された地点の西側にあたる調査区を面的に調査した。

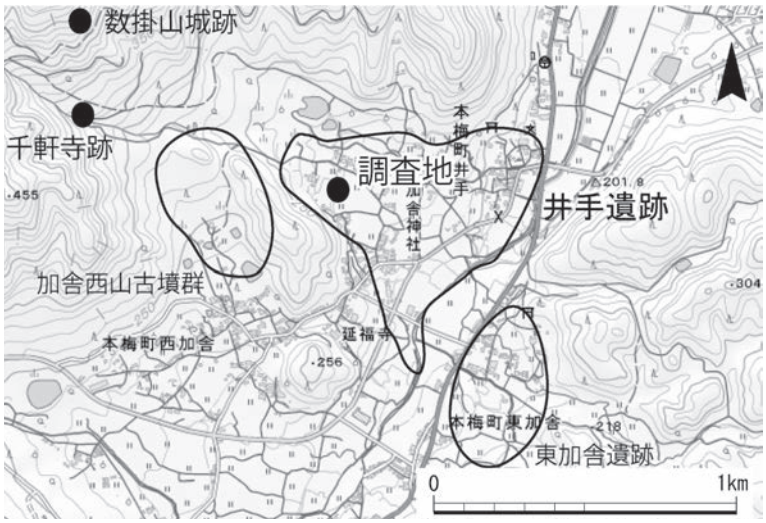
調査概要　今回の調査では、東西に並ぶ４か所の調査区で調査を行った。

西側の２か所の調査区で柱穴、土坑、溝、木桶などを確認した。確認した柱穴のうち、掘立柱建物が復元できるものは２棟であった。その２棟は梁行２間・桁行３間の規模で重なるように検出しており、建て替えが行われた可能性が考えられる。柱穴、土坑、溝内からは、土師器皿、瓦器椀、白磁・青磁の破片が出土しており、中世中頃のものである。第７次調査で確認された礫の廃棄土坑も確認した。

その他、中世後期から近世にかけての唐津焼や丹波焼などが落ち込みから出土した。落ち込みは、現在の畔とほぼ平行に並び、石垣を伴っていることが確認できた。また、江戸時代後期以降と考えられる楕円形の桶を埋め込んだ土坑２基と円形の桶を埋め込んだ土坑１基を確認した。

東側の２か所の調査区では、ピット列群などを確認したが、建物の復元には至らなかった。

まとめ　今回の調査では、前年度の調査に引き続き、中世中頃の当該地域における集落についての成果を得られた。また、それ以降にも土地の利用があったことを確認した。



調査地および周辺の遺跡（国土地理院　1/25,000）

令和３年度から今年度までの調査によって、井手遺跡では中世を通じて、居住地が、府道731号沿いの低い位置から北西方向の高い土地に移動していることが確認できた。府道沿いの加舎神社周辺からは、平安時代末の掘立柱建物が確認されているため、約200年かけて周辺環境を整備しながら移動したことが考えられる。　（松谷友香）

14. 法貴（ほうき）古墳群第１・２次（Ａ地区）

所 在 地　亀岡市曽我部町法貴地内

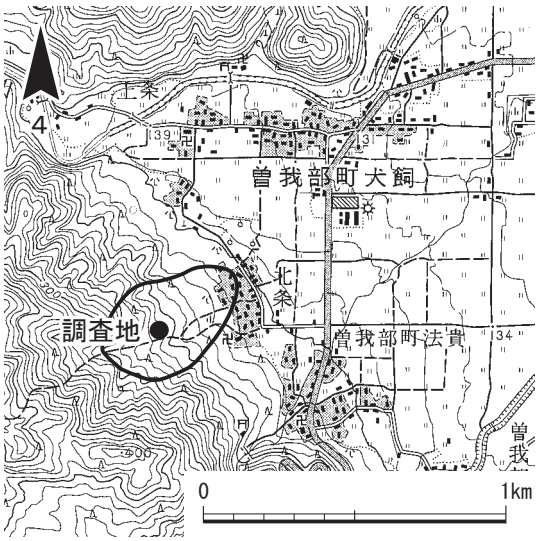
調査期間　第１次調査　令和４年５月18日～令和５年２月24日

　　第２次調査　令和５年５月６日～令和６年２月下旬（予定）

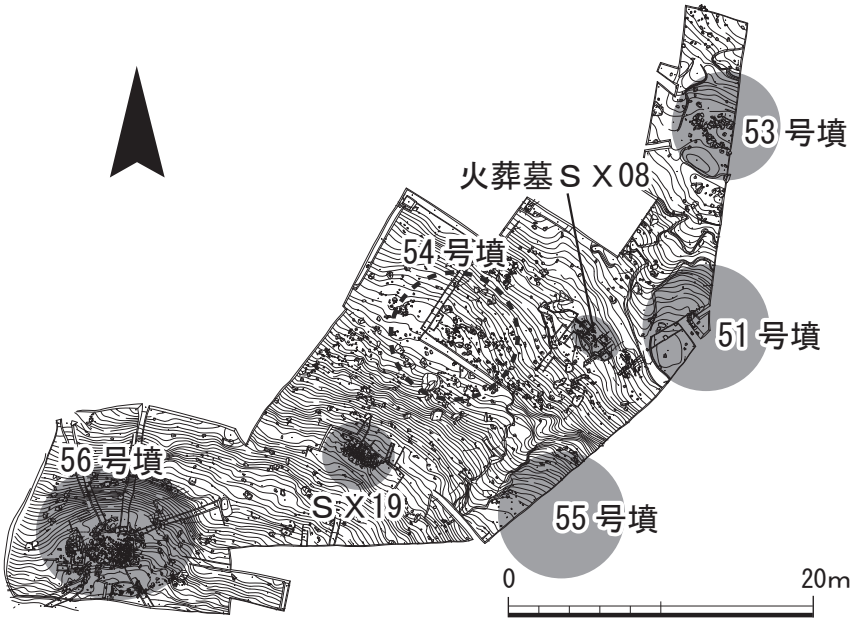
調査面積　660㎡

はじめに　法貴古墳群は、亀岡市曽我部町法貴に所在し、亀岡盆地南西の霊仙ヶ岳の裾部に立地している（第１図）。法貴古墳群は総数66基からなる古墳群である。法貴北古墳群第２次調査に引き続き、古墳群の北側に位置するＡ地区で第１次調査を開始した。第２次調査では、第１次調査から継続するＡ地区とＡ地区の南側に設定したＢ地区で調査を実施している。Ｂ地区については、７月から調査を開始し、次年度も継続して調査を実施する予定である。調査は、国道423号（法貴バイパス）防災・安全交付金業務委託ほかに伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要　調査前のＡ地区（第２図）には、51・53・54・55・56号墳が位置しており、これらを含めて調査区を設定した。51号墳は、調査区東側中央に位置する推定直径約７ｍの円墳である。石室の一部が調査地内に位置しているが、奥壁、左側壁の一部のみが残存していた。石室内からは遺物は出土していない。53号墳は、51号墳の北に位置する推定直径約６ｍの円墳である（写真１）。石室の一部が工事対象地内となっていたが、石室の上面を検出した時点で保存されることになり、調査を終了した。瓦器片が出土していることから、中世以降に再利用された可能性がある。54号墳は、51号墳の西に位置する。墳丘は石材も含めて完全に流出しており、石室も失われたようで、墳丘規模などの復元はできなかった。石室があったと想定される地点は、平坦になっており、須恵器蓋杯や壺の破片が出土している。出土する須恵器から６世紀後半の古墳と推定される。55号墳は、51号墳の南に位置する推定直径約８ｍの円墳である。調査区内では、周溝を検出したが、埋葬施設などは確認できなかった。出土遺物もなく詳細は不明である。56号墳は、Ａ地区内最高所に位置する横穴式石室をもつ古墳である（巻頭図版）。石室規模は玄室長2.4m、玄室幅1.9mを測り、正方形プランを呈する（写真２）。床面には礫床が認められ、その上から、須恵器蓋杯、短頸壺、高杯、鉄鏃が出土した。墳丘裾部には、石材が認められ、墳丘内列石が



第１図　調査位置図
（国土地理院　1/25,000　法貴）



第２図　A地区平面図

構築されていたと考えられる。石室ＳＸ19は、56号墳の北東斜面上で検出した遺跡地図に登録されていない古墳である。規模は、玄室長約2.0m、玄室幅約0.7mを測る。石室内には、礫床が認められる。副葬品は出土していない。閉塞石外側から、土師器直口壺が出土している。墳丘は流出しており、墳形、規模ともに不明である（写真３）。

51号墳の南西で火葬墓ＳＸ08を検出した。土坑規模長軸約1.8m、短軸約1.2mを測り、２つの木櫃を納める（写真４）。木櫃からは８世紀前半の須恵器平瓶、蓋杯、人骨が出土している。なお、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の小田裕樹氏から、立地や埋納形態から地方の下級官人層の墓ではないかとご教示を得た。

まとめ　51・53・55号墳は、協議の結果、保存対象となった。56号墳の方形に近いプランの玄室をもつ石室形態や副葬品は、亀岡市千代川町の北ノ庄13･14号墳と類似する。これらの古墳は、南丹地域へ横穴式石室が導入された時期の古墳と考えられており、56号墳も同様に６世紀中ごろから後半の石室墳と考えられる。その後、７世紀になるとＳＸ19のような小規模な石室墳が築造されるようになる。さらに８世紀になると、火葬墓が造営される。『続日本紀』によれば、火葬墓は文武４年（700年）僧道昭の埋葬時に初めて採用された。その後４代にわたり天皇が火葬されたことで、貴族・官人層を中心に普及していく。８世紀前半の火葬墓を確認したことは、この地域に官人層がいたことを示す。また火葬墓は、古墳を避けて造っていることから、被葬者は古墳群の造墓集団と系譜を同じくすることも想定でき、墓域として認識されていたことを示すものと考えらえる。

今回の調査では、古墳群における一連の造墓活動と古墳群と同じ空間に火葬墓が造営されるという貴重な調査成果となった。（竹村亮仁）

表１　法貴古墳群A地区　古墳一覧

古墳	墳形	墳丘長	埋葬施設	袖	全長	玄室長	玄室幅	副葬品	築造時期	備考
51 号墳	円墳	7.0	横穴式石室	－	－	－		－	－	保存
53 号墳	円墳	6.0	横穴式石室	－	－	－	－	－	－	保存
54 号墳	円墳？	6.0	横穴式石室？	－	－	－	－	－	—	
55 号墳	円墳	8.0	－	－	－	－	－	－	－	保存
56 号墳	円墳	14.0	横穴式石室	両袖	4.4	2.4	2	須恵器杯蓋・高杯・短頸壷・鉄鏃	TK10 ～ MT85	
ＳＸ 19	円墳		横穴式石室	無袖	2.4	1.6	0.7	土師器直口壷	TK209 ～ 飛鳥Ⅰ	新規確認

墳丘長、全長、玄室長、玄室幅の単位はｍ

表２　法貴古墳群A地区　火葬墓

遺構名	埋葬形態	墓域規模	骨臓器	埋納施設	土坑規模 長軸／短軸	木櫃１規模 長軸／短軸	木櫃２規模 長軸／短軸	副葬品	時期	備考
ＳＸ 08	火葬墓	8.0	木櫃	素掘土坑	1.8/1.2	0.79/0.69	0.5/0.5	須恵器蓋杯・平瓶	平城Ⅱ	副葬品は木櫃１

墳丘規模、土坑規模、木櫃規模の単位はｍ

写真１　53号墳全景（南東から）

写真２　56号墳玄室全景（西から）

写真３　ＳＸ19石室内完掘状況（南東から）

写真４　火葬墓ＳＸ08　木櫃検出状況（北東から）
木櫃１（左）と木櫃２（右）

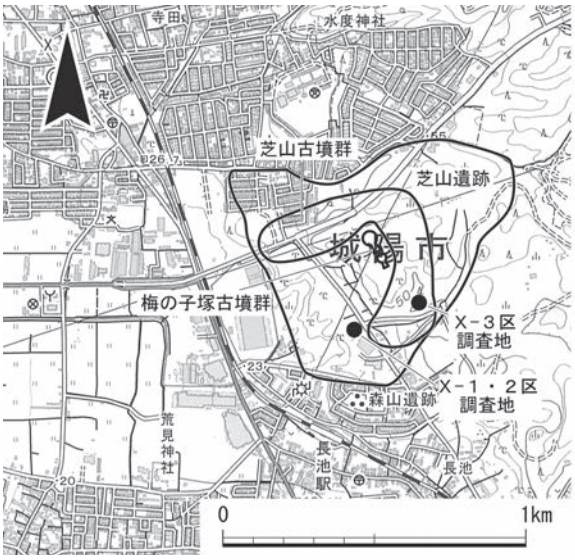
15. 芝山（しばやま）遺跡・芝山古墳群第22次

所 在 地　城陽市富野上ノ芝・中ノ芝

調査期間　令和５年５月22日～令和５年10月30日

調査面積　492㎡

はじめに　芝山遺跡は、城陽市東部に広がる丘陵上に位置し、東西約950m、南北約840mの範囲に広がる集落遺跡で、重複して芝山古墳群が分布する。これまでの21次にわたる調査で、中小規模の古墳37基のほか、古墳時代の竪穴建物、奈良時代の掘立柱建物、道路状遺構などが見つかっている。今回の調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。



第１図　調査位置図（国土地理院　1/25,000）

調査概要　Ｘ－1・２地区では顕著な遺構は検出できなかった。

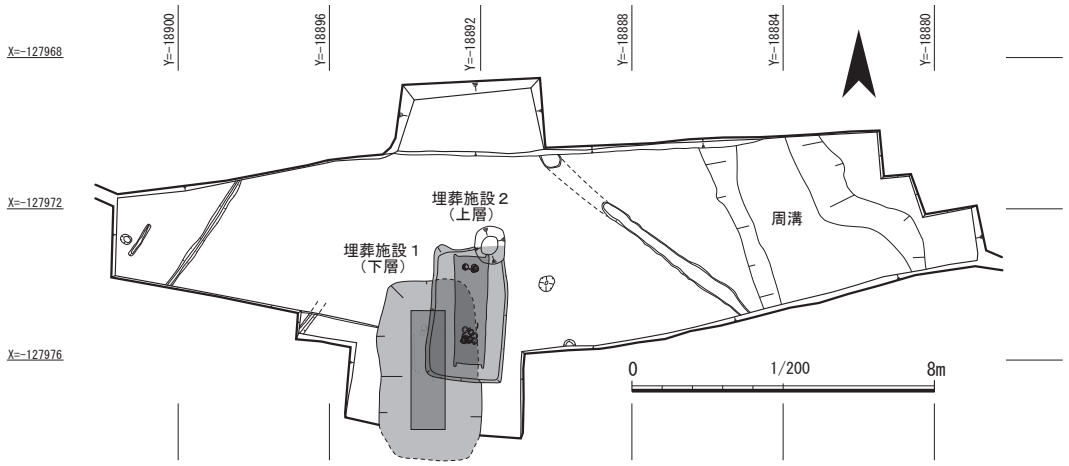
Ｘ－３地区は、丘陵南東部の支尾根上に設けた調査区である。第20次調査Ｖ－５地区の南側に位置し、同調査で検出されていたＶ－２号墳の周溝の延長部と竪穴系埋葬施設２基を重層して検出した（巻頭図版）。

下層の埋葬施設１は、直径18mに復元される円墳の中央部に営まれた木棺直葬の埋葬施設である。主軸はほぼ南北方向で、地山を掘り込んで墓壙を構築する。墓壙の南端は削平されているが、推定長4.9m、幅2.7m、深さ1.1mを測り、中央部に木棺を据える。北頭位と見られ、頭位から須恵器（杯身２、杯蓋２）と刀子１が、足位から須恵器（杯身４、杯蓋４、高杯３、高杯蓋３、直口壺２、短頸壺４、短頸壺蓋１、壺１、甕１、提瓶１）と土師器（直口壺１）が出土した。このほか、棺内からガラス小玉、鉄刀、鉄鏃などが出土した。須恵器の型式（TK10）から古墳時代後期の６世紀中葉と考えられる。

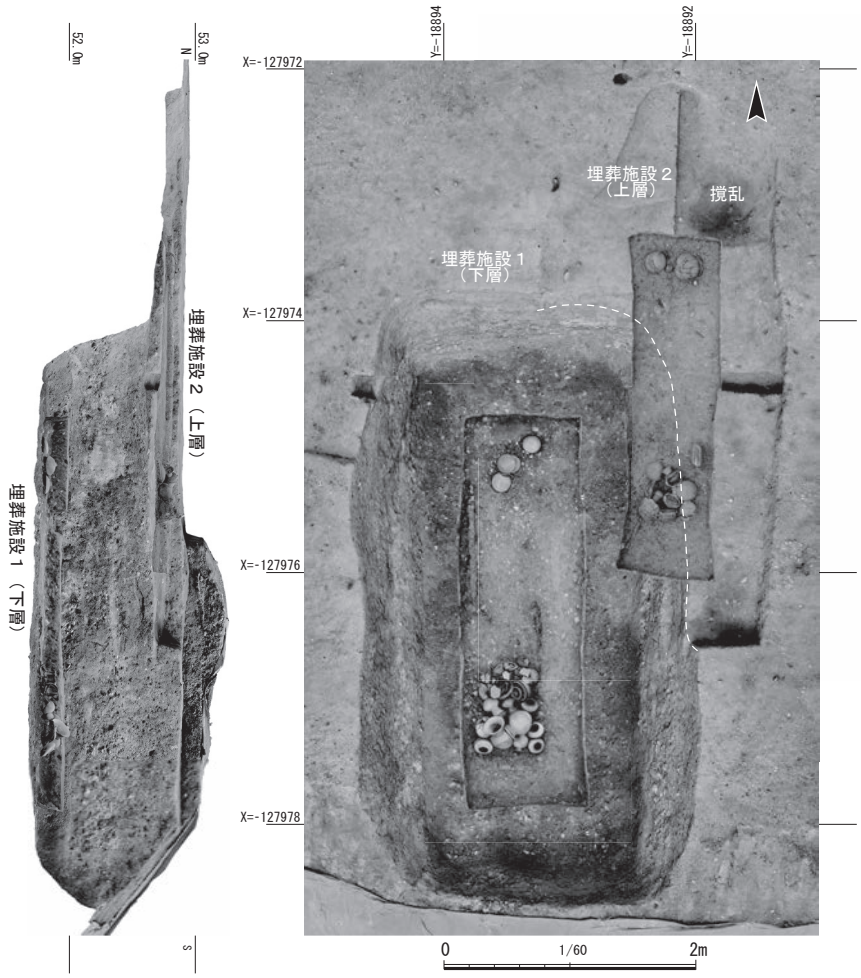
上層の埋葬施設２は、埋葬施設１の北東寄りに重複する木棺直葬の埋葬施設である。主軸は埋葬施設１と同様にほぼ南北方向で、墓壙中央軸は埋葬施設１墓壙の東上端と重なる。墓壙の上半は削平されているが、調査面で長さ3.5m、幅2.0m、深さ0.2mを測り、墓壙の中央部に木棺を据える。北頭位であり、頭位から耳環２と須恵器（杯蓋５）が、足位から須恵器（杯身５、直口壺１、脚付壺２、壺蓋２、提瓶１）が出土した。その他ガラス小玉、刀子が出土した。下層埋葬施設と土器型式は同じで、６世紀中葉と考えられる。

まとめ　Ｘ－３地区で検出したＶ－２号墳は直径18mの古墳時代後期の円墳で、中小の古墳か

ら構成される芝山古墳群の中では、比較的墳丘規模が大きい。墳丘内に竪穴系埋葬施設２基を重層的に配置していた。墳丘中央部に営まれた下層の埋葬施設１では土器多量副葬を行っている。上層の埋葬施設は、下層の埋葬施設と土器型式が同じで時間幅は少ない。下層埋葬施設と同様に多量の土器を副葬していた。重複する墓壙は芝山古墳群の中でも特異な例であり、改めて芝山古墳群の性格を評価する必要がある。（小槻賢志）



Ｘ－３地区検出遺構図



Ｖ－２号墳埋葬施設１（下層）埋葬施設２（上層）オルソ画像合成図
（全体完掘状況に遺物出土状況を重ねて表示）

16. 芝山遺跡・芝山古墳群第23次

所 在 地　城陽市寺田南中芝

調査期間　令和５年８月22日～令和５年10月25日

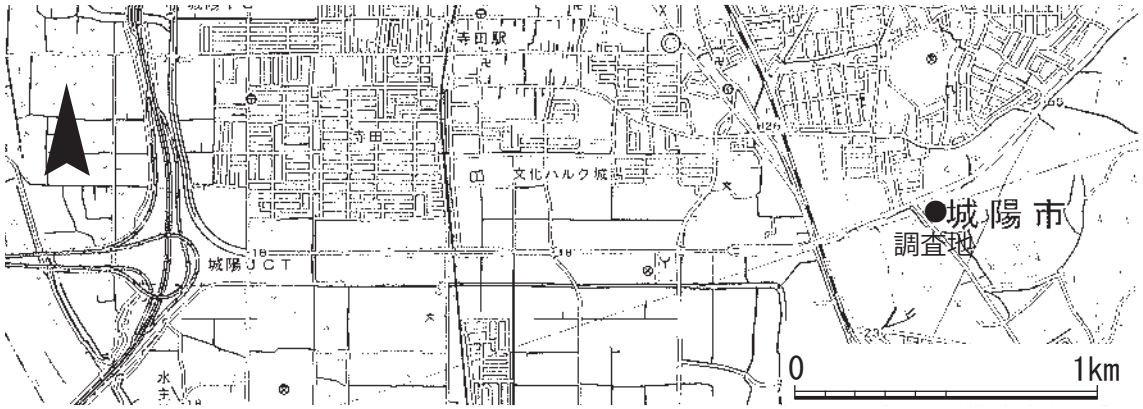
調査面積　350㎡

はじめに　芝山遺跡・芝山古墳群は、城陽市のほぼ中央部にある東から西へ延びる丘陵上に位置する。これまでの調査で、古墳時代前期の小規模な集落や古墳時代後期～平安時代初めの大規模な集落が確認されており、奈良時代前期には官衙的な掘立柱建物群が出現する。また、遺跡内では、10～20mの方墳や円墳が複数検出され、芝山古墳群として取り扱われるようになった。これまでの調査で４世紀末～６世紀末に築造された方墳や円墳が39基確認されている。

今回の発掘調査は、一般府道山城総合運動公園線橋りょう新設改良事業に伴い京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要　調査では、地山面で土坑や溝を検出した。直径約60cmの土坑からは、小型丸底壺１点と広口壺１点が出土した。小型丸底壺は完形で、ほぼ正位置に据えられた状態で出土した。広口壺は横倒しの状態で出土し､口縁部から体部の一部が残存していた。小型丸底壺は正位置に、広口壺は横位置に据えて埋納されていることから、この土坑は、古墳時代前期に行われた祭祀に関連する遺構と考えられる。調査区の中央付近では、北から西へ30°振る南北溝（幅47～90cm、深さ13～46cm）を検出した。埋土最上層上面で須恵器高台付底部片が出土した。調査区西端付近では、西へ35°振る南北溝（幅1.0～1.1m、深さ６～16cm）を検出したが、出土遺物はなかった。この２条の溝はほぼ平行しており、心々間の幅は約11mある。これらの溝は、昭和61年度第３次調査で検出された２条の溝の南側延長部と考えられる。第３次調査で検出した溝は道路遺構の側溝と指摘されており、今回の調査で道路側溝とされる溝がさらに南へ延びていることが確かめられた。

（小泉裕司）



調査地位置図（国土地理院　1/25,000　宇治）

17. 石原遺跡（いしはら）

所 在 地　相楽郡精華町柘榴松ケ平・石原・芦谷

調査期間　令和５年５月12日～令和５年８月３日

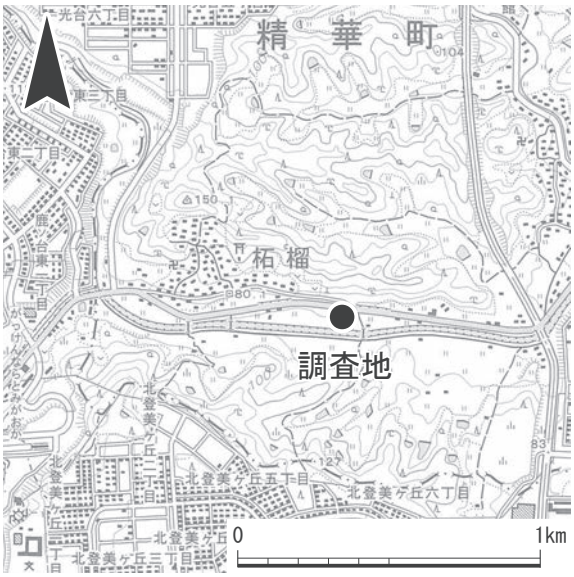
調査面積　600㎡

はじめに　国道163号精華拡幅事業として国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けた調査である。国道163号は大阪から三重まで近畿地方の東西を結ぶ、古くからの主要な経路である。調査地は山田川左岸の谷底平野に分類される場所にあるが、より微細な地形を見ると北側の丘陵から舌状に延びる地形の高まりがある。この地形の高まり以西では、古くからの大阪街道・清滝街道は丘陵斜面上を通っている。街道の地理的立地が、谷底平野と丘陵斜面とに分かれる転換点となっている。

調査概要　合計４か所の調査区（１～４区）を設定した。舌状地形の東下方に設定した調査区（１・２区）のうち、１区では国道面に合わせるため厚く盛土される状況を確認した。２区では第１面で明治以降と考えられる小溝群や時期不明の溝・土坑を検出した。また、その下位で山田川の氾濫で形成された地山を確認した。地山面では溝・ピット・落込みを検出した。これらの遺構からは12～17世紀の遺物が出土している。

舌状地形上の調査区（３・４区）では大阪層群の地山を確認したが、遺構は確認されなかった。遺物は重機掘削中などに土師器、須恵器、陶磁器、布目・縄目瓦片が出土しているが、量は僅少である。

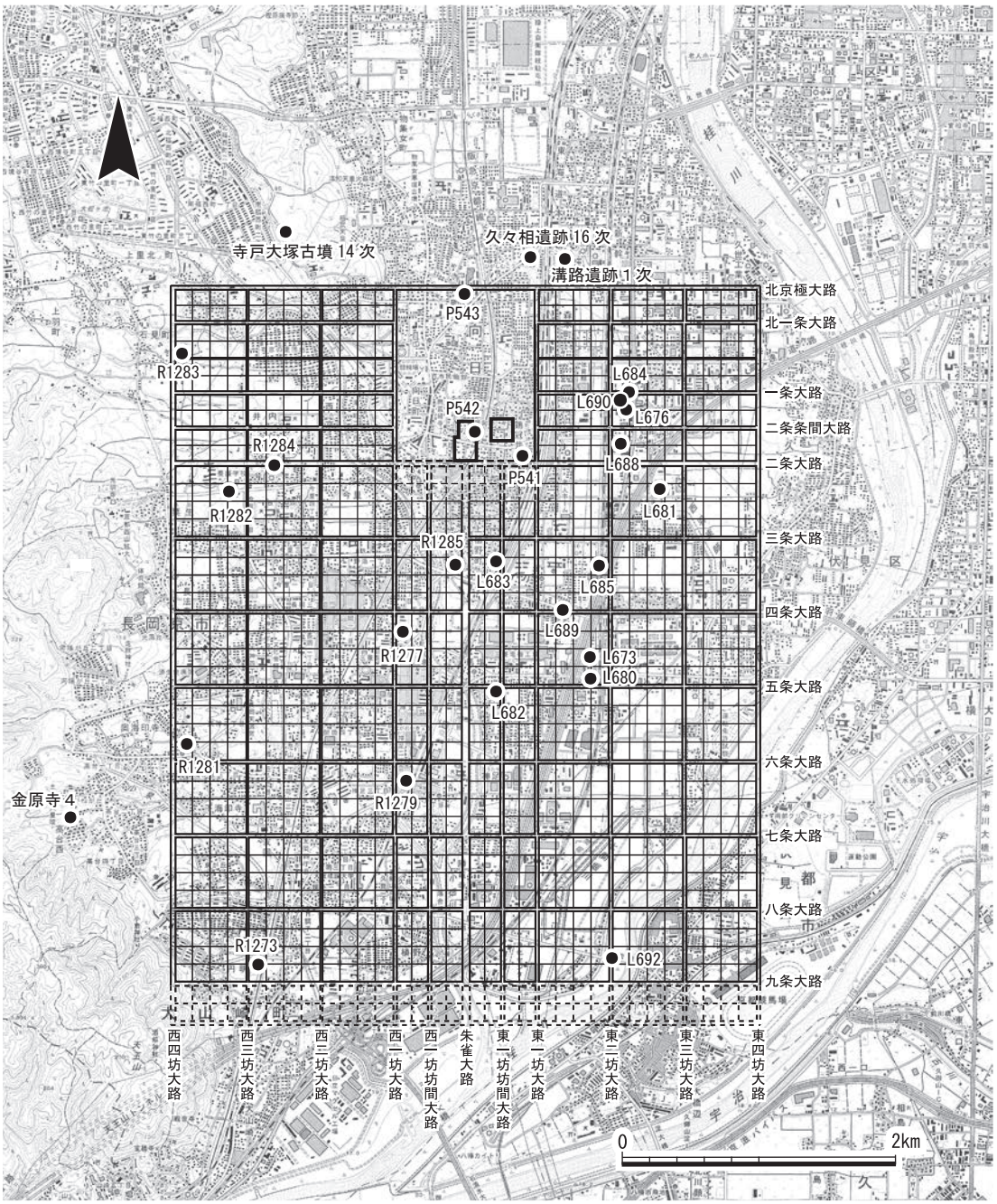
まとめ　今回は丘陵から山田川の谷底平野に延びる舌状地形の上と下方で発掘調査を実施した。舌状地形上では遺構が検出されず、遺物も僅少であった。一方、舌状地形下方（２区）では中世末～近世頃にあたる溝・ピット・落込みや明治以降の小溝群を検出するとともに、中世末～近世を中心とする遺物が整理箱１箱分出土するなど、立地により調査区の様相に明瞭な差が認められた。しかし２区から出土した遺物のほとんどは細片化しており、遺構も建物跡等は検出されなかった。古くからの集落や街道が山田川の氾濫を避けるように丘陵斜面上に展開している点からも、舌状地形下方から出土した遺物は上方から流入したものと考えられ、調査区付近は居住域ではなく、生産域として利用された場所と考えられる。　（加藤雅士）



調査地位置図（国土地理院　1/25,000）

長岡京跡調査だより・142

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的に、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和５年８月から令和５年12月までの例会では、宮域３件、左京域12件、右京域８件、京域外４件の合計28件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものを中心に略述する。



調査地位置図（１/50,000）
（向日市文化財事務所・（公財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域　**宮541次調査**（向日市鶏冠井町）は、東辺官衙地区で行った小規模調査である。長岡京期の大形柱掘形を検出した。**宮542次調査**（向日市鶏冠井町）は、大極殿東面回廊での調査で、礎石９個が想定される地点で７基の痕跡を確認した。柱間南北（桁行）3.6m（12尺）、東西（梁間）2.4m（８尺）を測る。**宮543次調査**（向日市寺戸町）は、朝堂院中軸宮内道路西測溝推定地で行った。中世の礫敷き遺構の下層から幅1.6mの溝を確認したが、出土遺物がなく時期は不明である。

左京　**左京673次調査**（長岡京市神足・雲宮遺跡）では、東二坊坊間東小路の東側溝が南北50mにわたって検出された。東側の左京五条二坊十四町の宅地は、50mに及ぶ11尺等間の東西柵列と調査区東端で検出された東西柵列につながる南北柵列により、４分割されていたようである。南西側の宅地からは南北２間・東西５間の主屋に南庇が付く掘立柱建物が検出された。下層の調査も行われたが、古墳時代以前の流路を確認したのみで顕著な遺構・遺物は確認されなかった。**左京676次調査**（向日市鶏冠井町・鶏冠井遺跡）では、長岡京期の掘立柱建物２棟、柵列２条、土坑５基等が検出された。**左京680次調査**（長岡京市馬場）では、五条大路の南北両側溝が検出された。**左京681次調査**（京都市伏見区久我西出町）では、長岡京期の遺物を含む南北溝が検出された。東三坊坊間東小路西測溝の可能性がある。**左京684次調査**（向日市鶏冠井町・鶏冠井遺跡）では、一条大路と東三坊坊間西小路の交差点にあたり、一条大路南側溝と東三坊坊間西小路西測溝が検出された。東三坊坊間西小路西測溝は、一条大路をまたがない。左京688次調査（向日市鶏冠井町・鶏冠井遺跡）でも二条条間南小路北側溝が良好な状態で検出されている。

右京　**右京1273次調査**（大山崎町円明寺）に係る立ち合い調査では、本調査で確認していた奈良時代の整地層（礫敷き）の広がりが確認された。**右京1277次調査**（長岡京市開田・開田遺跡）では、弥生時代末期の方形周溝墓、奈良時代の直線的な溝、六条条間南側溝などが検出された。奈良時代の溝からは、乙訓寺の創建軒丸瓦によく似た軒丸瓦が出土した。

京域外　国道171号線からJR向日町駅への東西アクセス道路の計画があり、2021年度から試掘調査が開始された。今回の試掘調査（京都市南区久世殿城町）で隅丸方形の柱穴から須恵器壺が出土したことと前年度の試掘調査の成果から、新たに**溝路遺跡**として遺跡の範囲が周知された。**寺戸大塚古墳第14次調査**（向日市寺戸町）が東くびれ部で実施された。調査地点は過去の土取りにより、墳丘断面が露出している場所である。後円部第一段平坦面から墳頂平坦面までの墳丘盛土と葺石等の外表施設の構築状況が明らかにされた。（肥後弘幸）

現地公開
（令和５年８月～令和５年12月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。

井手遺跡現地説明会の状況

佐屋利遺跡現地説明会の状況

現地説明会

井手遺跡　国営農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴い、亀岡市本梅町西加舎において令和３年度から発掘調査を実施してきた。調査を終了するにあたり、３年分の調査（第６次・第７次・第10次）成果を公表する現地説明会を９月23日（土・祝）に実施した。調査地は農家が点在する農村で緩斜面に雛壇状に小さな耕作地が営まれていた。調査の結果、これらの耕作地には古代末（11世紀後半）から中世（13世紀前半）にいたる掘立柱建物や土坑などが検出された。残暑厳しい中、39名の方々に見学いただいた。なお、９月27日（水）には、地元の本梅小学校の児童が現地の見学に訪れた。

佐屋利遺跡　国道312号道路新設改良事業に伴い、京丹後市峰山町荒山において発掘調査を実施してきた。今年度の調査では、戦国時代の平地居館に伴うと考えられる大規模な堀を検出した。10月28日（土）に実施した現地説明会では、堀が埋め立てられた時期に丹後守護の一色氏が滅んだという説明に98名の見学者は熱心に聞き入っていた。

このほか、10月29日（日）の京丹後市大宮町周枳地区の公民館祭りや11月５日（日）の亀岡市本梅町の文化祭で、出土した遺物を展示し、調査成果の説明を行っている。

普及啓発事業
（令和５年８月～令和５年12月）

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋

蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、小学生を対象とした体験教室、出前授業、「関西考古学の日」関連事業などの普及啓発活動を行っている。

なお、埋蔵文化財セミナー、展覧会、体験教室、普及啓発冊子「もっと知りたい京都の遺跡」の作成については、京都府教育委員会からの委託事業として実施している。

（１）埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナーは、京都府教育委員会と共催で年３回実施している。

第152回埋蔵文化財セミナー　向日市文化資料館での『発掘された京都の歴史2023』展会期中の８月19日（土）に、永守重信市民会館で『京都府内の発掘成果速報』と題して近年の府内の重要な発掘調査成果３件の報告を行った。まず最初に当調査研究センター森島康雄係長が京丹後市佐屋利遺跡の昨年度の調査成果を報告し、次いで（公財）京都市埋蔵文化財研究所の松永修平氏が平安京の外港・淀津の発見ではないかと注目された京都市淀水垂大下津町遺跡の調査成果を報告された。最後に、当調査研究センター菅博絵主任が、新名神高速道路建設に伴う６年間の発掘調査で、200年間古墳が造られ続けたことが明らかになった芝山古墳群について、報告書にまとめた成果を公表した。

第153回埋蔵文化財セミナー　12月９日（土）に木津川市の相楽会館大ホールにて、「奈良山をめぐる宮都と土器生産」と題して行った。当調査研究センターの課長補佐兼企画調整係長の筒井崇史が近年の発掘調査成果を「奈良山をめぐる宮都・集落・窯跡」と題して報告し、次いで、京都府教育委員

第152回埋蔵文化財セミナー会場風景

第152回埋蔵文化財セミナー菅主任報告風景

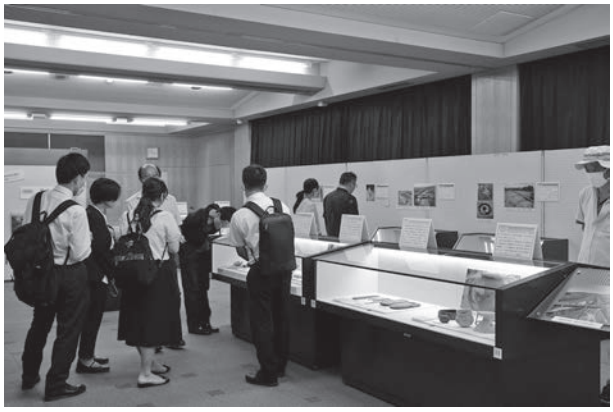
第153回埋蔵文化財セミナー会場風景

第153回埋蔵文化財セミナー座談会風景

会文化財保護課副主査の桐井理揮氏が恭仁宮跡の出土の土器と木津川市加茂町南部に所在する奈良山の須恵器窯跡群の存在に言及して『幻の都と焼き物の里－恭仁宮と奈良山所在の窯跡群の最新研究動向－』と題して報告を行った。最後に奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第二研究室長の神野恵氏が「平城京の人々の暮らしを支えた奈良山丘陵」と題して、奈良山丘陵の生産遺跡の役割を説明する中で、奈良時代前半期に奈良山丘陵に須恵器窯跡群が営まれたが、良質な粘土を求めて生駒丘陵に生産地が移動することに言及された。

（２）展覧会等

発掘された京都の歴史2023　当調査研究センターでは、毎年前年度の府内の発掘調査成果を一堂に報告する展覧会を、向日市文化資料館、ふるさとミュージアム山城（京都府立山城郷土資料館）、ふるさとミュージアム丹後（京都府立丹後郷土資料館）で巡回して実施している。展示は速報展示と企画展示から構成される。速報展は、当調査研究センターが調査した12遺跡と府内各機関が調査した11遺跡の計23遺跡から構成した。展示品は、縄文土器、石斧、弥生土器、古式土師器、須恵器、緑釉陶器、井戸枠、曲物、卒塔婆、陶磁器と多岐にわたり、展示点数は180点である。特に平安宮跡から出土した緑釉四足壺や佐屋利遺跡出土の白磁などが注目された。なお、昨年度向日市文化資料館でのみ展示を行った鶴尾遺跡出土の九九木簡については、保存処理が終了したので改めて展示を行った。企画展は、新名神高速道路建設に伴い６年間調査を行った芝山古墳群を取り上げ、銅鏡、埴輪棺、蛇行剣、須恵器などを展示した。比較資料として、八幡市ヒル塚古墳出土の銅鏡や木津川市上狛天竺堂１号墳出土のミニチュア土器なども展示した。また、芝山古墳群から出土した２本の蛇行剣に合わせて、当調査研究センターが調査した綾部市奥大石２号墳と南丹市城谷口２号墳から出土した蛇行剣（綾部市、南丹市保管）も展示し、府内出土の蛇行剣が一堂に会することになった。会期は、向日市文化資料


向日市文化資料館での展示観覧状況

ふるさとミュージアム山城での展示状況

ふるさとミュージアム丹後での展示状況

発掘された京都の歴史2023　展示目録

展示品	点数	出土地	調査機関
速報展示　発掘された京都の歴史2023			
1．平遺跡			
縄文土器片（前期）	2	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
縄文土器片（後期）	2		
石鏃	3		
石錐	1		
磨製石斧	2		
玉	2		
2．日吉ヶ丘遺跡			
弥生土器広口壺	1	与謝野町	与謝野町教育委員会
弥生土器短頸壺	1		
弥生土器鉢（バケツ形土器）	1		
石鏃	2		
柱状片刃石斧	1		
大型石包丁片	2		
碧玉製玉未成品	2		
石鋸	1		
3．大藪遺跡			
弥生土器台付壺	1	京都市	京都市埋蔵文化財研究所
弥生土器甕	1		
弥生土器鉢	2		
弥生土器高杯	1		
4．備前遺跡			
甕	3	八幡市	八幡市教育委員会
器台	1		
ミニチュア土器	1		
石剣片	2		
石戈片	1		
5．立山古墳群			
パネル展示		京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
6．岡ノ宮古墳群			
瑪瑙勾玉	2	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
緑色凝灰岩管玉	4		
7．奉日部遺跡			
土師器丸底壺（坩）	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
土師器鉢	1		
土師器高杯	1		
ミニチュア土器	1		
須恵器杯蓋	1		
須恵器杯身	1		
須恵器取っ手付き椀	1		
須恵器甑	1		
製塩土器	4		
8．西加舎遺跡			
土師器壺	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
土師器椀	1		
土師器鉢	1		
ミニチュア土器	2		
須恵器杯身	1		
製塩土器	3		
9．淀水垂大下津町遺跡			
古式土師器壺	1	京都市	京都市埋蔵文化財研究所
古式土師器甕	3		
古式土師器鉢	2		
古式土師器小形器台	1		
10. 法貴古墳群			
須恵器杯蓋	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
須恵器杯身	1		
須恵器無蓋高杯	1		
須恵器短頸壺	2		
須恵器短頸壺蓋	1		
土師器椀	1		
須恵器杯B蓋	1		
須恵器杯B身	1		
須恵器平瓶	1		
11. 木津川河床遺跡			
弥生土器甕	1	八幡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
古式土師器甕	1		
古式土師器小形丸底壺	1		
古式土師器小形丸底鉢	1		
古式土師器小形器台	1		
琵杖（木玉）	1		
曲物（小）	1		
曲物（大）	1		
井戸枠材（最下段一式）	1		
12. 鶴尾遺跡			
九九木簡	1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
荷札木簡	1		
習書木簡	1		
下駄	2		
斎串	1		
13. 北野台遺跡			
須恵器杯B蓋	2	綾部市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
須恵器杯A	1		
須恵器杯B	1		
黒色土器鉢	1		
墨書土器片	3		
土錘	6		
14. 長岡京跡左京第670次			
土師器皿	1	長岡京市	長岡京市埋蔵文化財センター
墨書のある土師器皿	1		
須恵器杯B蓋	1		
須恵器杯B	1		
黒色土器椀	1		
転用硯	1	長岡京市	長岡京市埋蔵文化財センター
製塩土器	1		
鋳型	1		
取鍋	1		
ふいご羽口	1		
和同開珎	1		
15. 乙訓寺			
パネル展示		長岡京市	長岡京市埋蔵文化財センター
16. 平安宮跡			
緑釉三足壺	1	京都市	京都市埋蔵文化財研究所
17. 佐井利遺跡			
黒色土器椀	1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
墨書のある須恵器蓋	1		
須恵器小壺	1		
土師器小皿	1		
土師器皿	2		
白磁椀	1		
白磁皿	2		
宋銭（熙寧元宝、元豊通宝、招聖元宝）	3		
石鍋片	1		
18. 淀水垂大下津町遺跡			
土師器小皿	4	京都市	京都市埋蔵文化財研究所
土師器皿	5		
瓦器椀	1		
瓦質灯篭	1		
青磁椀	1		
擂鉢（備前）	1		
漆椀	1		
卒塔婆	1		
19. 堀城跡			
パネル展示		京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
20．女布遺跡			
木簡	3	舞鶴市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
21．園部城跡			
伊万里染付椀	1	南丹市	南丹市教育委員会
唐津平鉢	1		
伊万里筆立て	1		
志野向付	1		
織部向付	1		
景徳鎮青花小皿	1		
丹波焼胞衣壺（蓋付）	1		
京焼土瓶（蓋付）	1		
軒丸瓦	1		
22．山家城跡			
青花磁器（景徳鎮）	1	綾部市	綾部市教育委員会
丹波焼擂鉢	1		
唐津焼茶椀	1		
鍋島焼大皿	1		
備前徳利（保命酒）	1		
丹波焼鉢	1		
清水焼椀	1		
肥前系灯火具	1		
肥前系磁器	1		
肥前系染付椀	1		
23．淀城跡			
段重蓋（肥前系）	1	京都市	京都市埋蔵文化財研究所
段重（肥前系）	1		
椀（肥前系）	1		
椀（瀬戸美濃系）	1		
椀蓋（瀬戸美濃系）	1		
植木鉢（肥前系）	2		
軒平瓦	2		
合　　計	180		
企画展示　芝山古墳群			
Ⅳ－２号墳出土獣形鏡	1	城陽市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
Ⅳ－４号墳出土方格規矩鏡	1		
ヒル塚古墳出土方格規矩鳥文鏡	1	八幡市	八幡市教育委員会
Ⅲ-２号墳出土蛇行剣	2	城陽市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
奥大石２号墳出土蛇行剣	1	綾部市	綾部市教育委員会
城谷口２号墳出土蛇行剣	1	南丹市	南丹市教育委員会
円筒埴輪	1	城陽市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
盾の文様を持つ埴輪	1		
Ⅱ-１号墳出土須恵器杯蓋	1		城陽市教育委員会
Ⅱ-２号墳出土須恵器杯身	1		
Ⅱ-４号墳出土須恵器甕	1		
Ⅰ-17号墳出土須恵器杯蓋	6		京都府埋蔵文化財調査研究センター
Ⅰ-17号墳出土須恵器杯身	8		
Ⅰ-18号墳出土須恵器杯蓋	1		
Ⅰ-18号墳出土須恵器杯身	1		
Ⅰ-18号墳出土須恵器横瓶	1		
Ⅰ-18号墳出土須恵器無蓋高杯	1		
Ⅰ-18号墳出土土師器壺	1		
Ⅰ-18号墳出土土師器台付壺	1		
Ⅰ-18号墳出土土師器ミニチュア台付壺	3		
Ⅰ-18号墳出土土玉	1連		
上狛天竺堂１号墳出土須恵器杯蓋	1	木津川市	木津川市教育委員会
上狛天竺堂１号墳出土ミニチュア台付壺	2		
上狛天竺堂１号墳出土ミニチュア甑	2		
上狛天竺堂１号墳出土装身具	1連		
Ⅱ-２号墳周溝最上層出土須恵器杯身	1	城陽市	城陽市教育委員会
Ⅱ-２号墳周溝最上層出土須恵器杯身	1		
合　　計	44		

歴彩館パネル展示実施状況

歴彩館京都学ラウンジミニ講座講義風景

府庁２号館ロビー展示状況

館が８月５日(土)から８月27日(日)までの20日間(来館者1,428人)、ふるさとミュージアム山城が９月７日(木)から18日(月)までの11日間(来館者466人)、ふるさとミュージアム丹後が10月７日(土)から11月12日(日)までの32日間(来館者743人)である。３館とも昨年度に比べて入館者数は増加し、総入館者数は2,635人(昨年度1,709人)に達した。コロナ前に比べると、高齢の方の入館者が戻ってきていないと思われるが、向日市文化資料館では子供向きの展示品をデザイン化したプラバンづくりが復活するなどして、多くの子供たちが来場したことはうれしい限りである。

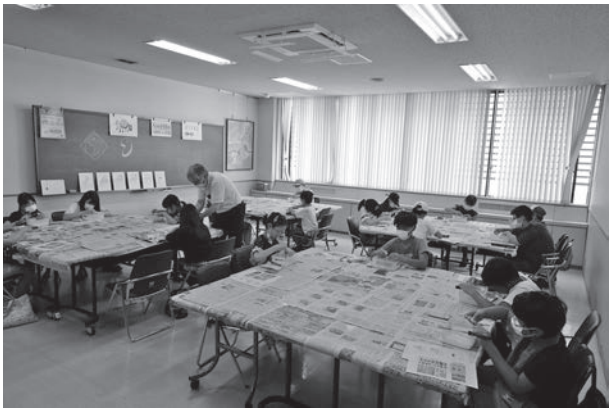
歴彩館パネル展示　京都府立京都学・歴彩館京都ラウンジで、共催事業として「発掘された京都の歴史2023」パネル展を開催した。巡回展示中の「発掘された京都の歴史2023」展の内容をパネル展示するもので、３年目を迎えた。当調査研究センターが20枚のデジタルデータを作成し、歴彩館で印刷・掲示していただく企画である。合わせて、芝山古墳群出土の銅鏡１枚と須恵器７点を展示・解説した。会期は令和５年10月１日から10月31日までで、488人の方が来場した。会期中、歴彩館主催の「京都学ラウンジミニ講座　パネル展『発掘された京都の歴史2023』を通してみた古代史」に２回講師を派遣した。

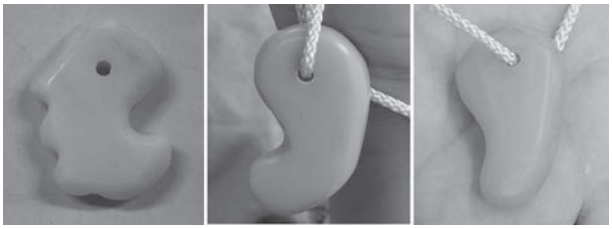
府庁２号館ロビー展示　京都府庁の職員及び来訪者向けの展示スペースで、埋蔵文化財保護の啓発と当調査研究センターの活動報告を兼ねたミニ展示を毎年実施している。今年度は、12月19日(火)から12月27日(水)までの間、「芝山古墳群－200年続いたお墓－」と題して芝山古墳群出土の銅鏡３枚、円筒埴輪、蛇行剣２振り、土玉１連、須恵器４点、土師器１点、ミニチュア土器３点を展示した。

(３)体験学習・出前授業等

夏休み考古学体験講座　勾玉をつくろう　令和５年８月16日(水)・17日(木)・18日(金)の３日間の午前・午後、計６回にわたり、当調査研究センター研修室で、乙訓教育局管内の小学５・６年生を対象として体験講座を実施した。１講座20人として募集したところ、17校計115人の参加があった。

児童たちは、１時間30分ほどの作業時間の中、センター職員の指導のもと、楽しく勾玉を作成した。なお、昨年度までは新型コロナウイルス対策として１講座の参加人数を少なく抑えていた。





勾玉をつくろう実施状況（上）と参加者の作品（下）

出前授業　７月26日（水）に長岡京市長法寺小学校からの依頼を受けて、５・６年生を対象とした勾玉教室を実施した。参加人数は51人である。

９月２日（土）に向日市内に所在する洛南高等学校附属小学校からの依頼を受けて、「親子ふれあい行事」として出前授業を行った。小学校５年生と保護者計158人を対象に、縄文土器、須恵器、近世陶磁器などの出土遺物を実際に触れて歴史を体感してもらう機会と木范を利用して軒丸瓦を制作してもらう機会などを提供した。

瓦づくりに挑む児童（洛南高校附属小学校）

第31回大中まつり　11月４日（土）に兵庫県立考古博物館・大中遺跡公園にて、考古学体験ブース「軒丸瓦を作ろう！」を出展し、101人の参加者を得た。

関西考古学の日関連講座　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックが行う普及啓発事業「関西考古学の日」の事業として、少人数を対象とした『中堅職員による考古学講座』を10月14日（土）と11月11日（土）の２回開催した。第１講座が面将道主任による「屋久島の考古学」（参加者15人）、第２講座が竹村亮仁主任による「イギリス人がみた日本の古墳－大英博物館とゴーランドの古墳研究－」（参加者20人）である。

（４）普及啓発誌「もっと知りたい京都の遺跡」の刊行

令和５年度１冊目（第13号）として、縄文時代から中世までの調理具の移り変わりを紹介した「昔の調理具－煮る・炊く・蒸す－」を刊行した。

（５）その他

当調査研究センターの情報発信は、ホームページを中心に行ってきたが、これに加えて、令和５年８月から、試行的にＳＮＳ（Social Network Service）のフェイスブックとＸでの発信を始めた。

センターの動向

（令和５年８月～令和５年12月）

８　１　カンジョガキ遺跡（京丹後市）現地調査開始

５　「発掘された京都の歴史2023」展開始（於：向日市文化資料館　~27日）

16～18　夏休み考古学体験講座「勾玉をつくろう！」（於：当調査研究センター）　参加者115人

19　第152回埋蔵文化財セミナー「京都府内の発掘調査成果速報」（於：永守重信記念会館）　参加者83名

22　役員協議会（於：当調査研究センター・向日市文化資料館）

23　長岡京連絡協議会（於：当調査研究センター）

27　「発掘された京都の歴史2023」展終了（於：向日市文化資料館）　入館者1,426人

31　春日部遺跡（亀岡市）現地調査終了（５月25日～）

９　２　洛南高等学校附属小学校「親子ふれあい行事」出前授業　参加者158名

６　第１回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックＯＡ委員会（於：奈良市）筒井課長補佐、武本主任出席

７　巡回展「発掘された京都の歴史2023」開始（於：ふるさとミュージアム山城　~18日）

９　「発掘された京都の歴史2023」展示解説（於：ふるさとミュージアム山城）講師：筒井課長補佐

12　井手町文化講演会「栢ノ木遺跡の発掘調査成果と橘諸兄・橘嘉智子」（於：井手町）講師　福山主任

18　巡回展「発掘された京都の歴史2023」展終了（於：ふるさとミュージアム山城）　入館者466人

20　新古代史解体新書講演会「弥生王墓の展開－日本海交易のネットワークを探る」（於：京都府立山城勤労者会館）講師：高野課長補佐

23　井手遺跡（亀岡市）現地説明会　参加者39名

25　フキ岡遺跡（京丹後市）現地調査開始

27　亀岡市本梅小学校井手遺跡現地見学　参加者10名、長岡京連絡協議会（於：当調査研究センター）

28　井手遺跡（亀岡市）現地調査終了（５月25日～）

10　１　「発掘された京都の歴史2023」パネル展開始（於：京都府立京都学・歴彩館～31日）

５　京都学ラウンジミニ講座　パネル展「発掘された京都の歴史2023」を通してみた古代史！①「古墳時代における蛇行剣の出土とその背景」（於：京都府立京都学・歴彩館）講師：小池調査課長

７　巡回展「発掘された京都の歴史2023」開始（於：ふるさとミュージアム丹後　～11月12日）

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック関西考古学の日記念講演会「ヤマト王権の内部領域とその周縁」（於：長岡京市中央生涯学習センター）「政治構造の変革と流通拠点の様相」講師：小池調査課長

文化財講演会「発掘された京都の歴史2023のみどころ」（於：ふるさとミュージアム丹後）講師：肥後課長補佐

10　與能遺跡（亀岡市）現地調査終了（５月25日～）

12　京都学ラウンジミニ講座　パネル展「発掘された京都の歴史2023」を通してみた古代史！②「考古学から見た内陸部の『塩』の調達」（於：京都府立京都学・歴彩館）講師：小池調査課長

14　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック関西考古学の日2023考古学講座「屋久島の考古学」（於：当調査研究センター）講師：面主任　参加者15名

19　拝田14号墳(亀岡市)現地調査開始

25　芝山遺跡第23次(城陽市)現地調査終了(５月22日～)、長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)

新古代史解体新書講演会「前方後円墳の出現－椿井大塚山古墳の被葬者と山背地域開発」(於：京都府立山城勤労者会館)講師：高野課長補佐

27　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：長岡京市)常田次長、鍋田課長補佐出席

28　佐屋利遺跡(京丹後市)現地説明会　参加者98名

29　京丹後市周枳地区公民館祭発掘調査出土品展示

30　芝山遺跡第22次(城陽市)現地調査終了(５月22日～)

31　老田遺跡(京丹後市)現地調査終了(７月１日～)

「発掘された京都の歴史2023」パネル展終了(10月１日～)入場者488名

11　1　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：茨城県～２日)小池調査課長、松浦主事出席

2　松田墳墓群(京丹後市)現地調査終了(５月８日～)

4　第31回大中遺跡まつり出展「軒丸瓦をつくろう！」(於：兵庫県立考古博物館・大中遺跡公園)

5　亀岡市本梅町文化祭井手遺跡出土品展示(於：本梅町自治会館)

6　木津川河床遺跡(八幡市)現地調査開始、長岡京跡ほか(長岡京市)現地調査開始

女布遺跡(舞鶴市)現地調査開始、上安久城跡(舞鶴市)現地調査終了(６月27日～)

7　亀岡市曽我部小学校法貴古墳群現地見学　６年生　参加者32名

11　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック関西考古学の日2023考古学講座「イギリス人が見た日本の古墳－大英博物館とゴーランドの古墳研究－」講師：竹村主任　参加者20名

12　巡回展「発掘された京都の歴史2023」終了(於：ふるさとミュージアム丹後)入館者743名

14　佐屋利遺跡(京丹後市)現地説明会　参加者98名

16　岡ノ宮城跡(京丹後市)現地調査開始

22　長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)

25　京都橘大学文学部歴史遺産学科校外授業受け入れ(於：千代川遺跡)

12　3　第45回木簡学会総会・研究集会「京丹後市鷹尾遺跡と出土木簡」(於：奈良文化財研究所)講師：筒井課長補佐

4　小中田古墳群(京丹後市)現地調査開始

9　第153回埋蔵文化財セミナー「奈良山をめぐる宮都と土器生産」(於：木津川市相楽会館)参加者57名

11　平遺跡(京丹後市)現地調査終了(８月23日～)

14　岡ノ宮城跡(京丹後市)現地調査終了(11月16日～)

17　令和６年４月採用職員選考第一次試験(於：永守重信市民会館)

19　京都府庁２号館ロビー展示開始(～12月27日)

20　長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)

22　第48回理事会(於：京都ガーデンパレス)

編集後記

正月早々、能登半島が大地震に見舞われました。心から亡くなった方々のご冥福をお祈りし、いち早い地域の復興をお祈りします。

ここに『京都府埋蔵文化財情報』第146号が完成しましたので、お届けします。本号は、論文１本、研究ノート２本、共同研究１本など充実した内容になっておりますので、ご一読いただきますようお願いします。

今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

（編集担当　肥後弘幸）

京都府埋蔵文化財情報 第146号

令和６年１月31日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone（075）933-3877（代）　Fax（075）922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER